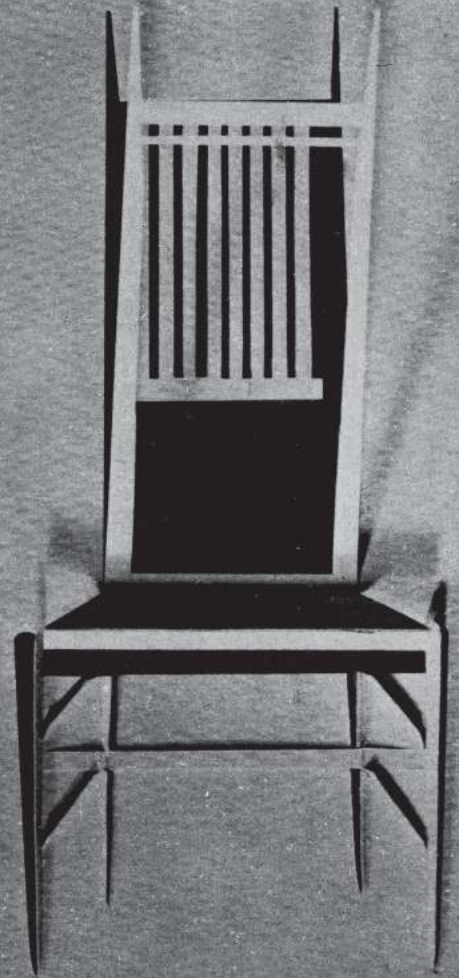


昭和24年3月19日第3種郵便物認可 昭和36年5月20日印刷 昭和36年5月25日発行 第42巻第5号（毎月1回25日発行）

建築と社会

5/1961

インテリア特集



日本建築協会

歴代の会誌表紙 Vol.42 インテリア特集

特集 こだわりの空間料理人

2018 12
Vol.99 No.1161

建築と社会

Architecture and Society 日本建築協会

平成30年度 建築工事实務講習会

【この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(6単位)】

■講習会会場(大阪府建築健保会館)
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町
四丁目駅 8号出口より徒歩 5分



日 時：2019年 1月17日(木)
9:00~17:30
会 場：大阪府建築健保会館
6Fホール
大阪市中央区和泉町2-1-11
TEL: 06-6942-3622
定 員：100名(先着順)
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて、
①催し名「実務講習会」
②受講者氏名(年齢)
③事業所名
④受講票送付先住所
⑤担当責任者
⑥E-mailアドレス
⑦電話番号
⑧受講料支払方法
(銀行振込、郵便振替、等)
⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。
受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。
なお、当会HPからもお申込いただけますので、<http://www.aaj.or.jp>をご覧ください。

■申込先
(一社)日本建築協会(担当 内山)
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp
URL: <http://www.aaj.or.jp>

＜振込先＞
●三井住友銀行
大阪中央支店 普通 0860034
●三菱UFJ銀行
瓦町支店 普通 0210054
●りそな銀行
北浜支店 普通 0272234
●郵便振替口座 00910-9-39975
名義 シャ)ニホンケンチュクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容
●本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。
●現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■科目・講師

施工計画

川井 裕基 氏

鹿島建設㈱関西支店
パナソニック草津W15棟工事事務所所長

北野 祥児 氏

清水建設㈱関西支店
生産計画部受注支援グループ長

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

山口 紀広 氏

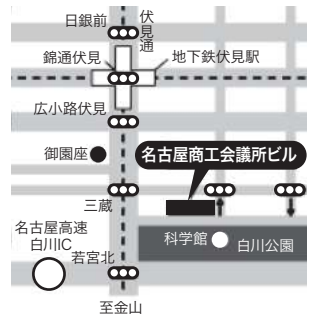
㈱大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第三課課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

【この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。
(公社)愛知建築士会(6単位)】

■講習会会場
(名古屋商工会議所ビル)



日 時：2019年 1月23日(水)
9:30~17:00
会 場：名古屋商工会議所ビル 9階
愛知建築士会内
名古屋市中区栄2-10-19
定 員：60名(先着順)
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて
①講習会名
②郵便番号・住所
③受講者氏名・年齢
建築CPD単位申請希望者は氏名の下にCPD登録番号を明記
④事業所名
⑤申込担当者名
⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス
⑦受講料支払方法(銀行振込等)
受講料は前払制となっておりますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。
■締切日 2019年 1月15日(火)
但し、定員に達し次第締め切ります。

■申込先
(一社)日本建築協会 東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル・9階
(愛知建築士会内)
TEL: 052-201-2201
FAX: 052-201-3601
E-mail: info@aaj-tokai.jp
URL: <http://www.aaj-tokai.jp>

＜振込先＞
●三菱UFJ銀行
栄町支店(普通 0167157)
シャ)ニホンケンチュクキョウカイトウカイシブ
一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容
●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●積算業務では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画

日吉 智紀 氏

清水建設㈱名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

相原 仁史 氏

㈱大林組名古屋支店
建築工事部建築生産技術第一課課長

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原 陽 氏

㈱竹中工務店名古屋支店
見積部建築3グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

日本建築協会中国支部主催 建築工事实務講習会

〔この講習会は、建築CPD情報提供
制度プログラムです。
建築関連CPD（6単位）〕

■講習会会場

- （広島工業大学 広島校舎）
・広電市内電車 袋町または中電前
下車
・広島バス 平和記念公園前下車



日 時 2019年 2月14日(木)
9:30~17:00
会 場 広島工業大学 広島校舎
広島市中区中島町5-7
定 員 60名
受講料 15,000円(含テキスト代 税込)
※テキストは、当日配布させていただきます。

■申込方法

FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名（フリガナ）
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号・FAX番号
- ⑦受講料支払方法（銀行振込等）
- ⑧CPDを申請される方は、申請先の
団体名をお知らせ下さい。

受講料は前払制となっていますので、
併せて銀行振込等で納入して下さい。
受講料入金確認後、受講票をお送り
いたします。

■申込締切 2019年 2月 6日（水）
（ただし定員になり次第
締切）

■受付時間 9:00~17:00
（土、日、祝除く）

■申込先

（一社）日本建築協会 中国支部
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9
（相生通り鷹匠ビル 4 階山陽工業(株)内）
TEL 082-232-6471
FAX 082-291-2233
E-mail: info@aaj-chugoku.jp
URL: http://www.aaj.or.jp

＜振込先＞

●広島銀行
本川支店（普通 3424438）
（シャ）ニホンケンチクキョウカイチュウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容

- 本講習会は、官公庁・設計事務所・
建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い
分野の技術者を対象としたもので
す。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮
設見積、現場実務の基礎である積算業
務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の
改正なども加え、技術の進歩に即応し
た知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例により、そ
の着工準備から完成に至るまでをわか
りやすく解説します。

施工計画

井上 昇 氏

清水建設(株)広島支店
グループ長

適切な施工計画を立案できることが、
建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説し
ます。

仮設見積

尾野本 悟 氏

広島工業大学
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握し
にくい面があって、つつい単位面積
当たり、あるいは請負金比率のみで
処理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見
積方法を解説します。

積算業務

八道 憲一 氏

鹿島建設(株)中国支店
次長

見積業務の中で基本となるのは、数量
積算です。この手順、基準を基本に、
より合理的で正確な積算業務を解説し
ます。

日本建築協会京都支部：主催
（公社）日本建築家協会京都
地域会・事業委員会文化財担
当委員会：共催

勉強会 「京都のまちの 色について」 —景観を色で考える—

京都は世界遺産や観光資源が多く近年
外国人観光客にも人気の場所となっ
ております。
その一方で古くから住まう人々の生活
の場でもあり続けています。
そんな京都が一体何色なのか調べてみ
るとイメージとは違う現状の京都のま
ちの色が見えてきました。
京都の伝統と、文化と、地域社会を考
えるきっかけとなればと今回は調査研
究の途中報告をさせていただきたく思
います。



■講師プロフィール

上村明美（かみむら あけみ）
株式会社マックス代表取締役
山口大学工学部社会建設工学科卒業
街の色研究会事務局

日 時 2019年 1月18日(金)
18:30~20:30
（質疑30分含む）
定 員 25名（先着順）
参 加 費 会員1,000円(主催・共催 共)
一般1,500円
学生 500円



会 場 京都建設会館別館4F会議室
（京都市中京区押小路通柳
馬場東入橋町641）

最 寄 駅 地下鉄東西線「市役所前」駅
より徒歩7分、地下鉄烏丸線
「烏丸御池」駅より徒歩10分

申込方法 ①講演会名「1/18勉強会」、
②氏名、③勤務先・学校名、
④当日連絡先、⑤E-mail
アドレス又はFAX番号、
⑥会員、一般、学生の別
上記項目を明記しFAXで
下記へお申し込みください。

申 込 先 （一社）日本建築協会京都支部
事務局 FAX 075-255-6077



チラシ封入サービスのご案内

会員限定

貴社の広告チラシを「建築と社会」発送と“同封”しませんか。
チラシをご提供下さい。

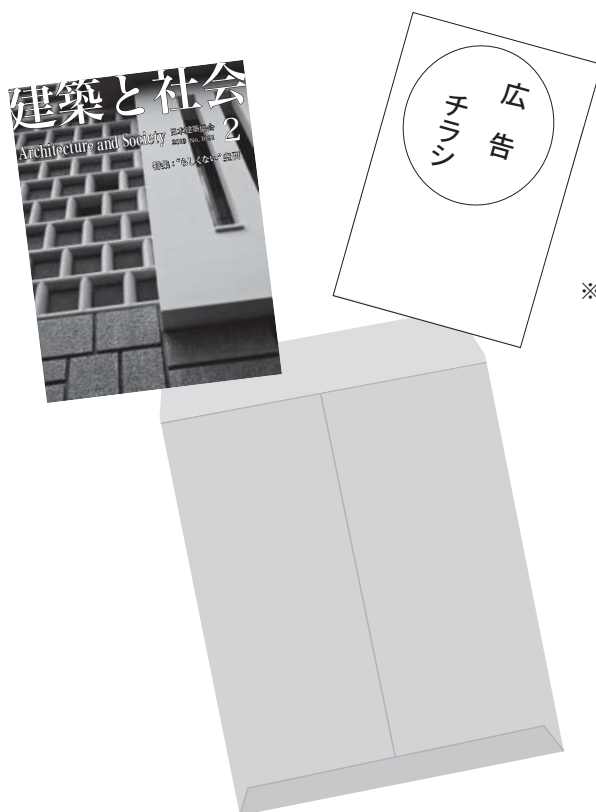
料金 1回につき **20,000円** (税別)

当協会でチラシをプリント（カラー片面）した場合20円/枚必要です。

申し込み方法：申込用紙にご記入いただきFAXまたはE-mailでお送り下さい。

お問合せは（一社）日本建築協会（担当/内山）まで

TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984 E-mail:jigyoka@aj.or.jp



※チラシサイズ：A4版
パンフレット：20頁程度迄

申込用紙 きりとり

会社名		
ご連絡先 (住所・担当者名・部署名)	住所 担当者名	部署名
ご連絡先 電話番号・E-mail	電話番号 E-mail :	

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2018 12

Vol.99 No.1161

■特集予告

● 1月号／共生社会のまちづくり(仮)

● 2月号／第25回私の空間作法

特集 こだわりの空間料理人

【各論】

- 1 街並みのアイデンティティとしての窓●塚本晃子 ————— 10
 - 2 空気にこだわる
エアキスと更なる健やか住環境創造研究●松下和彦 ————— 12
 - 3 “らしさ”にこだわる
大阪中津らしさを表現した空間再編
“キタの北ナガヤ”プロジェクト●小野達哉 ————— 14
 - 4 木造にこだわる
～シンプルな木架構による豊かな建築を目指して～●寺村雄機 — 16
 - 5 庭にこだわる●辰巳耕造 辰己二郎 ————— 18
 - 6 インタビュー
東京コルクプロジェクト●北村真吾 ————— 20
 - 7 ツリーハウスに魅せられて●小林 崇 ————— 22
 - 8 光にこだわる●池田俊一 ————— 24
- 【編集後記】 ————— 27

会告	平成30年度建築工事実務講習会（本部、東海支部） 平成30年度建築工事実務講習会（中国支部）、京都支部 主催 勉強会「京都のまちの色についてー景観を色で 考えるー」	1
作品作風	千寿製薬本社 ホテルヴィスキオ大阪	4 6
gallery	宇奈月温泉総湯●小原賢一＋深川礼子	8
法令コーナー	奈良県における「民泊」●浅井一学	29
設備の頁	無人航空機による三次元形状復元技術を活用した 災害対策●松浦孝英	30
再読 関西の建築	太陽の神殿〔黒住教大教殿〕●安田徹也	31
新製品レヴュー	「経年変化を楽しむ」デニムフロア ●田島ルーフィング株式会社	36
第99集総目録	2018（平成30）年	38
information	企画展 オブジェクト・ポートレート Object Portraits by Eric Zetterquist／洋菓子の道具たちー型で味わうお 菓子の歴史ー／特別展 明治150年記念 日本を変えた千 の技術博／フィリップス・コレクション展	42
月間の動き	平成30年10月	44

今月の表紙

今回の表紙は1961年のインテリア
特集の表紙です。建物だけでなく鉄
道や造船におけるインテリアもテー
マとして取り上げています。

この頃の特集は、新しい建材や設備
が増えているためか「材料」「設備」
「施工」といったキーワードの特集
が頻繁に組まれています。

都市計画や、開発、宅地、福祉施
設、といったキーワードも年に1回
ぐらい取り上げられますが実務的な
情報が求められていたのでしょう。

1963年からは「技術の頁」の連載
が始まっています。



外観



エントランスホール



水景



執務室内ボイド



ボイドから執務フロアを望む



窓側のリフレッシュスペース

千寿製薬本社

建 築 主 千寿製薬株式会社
 ランドスケープデザイン 光嶋裕介建築設計事務所
 設計・監理 清水建設関西支店 一級建築士事務所
 施 工 清水建設関西支店

執務エリア内でのコミュニケーションを最大化するため、空間・動線・視線が階や部門を越えて連続することをオフィスデザインのキーテーマとした。

窓先に設けた5層のボイド空間により執務フロアを上下に連続させた。そこに設けたオープンな階段により、障壁の少ない同一セキュリティ内での移動を実現し、利便性と安全性を図った。

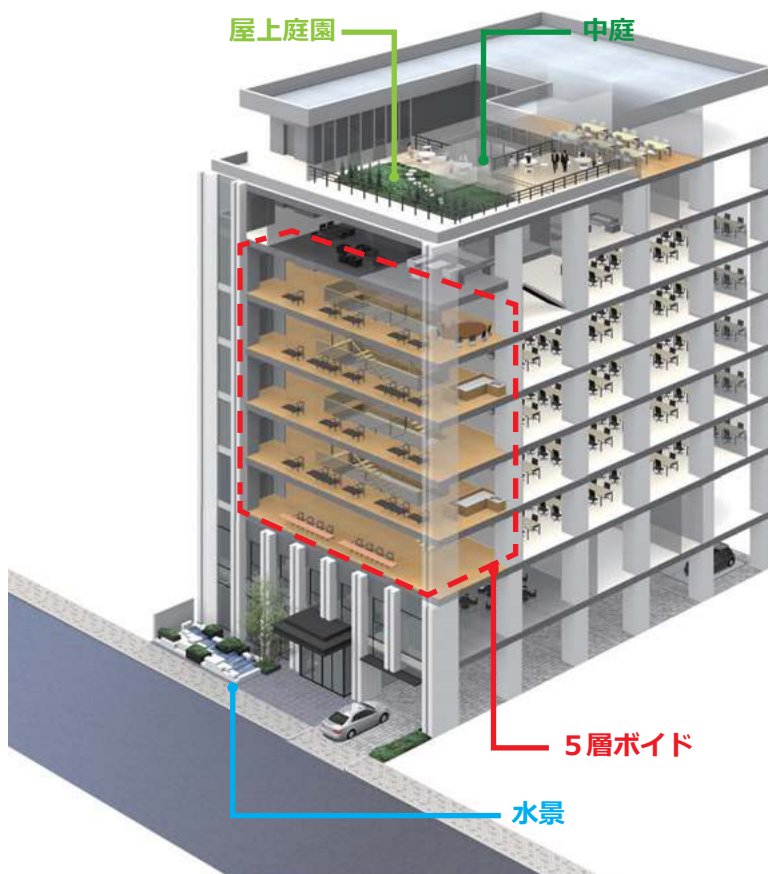
各所のデザインテーマを泪（なみだ）とし、水の持つ透明さ、連続感、潤いを建物の各所にちりばめ、企業イメージのメタファーとした。
 （中庭の緑、泪を表現した壁面、しずくをモチーフとしたサイン照明、水景）

垂直に伸びる連続した石柱により、端正で重厚なファサードとした。奥行きのある石柱は、十分な採光と西日の抑制を両立している。
 デシカント空調により、快適な空調環境とエネルギー消費の抑制を図った。

執務室は自然排煙を採用し、中間期の自然風利用及び、災害時など空調停止時の換気を可能としている。（BCP対応）

（迫淳海・乗越由香／清水建設）

所 在 地 大阪市中央区瓦町3丁目
 敷地面積 995.75㎡
 建築面積 772.49㎡
 延床面積 6,379.34㎡
 構造規模 S造 地上9階
 工 期 2016年9月～2018年1月
 最 寄 駅 大阪メトロ御堂筋線 本町駅
 撮 影 エスエス大阪



屋上庭園



コミュニケーション・ライブラリー



中庭



中庭に面したホール



外観



ロビー・ラウンジ (夕)

ホテルヴィスキオ大阪

建 築 主 JR西日本不動産開発株式会社
 株式会社ジェイアール西日本ホテル開発
 設計・監理 竹中工務店（設計）
 安井建築設計事務所（基本計画・設計監修・監理）
 施 工 竹中工務店

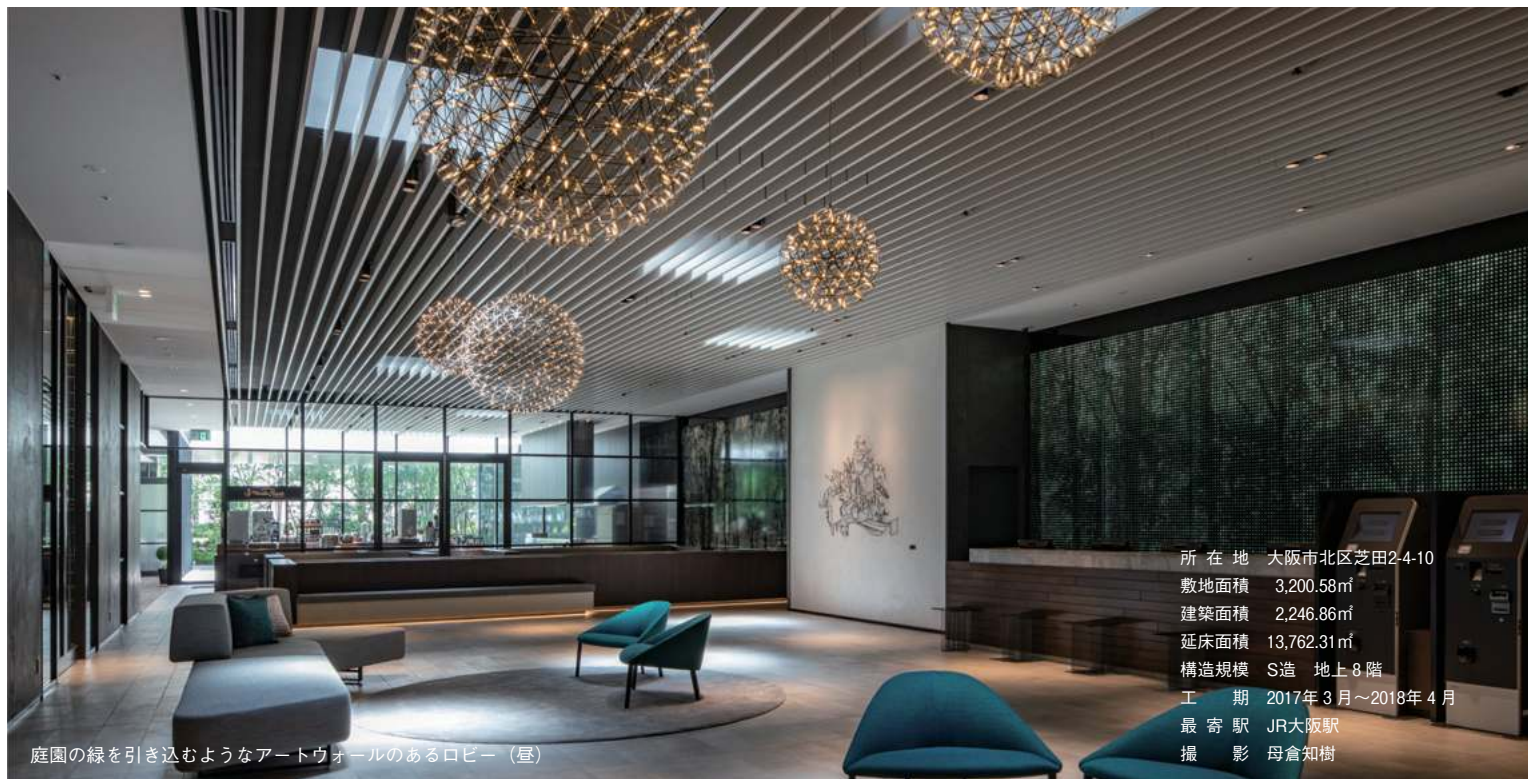
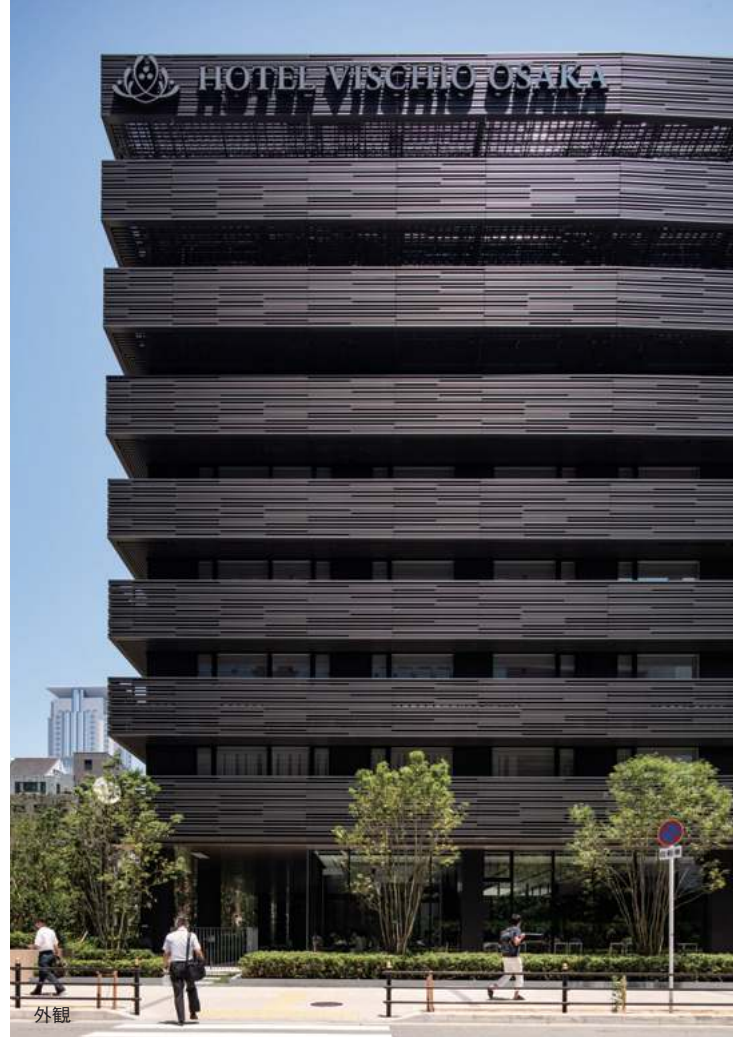
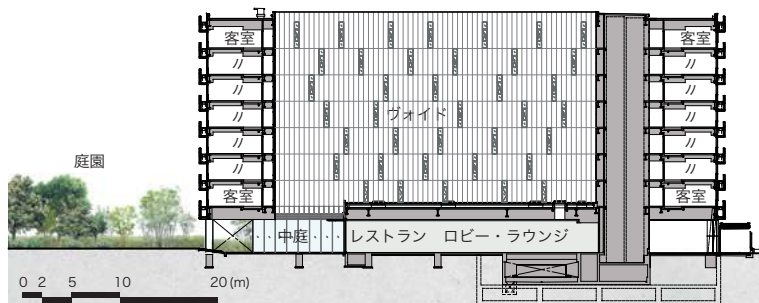
JR西日本ホテルズの新たなブランド「ホテルヴィスキオ」第1号となる400室の客室を収容する宿泊主体型ホテルのプロジェクト。

計画地の北隣にJR西日本本社敷地内の緑豊かな庭園があり、周囲にも大阪駅北地区の再開発により緑地や街路樹が整備されており、都心でありながら自然豊かな場所に位置している。そこで自然の要素である「光・風・水・緑」のイメージをゲストの体験に取り入れ、ホテルブランドの目指すリラックスと寛ぎの空間を体现することを目指した。

1階の中央には北隣の庭園の緑に面する中庭を設け、そこに連続するように木立をイメージしたアートウォールを設置。常に外部の自然とのつながりを感じることのできるロビー空間とした。2～8階の基準階は効率的な客室配置の上で中心に大きなヴォイドを設け、緑地側に設けている中庭から風が通り抜けるよう環境シミュレーションを行い、ゲストルームの環境及び空調効率の向上をはかっている。

建築物の全周を覆っている避難バルコニーには室外機及び給排気口を組み込んだ上で、3種類のアルミルーバーの組み合わせにより自然なパターンを形成、バルコニーの張出寸法に繊細な操作を加えることで雲や水のような自然のイメージを表現した。画一的になりがちなホテルのファサードに奥行と物質感を与え環境とゆるやかに呼応する建築となることを意図している。

（鈴木雅史、三和盛彦、沢田拓郎／竹中工務店）



庭園の緑を引き込むようなアートウォールのあるロビー（昼）

所在地 大阪市北区芝田2-4-10
 敷地面積 3,200.58㎡
 建築面積 2,246.86㎡
 延床面積 13,762.31㎡
 構造規模 S造 地上8階
 工期 2017年3月～2018年4月
 最寄駅 JR大阪駅
 撮影 母倉知樹

宇奈月温泉総湯

建築家

小原賢一＋深川礼子

■湯の街の新しいありかたをつくる
温泉街の中心となる総湯である。新しい観光のあり方を模索し、暮らしと観光の交わる「湯の街の大きな家」をめざした。建物は、傾斜屋根や色合いは街並みに調和しながら、大型の格子を通して木の大きな塊が見える、街のシンボルとして特徴ある外観とした。

■街とつながり、街をつなぐ
閉鎖的になる浴室を上階とし、1階は案内所とフリースペースなどパブリックエリアとした。南側は大きく開放できる格子戸として街に開き、敷地南北に面する道路まで見通しと通り抜けを作ること、で街の回遊性を高めている。上階には涼み処を設け、賑わいを街へ伝える。

■湯の街の魅力を高める
浴室には座湯やベンチなどの居場所を、浴槽を囲むように設えた。お湯にふれながら、ゆっくり過ごし、言葉を交わしてもらえたらと考えている。内壁には地域産の杉を、浴槽には黒部川の石を使い、宇奈月ならではの色と肌ざわりの空間となった。夜には、格子戸から光があふれて街をやわらかく照らしている。

■住民による活用も一緒につくる
設計と平行して住民WS等では施設の活用の検討企画、実験が行われ、市と地域とともに動いてきた。竣工直後から、住民によって多くの企画が行われ、観光の賑わいと地域活動の拠点となっている。



通りに面し、場所も機能も温泉街の中心にあたる総湯



格子引き戸を大きく開いて街とつながる観光案内スペース



湯の周りに居場所を配した浴室 湯底は黒部川の石



街と山なみを望む涼み処



前面の格子引き戸を開き、見通し、通り抜け、居場所を作って街との連続性を高める
撮影：鈴木研一

小原 賢一（おはら けんいち）

1991 東京都立大学工学部建築工学科卒業
1991 株式会社飯田善彦建築工房
2011 ofa 共同主宰
2014 株式会社ofa 代表取締役

深川 礼子（ふかがわ あやこ）

2004 東京大学大学院
新領域創成科学研究科 修了
2004 株式会社飯田善彦建築工房
2008 深川礼子建築設計事務所設立
2011 ofa 共同主宰
2014 株式会社ofa 代表取締役

建物概要

用 途：公衆浴場・観光案内所
・住民フリースペース

階 数：地上4階／地下1階

構 造：鉄骨造

建築面積：332.36㎡

延床面積：1092.96㎡

竣 工：平成28年4月



撮影：ofa



撮影：studio-L

企画編集：稲垣和江(作品作風小委員会)

特集

こだわりの空間料理人

建築・インテリア・ランドスケープなどの空間が出来上がったとき、そこに作り手の強いこだわりを感じるものが少なくない。デザインのみならず、過ごし方や使われ方などを通して彼らが社会的に発信したいアイデンティティが込められた空間には奥深い魅力がある。設計者のこだわりは勿論のこと、空間づくりに関わる様々な職種の人たちのこだわりが響きあうことで、空間は更に面白みを増してゆく。

今回は、空間をつくるための「ひとつのこだわりどころ」や、空間づくりにまつわる「こだわりの活動」にスポットをあてて、それぞれの空間料理人としてのレシピを見せていただこうと思う。彼らの「こだわりどころ」は様々に発信されてはいるものの、その更に奥には表に現れきれない深い造詣があると思われる。その思考の源泉は一体何なのか。目指すものとは何なのか。彼らの求める世界観や社会像はどんなものなのか。そしてその「こだわり」をどのように料理し、空間アイデンティティを醸成させるのか…。それぞれのこだわりを語っていただくことは、彼らのひととなりを語っていただくことに他ならない。料理は、料理人の顔が見えた方がより美味しく感じるように、空間も作り手の顔が見えた時、彼らの建築や空間、活動をととても親しみのあるものを感じるだろう。

今回、8人の方に「こだわり」を語っていただいた。空間をつくる要素としての「空気・光」、これからの時代の「木造」、地域を活かす要素としての「長屋」、緑とのかかわり方としての「庭・ツリーハウス」、文化としての「窓」研究、そしてエシカルコンシューマリズムに通じる「コルク」再生まで、建築と空間を通して社会に発信する「こだわり」が集まっている。執筆者の皆さんには、自身の体験や考察、そして自分自身を惜し気もなく丁寧に語っていただいたので、各論を読んでいただくと、それぞれの方のひととなりが浮かんできて興味深い。誌面に限りがあるので今回は8人のみだが、建築はこだわりの集積であり、こだわりのポイントは至る所にある。皆多かれ少なかれ、こだわりどころを持っているのだと思う。今回の特集を機に私たちの空間を感じる「感度」が高められ、又自分自身の「こだわり」の再発見に繋がることを期待したいと思う。

編集委員 黒柳 亮

【各論】

- | | |
|--|------------|
| 1 街並みのアイデンティティとしての窓 | ●塚本晃子 |
| 2 空気にこだわる
エアキスと更なる健やか住環境創造研究 | ●松下和彦 |
| 3 “らしさ” にこだわる
大阪中津らしさを表現した空間再編“キタの北ナガヤ”プロジェクト | ●小野達哉 |
| 4 木造にこだわる～シンプルな木架構による豊かな建築を目指して～ | ●寺村雄機 |
| 5 庭にこだわる | ●辰己耕造 辰己二郎 |
| 6 インタビュー 東京コルクプロジェクト | ●北村真吾 |
| 7 ツリーハウスに魅せられて | ●小林 崇 |
| 8 光にこだわる | ●池田俊一 |

【編集後記】

企画：インテリア・住宅系分科会
赤川貴世友／今井充彦／岩田圭司／川合隆之／河西孝平／黒柳 亮／塚口洋之／ペリー史子

街並みの アイデンティティ としての窓

一般財団法人窓研究所 研究員

塚本晃子

1987年埼玉県生まれ。2013年東京工業大学修士課程修了。2013年YKK AP株式会社入社。2018年より一般財団法人 窓研究所。現在、東京工業大学博士後期課程にも在籍。

窓研究所ウェブサイト
<https://madoken.jp/>

■窓は文明であり、文化である

私は一般財団法人窓研究所という窓を専門に研究し、社会に発信する組織に所属している。窓研究所の主要な取り組みである「窓学」は、2007年に窓を中心とした建材メーカーであるYKK APの主宰のもと開始された研究活動である。2013年には窓学を専門に推進する部署としてYKK AP内に「窓研究所」が設置され、ビジネスとは一線を画したかたちで、国内外での出版、展覧会や研究会の開催などを通して広く研究成果を公表し、建築、都市、社会への貢献を目指してきた。2018年7月には「一般財団法人 窓研究所」として独立し、窓学に加えて幅広い研究文化活動をより社会に開かれたかたちで継続的に行うため、公益法人を目指し活動を開始している。

窓研究所は「窓は文明であり、文化である」というコンセプトのもと研究を進めている。窓を歴史や慣習、文化、芸術、環境など様々な視点から探求し、窓に関して分散している専門知識と知見を分野横断的に繋げていくことを目標に研究活動に取り組んでいる。現在に至るまで、窓に特化した学際的な研究を、国内外の研究者・建築家とともに多角的に展開している。

私自身は、世界各地における街並みと窓との関係性をテーマとして研究に取り組んでいる。日本における窓は、伝統的には柱と柱の間の空間に建具を納める「間戸」の概念が強く、いわば何もないところに窓があるので、一般的に窓を強く意識して生活するということとはあまりないかもしれない。しかし世界の様々な地域を見ていくと、窓が非常に重要だと考えられ、さらには地域特有の窓が街並みのアイデンティティとして確立しており、それを支える仕組みと人が存在する地域がみられる。今回はその中の、特徴的な地域の窓を紹介する。

■窓の反復がつくる街並み

窓は、開閉を可能にする機構に技術的な精度が要求されることから、工房や工場で作製され、建設現場に運搬された上で各建築物に取り付けられるという方法がとられてきた。ある地域に窓工房がひとつあり、その工房が生産した窓が街の多くの建物に取り付けられ

るという背景の中で、建物の規模や用途を超えて同じ窓が反復するのである。またこのような生産上の制約に加え、窓はその土地の気候風土に応じて採光・通風・眺望を確保し、文化的習慣に応じて建物内外のコミュニケーションを生み出すことから、各地域、各時代において大きさや開閉方法などを一定の形式に収斂させてきた。イギリスの上げ下げ式窓、フランスの観音開きのフレンチウィンドウ、ドイツのドレーキップ（内開き・内倒しの2通りの開閉方法が可能な窓）などは、気候風土は類似の地域であるのに、文化圏によって窓が全く違うということの好例であろう。さらに、その運搬の容易さから、窓の形式は地域を超えて伝播するので、ある時代の各地域間の交流を垣間見ることができる部位でもある。

そうした窓が建物の立面に反復することで、規模や用途による建物の個性を超えた、規範ある街並みが生み出されてきたと考えられる。このような街並みを研究し、その地域ごとに窓の持つ重要な役割を明らかにすることを目的として研究を進めている。

■ブルージュ 世界遺産の街



写真1 ブルージュ市内の広場に面した街並み

調査した中で、非常に印象的だったのはブルージュである。（写真1）ブルージュはベルギーの海に面する水路の街である。12世紀には北海とブルージュを結ぶ水路が整備され、13世紀にかけて船での交易が盛んに行われ、有力な商人達がブルージュに拠点をおき、金融・繊維貿易の一大拠点として繁栄した。15世紀には貿易拠点としての機能を内陸のアントワープに取って代わられ、運河港としても経済の中心地としてもその重要性を失って、一旦衰退する。しかし19世紀、貧しさのため建物が長く更新されずに、中世のギルドハウスを中心とした街並みが保存されていること、

運河が再整備され浄化されたことなどから、観光地として人々が訪れるようになる。2000年には旧市街が世界遺産に登録され、今なお美しい街並みが維持されており、この重要な観光資源である街並みを人々は誇りを持って支えている。

■アイデンティティとしての窓

なぜブルージュで窓が重要なのか。私も現地で窓に関わる人々の話を聞くまで、全く想像がつかなかった。それは第一に、建物の躯体自体は中世から変わらず煉瓦造のギルドハウスの形式を踏襲しているのに対し、窓だけが時代ごとに技術の革新や文化的背景の変化から少しずつ変化しているので、建物を見る時はまず窓を見て時代を判断するからである。

第二にブルージュは、ブルージュ特有の窓、棧が十字形となっている「十字窓」が伝統的に使用されていることがあげられる。最初の十字窓がつくられたのは港町として栄えた13世紀の中頃で、棧の素材は石で、下部は木製のシャッター、上部は鉛の棧で支えられた色付きガラスがはめられていた。(写真2)



写真2 ブルージュの十字窓

16世紀からはサッシの素材が木製になり、17世紀の半ばになると十字形フレームで下部が上に持ち上がる引き上げ式の可動窓が登場し、さらに17世紀末になると、イギリスから上部も可動となる上げ下げ窓が紹介され、窓の形式として定着した。18世紀末になるとフランスから影響を受けたアンペール窓が流行するが、フランス式の両開き窓ではなく上げ下げ窓、また十字形を強調したブルージュ特有の窓が生産され取り付けられた。このように、各時代に様々な変化があるものの、一貫してブルージュ特有の十字窓を保持し続け、それが現在でも街並みのアイデンティティとなっているのである。

■窓を守る人

ブルージュ市は1993年から建物の保存に対して規制を強化し、旧市街の建造物は外観を変えることが出来なくなった。ブルージュ市役所の歴史的建造物管理部は、市内すべての建物を修復・新築する際の確認申請業務を担当している。建物の躯体だけではなく、窓やドア等の外観にあらわれるものを変更する際は確認申請が必要であり、寿命が短い窓やドアに関する確認申請が圧倒的に多いという。

管理部には窓専門の設計士が在籍し、申請書類のチェックだけでなく、提出された窓のディテールに対してよりオリジナルに近いものを提案したり、技術力の高い窓工房を紹介したり、無申請で窓を変えていないか街の中をパトロールしたりもしている。窓のことを聞きに来る外国人など当然いるはずもなく、この管理部を訪れた時には熱烈的歓迎と、膨大な資料をみせてもらうことができた。

ブルージュ市において窓の外観とは、街路にあらわれる窓の外側の形状と定義されており、窓を修復する、もしくは取替える際は、窓のオリジナルの外観を保つ必要がある。この「オリジナル」というのが彼らの最もこだわるポイントで、過去の確認申請を参照し、時には新たに調査をするなどしてオリジナルを定義づける。確認申請は19世紀頃から保管されており、約100年前の確認申請を見せてもらったところ、どの図面も窓に関する指摘が多く、窓のディテールに赤字で十字形にする、というようなことが描かれているものもあり、当時においても窓に関する関心が高かったことが垣間見える。(図1)

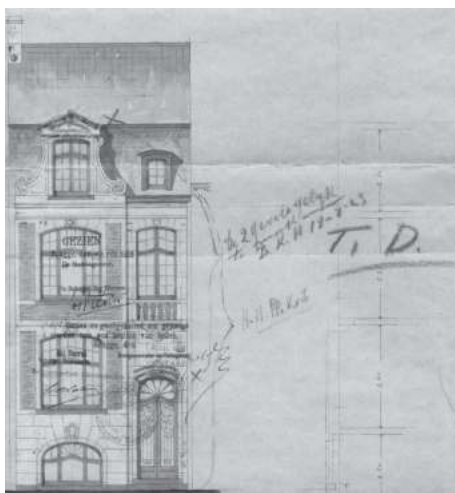


図1 1923年の確認申請時資料
(ブルージュ市役所歴史的建造物管理部提供)

■窓をつくる人

ブルージュ市には建物の修復に関わる工房がいくつかあり、私が訪れた工房は、窓だけでなく、家具、階段など木工全般に関する修復工房で、持ち運び可能な部品の修復を行っている。工房では大きな作業場に木工の加工機が並び、作業する職人数名と設計士が作業している。

窓の修復をする際には躯体から既存の窓を取り外し、工房に持ち込んで修復する場合と、既存の窓を実測し外形が全く同じものを製作し取替える場合がある。例えば外観が同じでも修復と取替えでは適用される法律が違い、取替えにおいてはEUで規定されているエネルギー削減法が適用される。すなわち外観はそのままに断熱性を向上させなければならないのである。この工房では外形は保ちながら厚みを増やしてペアガラスにする、ガラス自体の性能をあげる、気密性をあげる等の対処を一件一件の依頼に対し個別に検討し窓をつくっていく。金具は既存の窓にとりつけられているものをとりはずし、修復・加工をして新設した木枠に取り付ける。工房では廃棄される窓についている金具を保管しており、それを再利用する場合もある。(写真3)



写真3 窓の部材は廃棄せずに保管し、活用する

景観コードなどで街並みをコントロールする地域とは違い、建物のオリジナルを保存するブルージュ市が街並み整備にかける手間は膨大なもので、その中でも窓という存在は伝統の継承と変化が同時に存在する特異点である。

ブルージュの窓については、私が所属する研究室の成果として「WindowScape2 窓と街並みの系譜学」(東京工業大学 塚本研究室編、フィルムアート社、2010年)に一部まとめられているので、興味のある方はご覧になっていただければと思う。

(つかもと あきこ)

空気にこだわる エアキスと更なる健やか 住環境創造研究

積水ハウス株式会社

松下和彦

1969年奈良県生まれ。1993年同志社大学工学部工業化学科修了。同年積水ハウスに入社。約10年の事業所経験を経て、2003年に総合住宅研究所に配属され住まいと暮らしの健康、主に空気環境の研究に従事。現在は空気環境配慮仕様「エアキス」の開発をきっかけに、千葉大学予防医学センターと連携した健やか住環境創造研究を進める。「エアキス」は2008年・2014年にキッズデザイン賞受賞。2013年にIAUDアワード受賞。

■無くならないシックハウス

1990年代後半、住宅の高断熱高気密化に伴い建材や家具などから発散される化学物質による室内空気汚染が顕在化し、シックハウス症候群が社会問題となった。その後、国や研究機関により実態調査や対策検討が進められ、2003年の改正建築基準法においてホルムアルデヒドを含む建材の規制と24時間換気システムの設置が義務付けられ、また住宅性能表示制度では特定測定物質とされるホルムアルデヒド、トルエン、キシレン、エチルベンゼン、スチレンの5つの化学物質について、新築住宅や既存住宅の室内濃度を任意測定する制度が運用されるなどの取り組みが進められた。しかしながら、これ等対策は一定の効果を示したものの未だシックハウス症候群が無くなっていないのが現状であり、当社においても居住者からの健康影響に関する問合せが少ないながらも存在することも事実である。

シックハウス症候群は個人差が非常に大きく、成人と小児では化学物質に対する感受性が異なることや、低濃度環境で敏感に反応する人もいる。また、医学分野においては化学物質による影響だけでは説明できない心理的要因の関与が考えられる型が存在するとされており、今後この問題に取り組むにあたり建築分野だけでなく医学分野との連携の重要性を強く感じる場所である。

そこで、この問題に係る積水ハウスのこれまでの取り組みと現在実施中の研究について紹介していく。

■ケミレスタウン・プロジェクト

●環境改善型予防医学

ケミレスタウン・プロジェクトは、千葉大学予防医学センターが主幹となり進められ、シックハウス症候群など環境由来の健康影響を予防する街づくりを目指した産学連携による共同研究である。2005年から2013年には約30社におよぶ企業により環境改善型予防医学（環境を改善することで環境汚染物質などから引き起こされる疾患を予防するという考え方）の実証実験を行い、指針策定や情報発信などが進められた。

ケミレスタウンの研究施設（図1）は千葉大学の敷地内（千葉県柏市柏の葉）にあり、

当時は「住居ラボ」、「ユニラボ」、「テーマ棟」などで構成されていた。「住居ラボ」は住宅建設会社4社がそれぞれ独自の考え方で化学物質をできる限り低減した住宅であり、室内の化学物質濃度の季節変化を調査するとともにボランティアによる体感評価試験や宿泊実験が実施された。「ユニラボ」は部屋単位のユニット研究施設で、個々の建材から発散される化学物質の量と室内空気中の化学物質濃度測定結果について包括的な分析が行われた。また、「テーマ棟」は本プロジェクトの中心施設としてシックハウス症候群予防の研究や情報発信を担う場所であり、シックハウス症候群の診察や検査を行うための「環境医学診療科」を設置するほか、シックスクールに対応するための空間（ケミレス教室）なども設置された。現在、「ユニラボ」は解体されているがその他の建物は残っており、引き続き研究が進められている。



図1 ケミレスタウン研究施設の全景

●化学物質を低減した実験住宅の建設

「住居ラボ」のうち1棟は当社が建設した実験住宅（図2）である。内装仕上げ材、下地材、接着剤、断熱材など建材から発散される化学物質を実験室で一つ一つ評価（小型チャンバー法JIS A 1901に準じた試験）することで発散量が少ない建材を厳選し、竣工直後のTVOC（総揮発性有機化合物）濃度を厚生労働省が示す暫定目標値である $400 \mu\text{g}/\text{m}^3$ を満たすことを目標とした。

一般的に化学物質を低減した住宅と言えば自然素材を活用した建物がイメージされるかもしれないが、当社は自然素材や工業化建材など関係なく、TVOCを低減するために化学物質の発散量が多いか少ないかという視点で建材を選びこの実験住宅を建設した。その結

果、竣工直後のTVOC濃度はリビング空間が500 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ を少し超過したもののその後の減衰で早期に400 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以下となっており、寝室は竣工直後から225 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ という低い濃度を実現した。



図2 積水ハウスの実験住宅
(リビング・ダイニング)

●ケミレス規準と認証制度

実験住宅による体感評価の結果、室内空気中のアルデヒド類を含むTVOCの濃度（本プロジェクトではケミレスTVOCと定義）が低いほど何らかの症状を訴える人は減り、さらに「化学物質に対して感受性が高い人」と「感受性が低い人」のグループに分けると、ケミレスTVOC濃度が250 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以下の室内では感受性の高い人でも症状を訴える人が減るという結果が得られた。これによりシックハウス症候群の発生を抑制するための目安として、ケミレス「S規準」250 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以下、ケミレス「A規準」400 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以下が示された。現在この規準はNPO法人日本健康住宅協会により室内空気質に配慮された住宅であることを認証する制度として運用されている。

■エアキスの研究開発

エアキスは空気環境に配慮した当社独自の仕様で、「化学物質の抑制」と「換気・空気清浄」技術により健やかな暮らしを実現することを目的とし2011年から販売している。現在、当社の鉄骨戸建住宅の約9割に採用され、その後アパートや分譲マンションなどの集合住宅等にも展開している。本仕様はケミレスタウン・プロジェクトにおける実験住宅の建設とその後の研究成果から実現したもので、住宅性能表示制度の5つの特定測定物質について、大人の約2倍空気の影響を受けやすいとされる子どもを基準に考え、厚生労働省が示

す室内化学物質濃度指針値の2分の1以下の空気環境を提供するものである。

本研究開発では、目標濃度を実現するために約650種類以上におよぶ建材の化学物質発散量を評価し、その中から選んだ建材で実験空間による濃度評価を行い、最終的には間取りや内装仕様の異なる建売分譲住宅による濃度検証を行った。この取り組みによりケミレスタウン・プロジェクトの実験住宅のような一棟だけの対応ではなく、商品として広く普及させることが可能となった。また、実際の運用において、エアキスを採用した建物は全て完成時に濃度測定を行ない、目標値を満たしていることを確認し、住まい手に安心して暮らしていただけるように性能評価証をお渡ししている。

参考に、鉄骨戸建住宅におけるエアキスは5つの特定測定物質だけでなくTVOC濃度も低減されており、竣工から約1ヶ月後に測定することができた数物件のデータでは、概ね厚生労働省の暫定目標値400 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ を下回る数値となっていた（図3）。

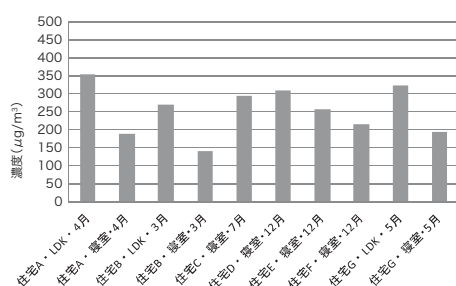


図3 鉄骨戸建エアキスのTVOC濃度実測値

■更なる健やかさの探求

2014年4月から2年間、千葉大学と積水ハウスの共同研究により鉄骨戸建のエアキスに約3ヶ月間居住された59邸134名に対してアンケート調査を実施した。この結果、居住前に化学物質過敏症の診断を受けていた2名が居住後に症状の発現が無かったこと、化学物質の感受性が高いと考えられる子ども10名全員に何の症状の訴えも無かったこと、52%の人がアレルギー疾患の既往歴や体質を持っていたがこの方々に症状の発現が無かったこと等が分かった。このことから、良い空気環境で暮らすことが健康リスクを低減する可能性があること、また、本居住者等は自ら良い空

気を選択しそれを理解して暮らしておられ、この意識や行動が健康リスクを低減している可能性があることなどが考えられた。

健康で快適な空気環境を実現するためには、指針値が示されている物質やTVOCを低減することは大切な取り組みである。しかし、TVOCには個別のリスク評価がされていない物質も数多くあり、例えばピネンなど木材からの揮発成分で人によっては良い香りとして感じられるような物質も存在する。この場合にTVOC濃度が高い傾向にある木造住宅のほうが健康リスクが高くなるかというTVOCの成分次第であり、更に木材が人の生理や心理に与える影響も考慮するとそう単純なものではないと考えられる。

このような状況を踏まえ、2017年4月から5年間の計画で「健やか住環境創造のための広義シックハウス症候群対策 寄附研究部門」を千葉大学に設置し、エアキスの更なる健康効果を予防医学の観点から検証し、健康維持増進を目的としたココロとカラダの健康を実現できる住空間の創造を目指すこととした。本研究におけるテーマ概要を以下に示す。

- ①TVOCに配慮した住空間の更なる健康効果を医学的観点から検証
- ②シックハウス症候群発生機序の解明、心地良さなど心理的な健康増進要素の探索
- ③医療診断を追加したシックハウス症候群対策住宅のコンサルティングシステムを構築

■住まいと健康について

人が生涯健康に暮らしていけるための住まいは、少なくとも健康を害さない環境に維持しつつ、日々の疲れを癒すくつろぎや安らぎが感じられ、更には明日の活力を与えてくれるような住空間ではないかと考える。空気環境、温熱環境、ユニバーサルデザインなどは誰にとっても一定の配慮は必要であり、ここでは特に空気環境の向上についての取り組みを紹介してきた。ただ、上記寄附研究のテーマにあるように人の心理が健康増進に関与する可能性も無視できず、今後くつろぎや安らぎなどココロに働きかける住空間要素の研究開発も積極的に進めていきたいと考えている。

(まつした かずひこ)

“らしさ”にこだわる

大阪中津らしさを 表現した空間再編 “キタの北ナガヤ” プロジェクト

建物再生活動 Batonship 代表

小野達哉

1983年鳥取県生まれ香川県育ち。
京都工芸繊維大学繊維学部デザイン経営工学科卒。
大阪のマンションデベロッパーを経て、株式会社アートアンドクラフトにて個人住宅改修のコーディネート、事業用不動産の事業コーディネート、中古売買不動産仲介、賃貸不動産仲介に従事。
2017年より建物再生活動Batonshipを始動。
築年不詳の木造8軒の賃貸住居の長屋を、12区画の賃貸の事務所、店舗、宿泊施設から成る“キタの北ナガヤ”に再編するプロジェクトの、プロジェクトマネージャーを務め、竣工後の建物管理と、会員制シェアキッチン“キタナガキッチン”の企画、一軒貸しの宿“BIO”と、多目的レンタルスペース“Shiten”を運営する。
個人登録資格に宅地建物取引士、公認不動産コンサルティングマスター、インテリアプランナー、賃貸不動産経営管理士。
大阪の個性的な不動産紹介サイト“大阪R不動産”運営メンバー。
キタの北ナガヤ ホームページ
www.kitanaga.com
キタの北ナガヤSNS
Facebook & Instagram @kitanokitanagaya

■キタの北ナガヤプロジェクトの 始まりとBatonshipについて

私が会社員を辞め、個人で建物再生活動を始めたのが2017年初頭で、初めてのプロジェクトがキタの北ナガヤ（以下、キタナガ）である。キタナガは元々8軒の一般住居の賃貸の長屋だったのを、12区画の賃貸の事務所、店舗、宿泊施設の“複合ナガヤ”に再編するプロジェクトだ。

事業主はキタナガとその周辺の土地建物を代々所有する地主だ。



キタナガ。新旧と職住の混在が“大阪中津らしさ”と考え、再生方針と、建築意匠でそれを表現した。

長屋を取り壊して賃貸マンションを新築することも検討したが、前面道路が狭いため、十分なボリュームの建物が新築出来ない上、建築資材の搬入や建物の解体撤去が割高になる等、新築することは事業性に不安があり、それならば改修工事はどうだろうということで、私がこの長屋の近所に住んでいることもあり、共通の知人からのご紹介というご縁でご相談をいただいたのが始まりだ。

こういった事業用の建物、特に住居から賃貸店舗等に再編する場合、竣工後に賃借人として入居するテナントも、お客さんとして建物を利用する人も不特定多数になるので、その建物の特徴とエリアの性格から、どんなテナントがどんな業種で商いをすることが、この街と建物に求められているのかを、エリアマネジメント的な視点から捉え、事業主にわかりやすく説明することがプロジェクト成功に極めて重要であると考えている。

本プロジェクトで私はその役割を担った。

利用者（テナントとそのお客さん）の具体像と、収益性（必要な投資と、それに対する賃料収入）を示し、事業主が安心して事業を開始できる道筋を立て、プロジェクトの始

まりから終わりまで、事業主に寄り添うプロジェクトマネージャーという立場だ。

私の建物再生活動“Batonship”という屋号の“Baton”には2つの意味がある。

一つは陸上競技のバトン。

建物を安易に壊さず、丁寧に直し、受け渡し、引き継ぐという行為が、もっと当たり前になってほしいという想いを込めた。

もう一つはオーケストラの指揮棒のバトン。

事業用の建物の再生には、事業主、テナント、不動産屋、建築設計士、インテリアデザイナー、工務店（現場管理、大工、左官、各種設備と仕上げの職人、他）と、多くのメンバーが関わるが、その全ての職域を俯瞰し、利害関係を調整するゼネラリストが、この活動の中心に必要なだと私は考えている。

■“大阪中津らしさ”を意識した “キタナガラしさ”

大阪中津は西日本一の繁華街大阪梅田（通称：キタ）から、大阪メトロ御堂筋線で北へ1駅、徒歩でも10数分しか離れていない小さな町だ。

大通り沿いには企業のオフィスが並ぶが、近年、御堂筋線直結を売りにしたタワーマンション開発も盛んだ。

しかし、大通りから1本路地に入ると、空襲被害を免れた木造家屋が密集し、空が広く、住宅の前に植木鉢が無数に並ぶ、昭和レトロな風景が広がる。そんな中、梅田からの近さも魅力となつてか、個人経営のこだわりの詰まった小さな宝石箱のような飲食店やギャラリーがポツポツと広い範囲に増えている。

キタナガの周辺も同じで、まず、前面道路は幅員が狭い法附則5項道路で、近所の子どもが“猫の小径”と呼んでいるほどに地域猫が多く、1日を通して自動車はほとんど通らずに静かで、御堂筋線の駅徒歩1分とは思えないひっそりとした、まさに中津らしい下町の住宅地と言える。小さな住宅が並ぶ中、この町にしかない人気のコーヒーショップやカレー屋などの飲食店、珍しい食材を揃える八百屋、オシャレな美容院も混ざっており、それらはいずれも古い建物を改修したものだ。

キタナガを住居から事務所、店舗、宿泊施設に用途変更する方針を採ったのは、下町

の住宅地から、新旧と職住が混在する町に変化を遂げつつあるこの町らしさを表現することが、プロジェクトの成功に繋がるだろうと思ったからと、事業収支性もその方が優れていたからだ。用途変更の建築確認申請をするのは現実的ではないと判断し、特殊建築物への用途変更に充たる範囲は100平米以下とした。

1階と2階を新たに区画分けし、1階は主に事務所、店舗、2階は主に宿泊施設（大阪市区民泊）とした。この規模の建物を既存の1-2階の区画割の広さで事務所、店舗として賃貸した場合、2階はほとんど物置のような使われ方をすることが多く、それは建物にとっても街にとっても、そして事業収支性の面からも勿体ないと考えたのだ。

キタナガの西側は増築した下屋が敷地境界線いっぱいまで建っていたが、いずれも傷みが酷く、長屋の奥に見える巨木をシンボルツリーとして活かしたかったこともあり、増築部分の下屋は減築し、イベント利用できる露地庭を整備する方針を採った。



キタナガ2階の一軒貸しの宿“BIO”。既存部分と新設部分のコントラストを鮮明にし、4戸それぞれに違ったテーマで内装デザインした。

意匠面では、できる限り真壁を残し、屋根葺き替えに伴い外側で断熱をすることで小屋組を現しにする等、できる限りこの長屋の古さを意匠で見せ、更新した部分との対比を敢えて鮮明にする方針とした。そうすることで、新旧混在の中津らしさを建物の意匠面で表現したかったことと、こちらも、既存再利用を増やすことで、少しでも事業収支性を良くしたいという狙いもあった。

一級建築士（アリアナ建築設計事務所）の計画の下、既存再利用の部分と、新設する部分（新規界壁や、外壁等の防火設備）を分け、前者は既存より性能を落とさず、損傷箇所は原状回復し、後者は現行法令に適合する水準の性能をできる限り担保する方針とした。

■コンセプトを実現するための耐震設計

決まったコンセプトを実現するために頭を悩ませたのは耐震補強だった。

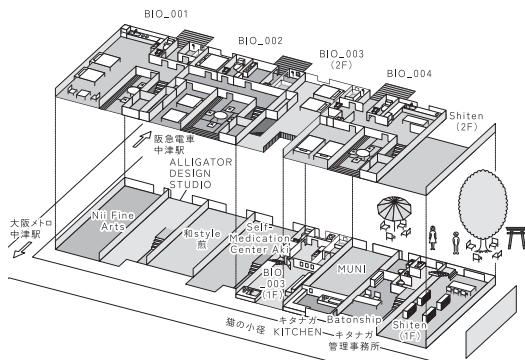
構造躯体スケルトンに解体した結果、思った以上に傷みが酷いことが判明し、構造設計一級建築士（bananaLab）をプロジェクトメンバーに加え、抜本的な耐震補強をする方針に変更した。

多くの一般的な木造長屋と同様、キタナガも南北に伸びる前面道路に面する間口方向の壁量が足りていなかったため、間口方向に耐力壁の増設が必要であったが、壁が増え、1階テナントが使えない空間になってしまっただけは建物再生の意義が無く、また、真壁の土壁を構造用合板等で覆うような改修は意匠面の方針と反するため、避けたかった。

そこで、下屋の減築等の理由で、外壁を新設する範囲が広い間口方向は、既存土壁部を高壁倍率の構造用合板に置換し、建築防災協会の精密診断法で安全性を評価することとし、東西方向は、既存界壁の要素（柱、梁、土壁、レンガ基礎など）を活かすために、限界耐力計算で安全性を評価し、部分補修をしつつ、出来る限り既存構造躯体を再利用する計画とした。また、大屋根を土葺き瓦からガルバリウム鋼板に葺替えると共に、梁に構造用合板を釘打ちすることで、地震力の低減と水平構面の剛性の確保を図った。

この結果、1階テナントに必要な空間の開放性を確保した上で、特に2階宿泊施設の内装デザインにおいて、新旧混在の中津らしさを表現することが出来た。

この耐震補強の成果は、奇しくも、竣工記念オープンイベントの2日後に起きた2018年6月の大阪北部地震で証明された。キタナガのある大阪市北区は、最大震度6弱の揺れに



1階が事務所店舗系のため、間口方向の壁を出来るだけ増設せずに耐震性を担保したかった。

見舞われたが、竣工祝でいただいたワインボトルが1本も倒れないほどに、キタナガは地震の被害を免れたのだ。また、9月の巨大台風、台風21号でも被害は受けなかった。

本プロジェクトにおいて、築年不詳の木造建物であっても、運営面と、意匠面のコンセプトを守りつつ、安全面を担保する耐震補強は可能だということを実証できたと思う。

■建物再生後の運営

本プロジェクトを不動産オーナーに提案する時点から、延床面積の3/4程度にあたる部分（管理事務所1戸、一軒貸しの宿泊施設4戸、店舗2戸）を私自身に賃借させてほしい旨と、再生後の建物管理を担わせてほしい旨を、事業主に伝えていた。つくるのが目的で、出来上がった後のことには関与しないのではなく、本プロジェクトについては私の自宅の近所ということもあり、管理運営に是非携わりたいという思いがあったからだ。

私は、竣工後に誰がどのような使い方をするかというコンテンツ目線があってこそその“空間再編”だと考えているので、計画通りの運営を糧にし、次の建物再生活動に繋がりたいと思っている。



“キタナガ 秋の露地庭市”。飲食、物販、ワークショップと、様々な個性的な店舗が参加。露地庭で2ヶ月に1回程度のペースでイベントを開催予定。

11月にキタナガの露地庭で初めて“キタナガ 秋の露地庭市”というマルシェを開催した。土日2日間の開催で40組以上の出店者に参加いただき、1,000人以上の来場者にお越しいただいた。今後もこういったイベントを定期開催することで、古い建物の再生が事業主（不動産オーナー）、テナント、街、建物、そこに住むみんなにとって魅力的だということを発信していければと思っている。（おの たつや）

木造にこだわる ～シンプルな木架構による 豊かな建築を目指して～

竹中工務店 設計部

寺村雄機

1985年 滋賀県生まれ
2008年 京都大学工学部建築学科卒業
2010年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻修了後、竹中工務店設計部入社
現在、竹中工務店大阪本店設計部
設計第4部門設計2グループ設計担当

■はじめに

日本における木造の長い歴史や、それに従事してきた数多くの先人達の存在を考えると、「木造にこだわる」というテーマで若輩者の私が語るのはおこがましいとは思いますが、数少ない木造建築の計画を通して考えていることをお話ししたい。木の素材は、材種、産地、生育年数、加工方法や切断面によって表情を変え、個体差によるばらつきもあることから、そのものが饒舌に語る素材である。それ故、扱いに苦勞することも多いが、その分味わい深く、経年変化も面白いため、構造を木造とする場合には、やはり架構を「あらわし」で使いたい。ディテールを突き詰め、可能な限り形態をシンプルな形式に還元することで、木の質感そのもので語る空間をつくりたい。そういう思いで設計に取り組んでいる。

■木でつくるという原体験

学生の頃、演習で取り組む机上の計画に実感が持てず、早く実際に建築を建て、空間を実感したいと焦っていた。そんな中、岐阜県の地場産檜を使ったものづくりを通して町興しを行っている、加子母木工塾という活動に参加する機会を得た。1チーム30名以上の学生が夏休みを利用して合宿を行い、伝統木造の継手や仕口などを地元の工務店の指導を受けながら製作し、セルフビルドを行うのである。私が設計を担当したのは「小郷のバス停」という私有地内の休憩所兼地域のバス停であった。伝統木造の軸組と羽目板によって「飛び出す絵本」のような形態をつくり、架構がテーブルやベンチ等の家具を兼ねることで、建築と利用者の距離を近づけたいと考えた。この小さな木造建築の原体験が、木架構そのものによる建築表現にこだわるきっかけとなった。



写真1 小郷のバス停 家具を兼ねた木架構

■木で建築を再生するという縁

竹中工務店入社後、2015年に担当した最初の本造は、木で建築を再生する仕事であった。堺市にある大型ショッピングモールの敷地に100年以上残存する赤レンガ建築の外壁を保存し、RC耐震壁で補強した上で、3層吹き抜けの空間に木のトラス屋根をかけるという計画であった。コンクリートで一面覆われた空間の魅力付けとして、反復する集成材トラスの架構を主役に使いたいと考えていた。7本の線形部材が一点で交差するトラス形状を納めるのに四苦八苦したが、3次元加工機を使用したプレカットと建方の精度の高さに助けられた。このプロジェクトで集成材メーカーとして参画することとなった銘建工業の宮竹氏、谷口氏と出会い、以後、木造で計画する場合には相談にのっていただくようになった。CLT関連告示の改正前であったが、集成材の製品検査で銘建工業を訪れた際に、CLT事例の案内を受け、実物に触れ、素材を知ることができたことで、次に担当したCLTパネル工法のプロジェクトに繋げることができた。



写真2 木トラスによる赤レンガ建築の再生

■CLTパネル工法を研ぎ澄ます

●CLTで研修所を増築する

竹中研修所は、里山の景観が広がる兵庫県川西市の山間に位置し、多様な学びを通じ研鑽を積む場として、全社から社員が集い宿泊研修を行ってきた。研修の多様化による稼働増に應えるため、30室の宿泊室を含む新棟の増築が求められた。敷地となる「清和台の森」では里山の多様な生態系を育むことを目的に社員の参画する森づくりが進められており、森林資源活用のサイクルに合致する建材として、国産杉材のCLTパネルを全面に使用する研修所の増築計画が採用された。



写真3 竹中研修所匠新館

●垂れ壁、腰壁のないシンプルな架構

設計当初より、厚板であるCLTならではの架構をストレートに表現したいと考えていた。一般的なCLTパネル工法では、開口部の垂れ壁・腰壁による境界梁効果を期待するため、ポツ窓型の架構となることが多い。緑豊かな森の中にある立地を生かすためにも、ポツ窓ではなく、フルハイトの大開口によって外部の森と連続する内部空間をつくりたいと考えた。床と壁の接合部に補強鋼板を設置することで垂れ壁・腰壁をなくし、告示で禁止されていた二方向はね出しスラブは、強軸方向板と弱軸方向板を重ねた二層構成とすることで実現した。そして、燃えしろ設計による1時間準耐火構造に加え、内装制限がかからないよう注意して計画することで、CLT躯体をそのまま仕上とすることを可能にし、床パネルと壁パネルのシンプルな積層構成を実現した。



写真4 外部の森と一体になる宿泊室



写真5 床パネルをはね出し、四周に底を設けた外観

●金物・設備の露出しないミニマルな空間

CLTパネル工法では、せん断金物等の接合金物や引きボルト用の開口塞ぎ材がパネル表面に露出するため、CLTパネルをシンプルに木の板として見せるためには、施工手順を含めた綿密なディテール調整が必要となる。本計画ではCLT戸境構造壁を2重とすることで隣室間の遮音性能を高め、接合金物を内包することで室内に露出しないよう工夫した。また、CLTスラブ上に2重床を設置し、上下階の遮音性能を確保するとともに、空調機や配管等の設備を床下に納めた。このようにして天井と壁においてあらわしとなるCLTパネル表面の視覚的ノイズをなくし、健やかな木のもつ安らぎが利用者を優しく包み込む空間とした。



写真6 金物・設備の露出しないミニマルな内部空間

森の中の研修所の計画であったが、ここで試みたCLTによるミニマルな架構表現は、集合住宅やホテルなど、都市部での各種ビルディングタイプにも応用が可能だと考えている。

■木架構の帽子を都市にかぶせる

都市木造には多くの建築家や設計者が取り組んでいるところであり、竹中工務店においても多くの技術開発やチャレンジがなされている。「森林とまちづくりを結びつける資源・経済の循環をつくることで環境に貢献する」という目標に加え、都市生活を営む設計者自身が、木の心地よさを感じて求めているようにも思う。耐火要件や内装制限に苦戦するのではあるが、せっかくの木製の躯体を被覆したり、表面仕上に木の薄皮を張るのではなく、表裏一体の木造建築をつくりたいと思うのは、多くの設計者に共通した理想であろう。コンクリートや鉄でできたビル群を大木のような木造建築に置き換えていくという欲望もあるが、大阪御堂筋のオフィスで日々働いている

中で、「屋上木化（既存の街並みに木の帽子をかぶせるように縦増築をする）」というイメージが浮かんで頭から離れない。木の比較的軽く断熱性能が高い性質を生かし、御堂筋のオフィスに竹中工務店の保有技術である耐火集成材「燃エンウッド」を使用した集合住宅を縦増築することで職住近接とし、高さ制限の緩和によって失われた御堂筋の統一された軒線を取り戻す構想を2012年に提案した。

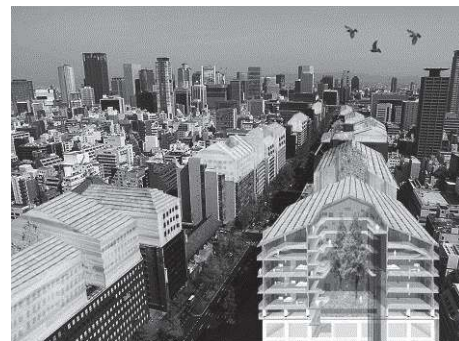


写真7 屋上木化―地上31mの木造住宅地―

数年後にはどこかのまちで、既存ストックに木の帽子をかぶせたような街並みが広がっているような気がしてならないのである。例えば、既存の公団住宅をCLT耐震壁で補強し、CLT架構の屋上木化で、新たな魅力をもった団地風景をつくったりしないだろうか…。



写真8 TIMBER HAT TOWN
一木の帽子でおめかしする団地―

木造にこだわっているのは、この「木架構の帽子を都市にかぶせる」という妄執のためかもしれない。課題はもちろん無数にあるが、木造関連法規の規制緩和や耐火技術の革新も待たれる中で、耐火集成材にCLTの選択肢が増えたことで、屋上木化の夢も更に膨らむのである。過密な都市部にあって、ある意味画一的な合理性を求められるビルディングタイプにこそ、シンプルな架構の中に木の饒舌さによる面白みを付加できれば、上質で温かみのある、豊かな空間づくりができるのではないかと考えている。（てらむら ゆうき）

庭にこだわる

GREEN SPACE代表

辰己耕造
辰己二郎

兄：辰己耕造（庭プロデューサー・76年生まれ） 弟：二郎（庭師・79年生まれ）
造園を生業とする家に生まれ、2015年から父がつくった会社である（株）グリーンスペースの代表に。

主に個人邸や店舗の庭をつくること、そしてつくった庭をお手入れすることを中心に活動。その他にも「たくさんの方に庭に触れていただきたい、植物に興味を持っていただきたい」という思いから、庭に関する講演・苔玉づくりなどのワークショップ・古庭園案内ツアー・トークイベント・室内空間でのインсталレーションなど、庭や緑に関する様々な活動を行う。

<受賞>

第二回ビズガーデン大賞 佳作

日比谷ガーデンショー2004 入選

第23回全国都市緑化フェア デザイン部門 銀賞

2014年八尾市文化新人賞

■ 「GREEN SPACE」

GREEN SPACEは辰己耕造（庭プロデューサー）と 辰己二郎（庭師）を中心とするオーセンティックでヒップな庭づくり集団である。南青山や原宿のセレクトショップ、ホテルやカフェや保育園の園庭、そして個人邸の庭に至るまで。ご依頼も建築やインテリアを設計される方やプロジェクトをプロデュースされている方やアパレルの方や個人邸まで様々。クライアント、案件の幅の広さもまたGREEN SPACEの強みだと考えております。私達の仕事は「庭」をデザインし、つくり、手入れすることです。そんな日々の庭づくりのなかでどんなことを考えそしてこだわっているのかを今回改めて問い直してみました。

■ 「Making The Road」

私達兄弟は、大阪の東端の八尾市のさらに一番東にある信貴山の麓で生まれ育ちました。そこは地場産業が造園業であり私達の父も造園の仕事をしており、私達も後を継いだという形になります。ただ私達が仕事をはじめた90年代後半は庭づくりの需要（特に住宅の）もあきらかに減ってきている時期で、なかなか20代は庭をつくらせてもらうチャンスもなくハウスメーカーのエクステリア工事が中心という会社でした。ちなみにGREEN SPACEという社名は今亡き父がその当時に会社化したときにつけたものを引き継いでおります。ただ20代に年間100件以上のエクステリア工事を10年ちょっとさせていただいたことは今になって思うと設計、打ち合わせ、工事そしてクレーム対応のすべてがいい経験だったなと思います。当時、地場産業が造園にもかかわらず庭をつくる仕事だけを専門としている会社はなく、そういうことができるとは正直想像もできなかったのですが、全国の同じ年代の庭師たちが考えや作品などを同時多発的にBlogを通じてどんどんUPしていたタイミングでした。私達も少なからずそれに影響を受けたのと、エクステリア工事の限界も感じていて、兄（耕造）が30歳を迎えるくらいに今までのハウスメーカーとの取引をすべて断り、設計から施工そして手入れまですべてじぶんたちが手作業でおこなうオーダーメイドの庭づくりの業態に挑戦してみようと決心しまし

た。なにか当てがあったわけではなかったの
でほんとにそこから3年くらいはまったく
いいほど仕事がない日々でした。そんな
時に今できることはなんなのか？という
ろ考え、SNSをつかって積極的に発信したり
私達は庭を専門につくる植木屋なのでほかの
ブルーカラーの人とは違う乗馬ズボンに鯉口
シャツのようなわかりやすい衣装にしたりも
しました。今でもそんなときはありますが、
じぶん達のやっていることがこれでいいのか
疑心暗鬼の日々でした。そんななかでの転機
はある庭の専門誌で若手を特集するコーナー
に掲載してもらったことが大きかったのかも
しれません。30代半ばくらいから少しずつ仕
事も増えてきて、建築やインテリアなどの設
計をする方からの依頼も徐々に増えてきて、
私達と一緒に働きたいというスタッフとの巡
り合わせもあり今に至るという感じです。



写真1 GREEN SPACEのスタッフ（手前左が辰己耕造、右が二郎）

■ 「コンビネーションそしてレイヤード」

私達の庭づくりの特徴としてまずわかりやすいのが植栽の組み合わせだと思います。私達は小さなスペースでもたくさんの樹木を組み合わせて植えるということを行います。このような植栽をするには実際に樹木の一本一本を選びにいかないと不可能ですし、知識と経験とセンスも必要だと思います。そしてその組み合わせの各レイヤー（高木、中木、低木、グランドカバー）の重なり、つまりレイヤードもとても重要になってきます。「見たことあるものと見たことあるもの」を足してなんとなく既視感はあるけど「見たことないもの」をつくりたいと考えています。古くから日本にある樹木とプラントハンターが輸入してきたものを組み合わせる。環境や建築やインテリアと庭との関わりの距離みたいなもの

をちょっと変えてみる。そういうチャレンジをしたくて私達は日々、いろんな造園以外のものに積極的に好奇心のおもむくままふれているのかもしれない。これはもしかしたら最大の私達の特徴かなと思いますし、そういうことを楽しむというのはすごく庭的な表現なのではないかなとも思います。

■「庭的な表現」

では庭的な表現とはいったいなんなのか？どんな要素や表現がその庭を庭たらしめているのだろうか？

それは代々続く植木屋としての技術やアイデアオロギーなのかもしれないし、また夢窓疎石の時代から脈々と続く庭のコンテクストつまり文脈なのかもしれないし、本来そこにあるべき姿ではなく別の姿として見る「見立て」という手法なのかもしれないし、植物の組合せやレイアウトなのかもしれない。はたまたその昔は庭をつくるということが高尚で洒落た遊びだったかもしれないし、遠く離れた故郷を思い出すノスタルジックなものだったかもしれないし、お茶を嗜む空間へのワープする装置だったかもしれない。とにかく庭は何百年の間ずっとつくられてきた。そんなふうに関引き継がれてきた表現にアート、ファッション、音楽、ストリート、フードなど今のカルチャーをミックスさせていくことで、その縦横の文脈がシームレスに交わり、重なるような「庭」を私たちはイメージしています。私たちはどこか時代遅れになってしまった「庭」の世界に同時代性をもたらすことを目指しております。



写真2 ラフォーレ原宿 源氏山テラス

■「手入れ」

私たちは設計、施工そして手入れまでをトータルして庭づくりと考えています。その中でも目立たないのですが特に手入れが重要

なのではないかと。今はGREEN SPACEがつくらせていただいた庭だけ年間のお手入れの契約をさせてもらっており、大きな流れとしては春前の寒肥、夏前の消毒（基本はオーガニック）そして冬場の剪定の3回のコースです。年間のご依頼の契約はつくらせていただくに比例して増えていき2018年は約85件くらいのお庭をお手入れさせてもらっております。私たちは庭づくりを考えるとまず最初のピークみたいなものをまずは3年後くらいをイメージしています。現状維持したいもの、大きく育てつくった当初とは違う二次的な景色を考えていたものなど、つくり手でしかわからない小さなゴールを頭に描き生命と対峙しながらそこにしかない庭をつくるための手入れをしていく作業はこの仕事の醍醐味です。たくさんの庭の手入れをさせていただくことはたくさんの「年に一度だけの実験」をしているのと同じです。だんだんとですがそれは次の庭づくりにいかされていくと考えております。

■「つくってみたい庭は？」

どんな庭をつくってみたいですか？とよく聞かれることがあります。庭の形ではないのだけど、数年前に自邸を建てそこに庭をつくったことがヒントになったことがあります。自分なりにそこはなかなか雰囲気のある特別なものができたなと思えるところがあって、その庭とほかの私に関わった庭でなが一番違うのかと考えるとそこで過ごした「時間」なのではないかなという答えにたどり着きました。じぶんの家のように依頼いただいた家や店で過ごすことは無理だけど、その場所で一日仕事をさせてもらったり、もしかして一泊させてもらうことでなにか感じることや気づきがあるのではないかと。そんな庭づくりをさせていただくチャンスがあればさせていただいたらおもしろいのではとなんとなく今考えています。もちろん一人にさせていただかないと意味がないのでそれが可能な場合なのですが。なにかそうすることで予想してなかったものが生まれる気がするのです。

もう一つは、同業者同士のコラボができたらおもしろいだろうと考えております。例えばランドスケープの方が全体を設計し、私

たちがエントランスや坪庭部分を担当する。花壇を担当する方や室内の植物を担当する方それぞれプロフェッショナルな方がいて、既存の庭があれば古庭園を主に管理されている方が担当する。同じ庭に関わる仕事でもいろんな方がいます。そしてそれぞれの得意な場所や条件があります。たとえるならNYのハイラインはランドスケープをジェームス・コーナー、植栽をピエト・オウドルフがそれぞれ協働した。そんなふうに既存の垣根を超えてひとつの空間をつくりあげる。それも将来的に実現できたらいいと思うことです。



写真3 山の棲家（自邸）

■「thinking」

どんな庭をつくらせていただくときもその建物や店舗のいい背景になればいいと考えて取り組んでいます。庭が目立ちすぎてもいけないし、ましてや作り手の私たちが出すぎてもいけない。私たちがつくらせてもらった庭はつくったときがはじまりで長い年月をかけてオーナーが手塩にかけて大切に育てていけるもの。建物が、緑があることでさらに素敵になるように。家族の思い出の一枚の写真の後ろになんとかあるようなものに。あのお店はなんとなく居心地がいいなと思ってもらえる一つの要素みたいなものに。よく庭づくりをさせてもらったホステルの庭の前での記念撮影がInstagramに外国語で投稿されています。よく庭をつくらせてもらったショップの前で雑誌のオシャレな人のスナップが撮られています。決してそこに庭があることなんて語られていません。ましてや誰がつくったなんて。これからもそんな庭をつくれたら最高なんじゃないかなというつもを考えております。

日々目の前にある「庭」と向き合いながら。

meet your Green Day!

(たつみこうぞう たつみじろう)

インタビュー 東京コルク プロジェクト

株式会社
GOOD DEAL COMPANY
代表取締役

北村真吾

1983年、茨城県生まれ。大学理工学部を卒業。
人の暮らしを支える仕事に関わりたくと不動産デベロッパー、外食産業に従事。しかし、日々の仕事や暮らしの中にある環境汚染や廃棄物などに疑問を抱き、トレードオフを小さくしながら暮らしを豊かにする活動がしたいとコルク再生事業「TOKYO CORK PROJECT」を立ち上げる。
現在では、自治体と協働したフードロスへの取り組みやアーティストが使用した楽器の一部をリユースする活動のプロデュースなども行っている。

東京コルクプロジェクトを立ち上げ、ワインコルクの回収から再生、プロダクト化、販売まで行っている北村真吾さんにインタビューをさせていただいた。

■東京コルクプロジェクト

●プロジェクトを立ち上げた動機やきっかけはどんなところにあるのでしょうか。

不動産業界を経て、飲食業界へと転職し、飲食店経営を学んでいたお店で様々な現実と向き合ったことが東京コルクプロジェクトを始めるきっかけになっていると思います。飲食業界は、生活の中心的な営みでありお客様との距離感が非常に近く、喜びを分かち合えるという魅力があった反面、見えてこないところでフードロス、廃棄物、水を沢山使う等、サービスのトレードオフの部分も多くありました。飲食店を運営しながら、これらを減らす活動ができないかということを日々考え続けていました。たまたまそのお店ではワインコルクを1ヵ月分溜めてから捨てるという習慣になっていて、ある時、1000個ぐらい溜まったコルクを見て、何かに活かせないか？と思ったのが直接のきっかけです。コルク栓は天然資源であるし、あたたかみがある素材であると感じていたので、リサイクルや、再資源化に取り組んでみようと考えスタートしました。

●どのようにしてプロジェクトを実現していったのでしょうか。

まずは一人でいろんな飲食店に飛び込みで聞いて回る事から始めました。「ワインのコルク栓はどうしていますか？」と聞くとやはりどこのお店でもただ捨てていました。リサイクルしたいので溜めてほしいとお願いすると、意外とすんなり受け入れていただける事が多く、そのうち積極的に協力いただけるお店がどんどん増えてきました。思いの外勿体ないと思っている方も多いのだという事に気づかされました。

コルクを集める目途が立ってきたら、次は再資源化にどう取り組んでいくかです。当時日本でコルクリサイクルをしている所は無く、海外（ヨーロッパ、アメリカ、ベルギー等）でのリサイクル活動をロールモデルとして始めました。サポートしていただける企業と仲

間に会い、実際に再生コルク製品をつくってみようという岡山、名古屋、茨城などの加工工場に直接行って、リサイクル製品の加工をお願いして回りました。最初は取り合ってもらえないところから交渉を続け、協力いただける工場を見つけましたが、製品化には多くの課題があり、試行錯誤の繰り返しを経て、ようやく形になってきたという感じです。

●コルク再生を通して伝えたいことは何でしょうか。

コルクは素材自体が日本では作られない植物で、100%輸入しなければなりません。それなのに捨てられているという状況を変えていきたいと考えています。お陰様で、現在は約750軒の飲食店等に回収のご協力を頂いています。最近は個人店だけでなく、チェーン展開している企業やインポーターなどの企業も増えてきました。彼らはCSR活動として取り組んでおり、徐々に環境に対する意識向上の輪が広がって来ているように思います。いずれは瓶・缶・ペットボトルの様にコルクも当たり前に再生するような世の中になって欲しいと願っていますが、その為にはアウトプットであるリサイクル製品の質の向上が必要不可欠となります。テーブルウェア等の小物類だけでなく、インテリア製品や建材等、生活に直結する物に活用する事により、いろんなところで目にして、手に触れ、広く一般の方に認知してもらうことができれば、自然と社会の環境意識は高まってくると思います。

■リサイクル製品を開発

●リサイクル製品はどのようなコンセプトでつくりあげられたのでしょうか。



STOPPER STOOL CLEAR

コルクリサイクルを考えたとき、最初に頭に浮かんだのはコルクの形をしたスツールでした。元々、インテリアとして使えるものを

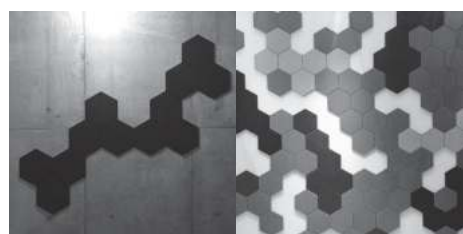
作りたいと考えており、このスツールは自分でデザインしました。次にクリエイターとコンセプト的な製品開発にチャレンジしました。コルクの「栓をすることでワインの時間が止まり、栓を開けるとまたワインの時間が動き出す」という「詩的な時間」の部分にフォーカスをあてた製品を作りました。それが砂時計やお子様の乳歯ケースです。次に生活の中に手軽に溶け込み易い物とを考え、鍋敷きやテーブルウェアなどを作りました。より多くの方に身近に感じてもらい、手に取ってもらいたかったからです。

又、コルクの積み木は2018年にGOOD TOYという「おもちゃコンサルタントが選ぶおもちゃ」に選んで頂きました。コルクの積み木自体は昔から有りましたが、再生資源品でもお子様が安心して遊べる物という点で高い評価を頂きました。



TOKYO CORK BRICK

コルクという素材は断熱性・遮音性・弾力性が高いので、様々な形で建材として使えると考えています。機能的であり、かつデザイン性の高い内装材を作りたいのですが、未だ課題が沢山あります。日本では内装制限（不燃材・準不燃材）がありますし、貼る面の大きさに合わせて作ると費用もかかります。現在プロダクト化したものは、壁面に貼る6枚セットのコルクデザインボードですが、更に発展していきたいと考えています。



HONEYCOMB TILE

■ エシカルコンシューマリズム

● 社会の中で東京コルクプロジェクトのこれからをどのように位置づけていますか。

東京コルクプロジェクトは、まったく新し

い何かを生み出すものではなく、既にある技術やネットワーク、資源を活かした新しいソリューションだと考えています。社会の一つの仕組みとして、私たちだけでなく、飲食店、コルクメーカーや流通業者、販売店、企業など様々な方の集合体として活動していくべきものだと考えています。そして、その活動が自然と社会に受け入れられるようになれば嬉しく思います。その過程で、障害者雇用も一つの重要なファクターとして現在取り組んでいます。障害者施設で回収したコルクの分別をお願いしていますが、皆さん非常に真剣に作業に取り組んでくれています。環境に対して良い活動をしているというモチベーションが、彼らの仕事に対する意識を高めているのです。

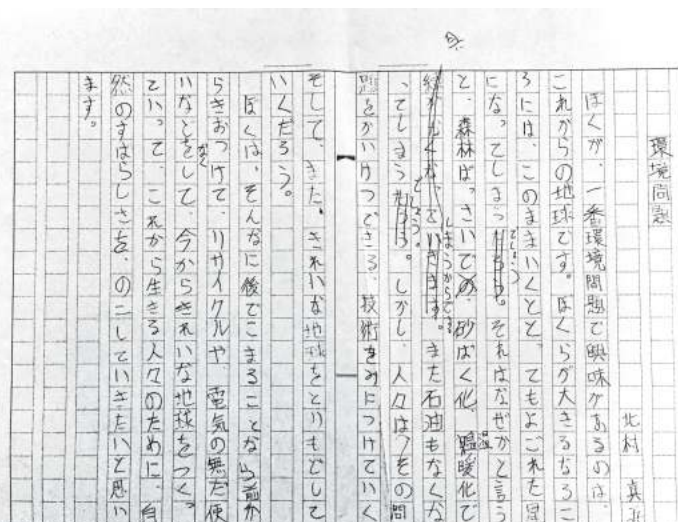
又、コルクは、リサイクルと非常に相性がいい素材なのです。100%輸入に頼らざるを得ない素材であるため、まず輸入コスト・エネルギーを著しくカットできると考えています。瓶・缶・ペットボトルは、溶解してまた作る為、大量の熱エネルギーを必要としますが、コルクの場合は粉碎して固めるだけなのでエネルギー消費はそれほど大きくありません。回収方法もワイン納入の帰り便を使うことで更なる省エネが可能です。又、再生工程で排除される物は殆ど無く、ほぼ100%再生出来ます。そういったことも、東京コルクプロジェクトを通して伝えていきたいと思っています。製造～加工工程、廃棄後の処理方法等をイメージしながら消費と結び付ける事は、これから益々求められます。例えば最近ではエシカ

ルファッションという言葉をよく聞きますが、ファッション業界では、オーガニック素材、生産者の労働環境、フェアトレード、廃棄物の行く先まで一連の流れを見易くする事で消費者の購買意識向上に繋げる活動が増えてきています。コルクに限らず、様々な分野でこのような「情報開示」を消費者が選択する判断基準として高く評価し、能動的に選択するといった消費活動が増えてくることが大切だと感じます。又、この「情報開示」は個人個人の日々の分別意識の向上にもつながり、更なるリサイクル、省エネを可能にするのです。エシカルコンシューマリズムとは、そのような思いやりや想像力の延長上にあるものだと思います。再生資源の中でもコルクのリサイクルは目に見えて分かるものなので、それがきっかけとなって、エシカルコンシューマリズムの意識向上や動機付けに繋がれば本望です。そして、コルク再生だけでなく、様々な企業がCSR活動を活発に行い、個人個人も持続可能な社会のために活動できるよう、更に活動の領域を広げていきたいと考えています。

(きたむら しんご)

インタビューは再生素材を使用したスツールが並んでいるTRUNK HOTELで行った。コルクリサイクルボックスも備え付けてあり、ホテル関係者の環境意識の高さがダイレクトに伝わってくる。インタビュー中、北村さんを突き動かす源泉はどこにあるのかをお尋ねしたところ、小学生頃の作文を見せていただいた。北村さん自身は忘れていたようだが、母親がとっておいたものを最近見せてくれたとの事である。某サッカー選手のように、そのまま実現している事に驚きと爽やかな感動を覚えた。

(聞き手・黒柳亮／今井香織)



左：ホテルのコルクスツールに腰掛ける北村さん 右：小学生時代の北村さんの作文

ツリーハウスに魅せられて

ツリーハウスクリエイター

小林 崇

1957年、静岡県伊豆生まれ。各地の風土や樹木に適したツリーハウスを制作する日本のツリーハウス第一人者。世界各地を放浪する生活を続けていた30代中頃、オレゴン州で毎年開催されるツリーハウスの国際イベント「World Treehouse Conference」に日本から唯一参加するようになる。2000年にジャパン・ツリーハウス・ネットワークを立ち上げ、2005年に株式会社ツリーハウス・クリエーションを設立。現在までに150以上ものツリーハウスを作る。その他イベント空間の制作や、商空間の演出、次世代のビルダーを育成するツリーハウスビルダースクールを開講中。既存の枠にとらわれない自由で豊かな世界観を提案し続けている。

■原風景

伊豆半島で生まれ育った僕は子供の頃、学校帰りに海で貝を採ったり、山で山菜を採ったりして遊んでいた。自然はいつも身近で有り余るほどあったし、飽きる事は全く無かった。木の上ではなかったけれど、友達と秘密基地も作った。毎日毎日遊ぶ事しか考えていなかったから、両親は教員で祖父が開業医だった割には、勉強嫌いで成績もあまり良くなかったと思う。

そんな原風景はあるが、手先が器用だったわけでも物作りが好きだったわけでも、建築に興味があったわけでもなかった。そんな自分がツリーハウスを作ろうと思い立ったのは、やっぱり遊びの延長で、好奇心だったのだと思う。それも30代の前半、作った場所も森の中ではなく、原宿の住宅街の中にあるアパートのベランダの前に生えていたヒマラヤ杉だった。当時、古着と雑貨を扱うお店を住んでいたアパートでやっていて、その店の棚を作ったり壁を塗装したりが僕の初めての木工デビューだった。何年かして古着屋も飽きてきて、何か面白いことはないのかと考えていた時、アパートの小さなベランダの外に生えている木を囲んで小屋を作り、外壁も天井もぶち抜いて秘密基地の様なパーを作って暮らそう！と思い立った。ツリーハウスと言う名前さえ知らなかった頃だ。

キッチンや水回りはさすがにど素人の僕には手に負えないので、大工さんに入ってもらった。後は自分と、古着屋のお客さんの美大の子に手伝ってもらいながら、見よう見まねで約4ヶ月かかって、「Bar Escape」が完成した。看板も無い、まさに隠れ家的な感じの空間が手に入った。セルフビルドと言う達成



「Bar Escape」外観

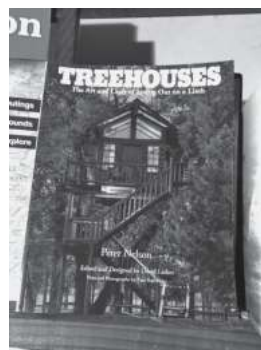
感と、ずっと探していた居場所が出来た安堵感で、心が落ち着いた。

ベランダの外に生えていた木は、店の空間の一部になった。風が吹けば揺れ、

雨の日は酷い雨漏りだったけれど、圧倒的な存在感に僕はすっかり魅了されてしまった。それまでは「木はただの木」としか考えていなかったが、木を生き物として意識するようになった。

■運命的な出会い

古着屋の仕事は細々と続けていて、買い付けにも行っていた。ある時アメリカのボストンで、よく行くカフェ&ブックストアのテラスに座り、ふと上を見上げると、木製の本棚に今月のリコメンド「treehouses」という写真集が飾られていた。



写真集「treehouses」

著者はピーターネルソン。シアトル在住の住宅のビルダーが、ツリーハウスが完成するまでの写真と、アメリカにあるツリーハウスと、それぞれのツリーハウスのエピソードについて、写真と著者の言葉で綴っていて、見ただけでもワクワクする写真集だった。

すぐにレジに行って買い、両手で抱き抱える様にして日本に持ち帰った。Bar Escapeのツリーハウスの中で、毎日毎日、一つ一つのツリーハウスの物語を読みながら、頭の中はツリーハウスでいっぱいになっていったが、27年前の当時、日本にはツリーハウスの情報も、情報を得る手段も無かった。そんなある日、アウトドアの雑誌をめくっていると「ピーターネルソン日本来日。読者参加イベントとしてピーターネルソンとツリーハウスを作ろう！」という企画のページを見つけて大興奮してしまった。その場で雑誌の編集部に電話して「本人に会いたい」と伝えたが「読者参加イベントなのでイベントに申し込みして下さい！」と、まあ当然の返事で、自分の熱い思いは通じない。

その後も何度か電話したが対応は変わらず「読者として申し込むしかないか。でもちょっと違うな」と思って諦めかけていた頃に、編

集部から連絡があり「あくまで黒子としてだが、イベントの1週間前から制作のお手伝いをお願いしたい」という内容だった。

この辺りから運命的な出来事が重なり、ピーターとの出会い、ツリーハウス制作の手伝い、原宿の僕の空間へピーターが来訪、店を閉めてのピーターとビルダーとの京都や飛騨への旅、その年にオレゴンで初めて開催されるツリーハウスカンファレンスへの参加など、僕の人生はツリーハウス一色に染まって行った。年に一度のオレゴンでのカンファレンスに参加しながら、ピーターや仲間が制作中だったりこれから制作するツリーハウスで経験を積んでいった。

■自由な生き方の象徴

ただ、ツリーハウスビルダーになりたいと思っていたわけではない。ツリーハウスがある人生というか、時間の流れ、空間に憧れていたんだと思う。それまでの人生では感じた事のない感覚が、ツリーハウスを通してスッと身体中に、体感として入って来た感じだった。僕に取ってツリーハウスは決して建築や図面や計算ではなくて、何者にも束縛されない自由な生き方の象徴であり、空間なんだろうと思う。ある意味で日本の茶室に似ている気もする。日本は土地が狭く、欧米に比べて木もコンパクトなので、必然的にツリーハウスも空間も狭い。その狭さは僕にとってストレスでもあるが、狭さの美学のようなものも感じている。色々な考え方があると思うが、基本的にはツリーハウスを作る為にはそれなりの大きさの生きている木が必要だろう。木の姿形は自分の自由にならないから、木に合わせて、木に寄り添ってデザインしていかないと不自然な物になってしまう。だから作りながら考え、考えながら作る。生きて成長していく木を土台にして、ある期間遊ばせてもらう空間を作って愉しむ。だから出来るだけホストツリーには負担をかけないで作る。主役はツリーハウスではなく木。完成したツリーハウスが元々の風景と溶け込み、違和感がないことを心がけて、木とセッションをしながら作る。勿論ある程度は最初に大まかなデザインは決めておくが、制作の途中途中で湧いてくるアイデアや感覚は活かして作って行く。



これまでに手掛けた主なツリーハウス（左上から時計回りに、北海道「ナイタイ高原牧場」 沖縄「Beach Rock Village」 鹿児島「どんぐりのやぐら」 オーストラリア「Kangaroo Island Community Education」）



ツリーハウスは斜め下から見上げる事が多いので、下から見上げた時の美しさにこだわる。

ツリーハウスに入って行くまでの階段、梯子、踊り場から見える物、ツリーハウスの中から見える景色も意識して、非日常な空間を作る。僕の理想は、ツリーハウスが最初に見えてくる位置からの佇まい、ツリーハウスまでの動線上からの見え方、ツリーハウスの下から見上げた時の形、地上からツリーハウスの入り口までのアクセス全てを一筆書きのように滑らかに見せたいと思っているが、今までに満足できた作品は無く、まだまだ道半ばな気がする。自分はラッキーだったと思うのは、大工的な経験も、建築的な知識もゼロだった事で、既存の考え方にとらわれなくて済んだことだと思う。ツリーハウスは終の住処ではなくて、とってもテンポラリーな仮の宿、隠れ家、廬のような存在だからこそ、自分にとって魅力的で、価値があるのだと思う。

■岐路に立つツリーハウス

最近、制作してから10年くらい経ったツリーハウスたちのいくつか、様々な理由で岐路に立たされている。ツリーハウスの立っている場所の環境によって、その劣化は一概

には言えないが、生きて成長している木の上に人間が人工物を乗せるわけだから、地面に基礎がある建築物のようにはいかない。全ての形のある物は壊れるが、ツリーハウスは相対的に寿命が短い。だからこそ美しく、愛おしいと自分自身は思っているが、クライアントにとってはそうも言っていない。だからといって定期的な点検やメンテナンス、まして大規模な補強工事の予算は捻出できない。泣く泣く解体や撤去という選択肢も出てきている。

そんな状況の中で新しい考え方も生まれようとしてきている。構造計算に裏付けされ、それでいてツリーハウスのデザインを妨げない基礎のあるツリーハウス。これであれば、宿泊施設としても飲食店としてもリーガルなツリーハウスが、日本でも実現する可能性が高い。この考え方の先に自分の居場所と空間があるのか、それはまだ今は分からない。でも27年前から僕を魅了したツリーハウスが、良くぞここまで、というか、やっとここまで来たかと思うと、ある意味感無量ではある。新しいツリーハウスの潮流の中で、自分の感覚と経験を活かし、まだ見ぬ木や土地を旅する姿を想像するのは嬉しい事である。

(こばやし たかし)

光にこだわる

照明デザイナー

池田俊一



株式会社ライティングプランナーズアソシエーツ/アソシエートディレクター
1983年千葉県生まれ。武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒業。2007年から照明器具メーカーで照明デザイナーとしてキャリアをスタートする。2009年にライティングプランナーズアソシエーツに入社し、2013年から2017年まで同社シンガポール事務所に在籍して建築照明デザインに従事。現在は東京事務所のアソシエートディレクターとして、日本国内外の数多くのプロジェクトに携わる。
北米照明学会国際照明デザイン賞Award of Merit受賞。
国際照明デザイナー協会 (IALD) 会員。

■自然光に学ぶこと

光はそれ自身にかたちはないが、すでにある風景や建築、人々の暮らしの中に当たり前存在し、誰もが無意識に体験していることがある。文化や風土により取り巻く光環境に違いはあるが、人間は光が及ぼす心理的な作用、例えば心地よさや賑やかさ、時には不安といった空気感や情感を感じ取っている。

私が生業とする建築照明デザインは、何もない空間に芸術的な光を妄想するようなものではなく、建築やインテリア、ランドスケープなど常に造形物と密接に関係し、あらゆる条件の中で生み出される光と影を素材とした環境デザインだと考えている。つまりは人工照明を使って場を演出することである。私のクリエイティブの根底に在るものは、その多くが日常の中で偶然出会った自然現象や身体体験であり、そして自然光への憧憬である。燃えるような朝焼けや、空に蓋をしたかのような真っ白な曇天空、風に揺れる木漏れ日や静寂に瞬く星空など、太陽がつくり出す多彩な情景に魅了されている。建築プロジェクトでは合理的な照明設計をしつつも、自然光のような演出ができないか模索することがある。例えば、水面に反射した太陽光と風が作り出す波紋の様子だったり、さざなみのような光、月明かりや点滅する蛍の群れだったりアイデアは様々である。

■光のデザインの発想

傍から見る建築照明デザイナーの仕事は、照明器具を選んで配置することだと思われていたりするかもしれないが、言うなればテクノロジーと芸術と人間工学の交点に立って思考をめぐらし手法を考え、現場で光を創り込む仕事である。デザイン的な視点で技術を取り入れ、人間工学の視点でデザインを考えながら一歩先の絶妙な光と影のバランスを探る少し特殊なことをしている。

光のデザインとは手法や器具から入るものではなく、空間が求める機能と使われ方を解釈したうえで、その場にふさわしい光を模索し具現化されるべきである。例えば廊下にはダウンライト、テーブルの上にはペンダント照明といった短絡的な発想に留まると失敗することがある。私の場合は光のデザインを発想する時は、まず建築設計の意図をよく理解したうえで、人々の導線と滞留場所、光の位置と量による視界の移動、フォーカルポイントなどに思考をめぐらせ、全体像の中でどこにどんな光があるべきかイメージを膨らませる。各所にちりばめた照明手法や光源はせいぜい点・線・面であり、建築空間においては身体を包み込むように光が存在していなければならない。また、それぞれの空間の照明を個別に考えてしまうとアンバランスな光環境になることがあるため、常に場の連続性と明暗のバランスに留意し、動画的な光のシーク



写真1 光のマスタープラン

エンスを意識することが大切である。オフィスやホテル、商業施設や住宅、交通機関などが含まれる大型複合施設のようなプロジェクトの照明デザインを考える場合は、それぞれ異なる機能を持つ空間に対して同一な照明計画を施すことは通常考えられないため、明るさと色温度、照明手法など照明デザインのアプローチが異なる。これらの異なる種類の光を相対的に捉えて自然な連続性をつくることが照明デザインにとって重要である（写真1）。快適な光環境をつくる為には、その空間を利用する人がどう感じるか常に意識しなければならない。

■輝くべきは建築であり照明器具ではない

「光源は邪魔だ、見えなくしてくれ」、これは建築家やインテリアデザイナーからよく言われる言葉である。無理難題な場合もあるが、私たち建築照明デザイナーにとっても理想とすることで、常に意識している課題の一つである。空気の一部が発光するような照明技術は残念ながら今のところは登場していないので、グレアレス（眩しさを感じにくい）照明器具を選ぶことや、光の出所を目立たせないように建築ディテールを変えてもらって照明器具を隠す手法を提案することが多い（写真2）。しかしながら壁や床、柱などに照明を仕込む場合に、構造や意匠的な理由で嫌がられることも少なくなく、照明デザイナー以外誰も望ん



写真3 グレアレスリニア照明による空間（タンジョンパガーセンター）

でいないなんて場合もある。そんな時には無理を承知で、より良い建築や空間を作るという責任感を持って丁寧に力説するしかない。決して建築家や施工者に非があるわけではないが、こちらの思いが届かず残念な結果になってしまった場合には、照明デザイナーとして無念さが込み上げる。

■空間の機能が選択する光

LEDが建築照明として本格的に普及してから大体7～8年が経ち、その長寿命と高い省エネ性から今では100%LEDで照明計画をすることが当たり前となっている。またLEDに

は従来光源の照明器具に比べて多様な種類とかが存在し、カスタマイズ性にも優れているため過去には実現不可能だった特殊な光のデザインも今では実現可能になってきている。

2017年にシンガポールで竣工した「タンジョンパガーセンター」は地下鉄MRTステーションを含んだ大型複合施設である。建築家のSkidmore, Owings & Merrill LLP (SOM) のデザインは水平垂直を強調したものであったので、照明デザインとしても建築のラインを強調する手法を考えた。各所の建築ディテールに組み込むために細長い形状のリニア照明器具を特注で設計した。ディテールの詰めに入った2013年当時は、照度を確保できる高出力なリニアダウンライトの事例はほとんどなく、私たちにとっても挑戦的な事だった。屋外用の投光照明をベースに特注で遮光板やピンホールカバーを組み合わせ、効率的に光を取り出しつつ眩しさを最低限に抑えた器具をデザインした。照明器具メーカーと試作品のテストと改善を何度も重ねた甲斐があり、空間を引き立てる品質の高い照明デザインが実現した（写真3）。

■人間の感性に訴える光

機能や建築条件から生まれる合理的な照明デザインがある一方で、心地良さや賑やかさ、時には荘厳さなど人の感情に訴える光を意図して計画することもある。今年4月に上海郊外にてグランドオープンした高級リゾートブ



写真2 照明器具は見せずに壁だけが輝く



写真4 ライトアップされたクスノキとモダンな建築（アマンヤンユン）



写真5 「Homely」なリビングの光（アマンヤンユン）

ランド「AMAN」のヴィラ「アマンヤンユン」（写真4、5）は、明朝および清朝時代の歴史をもつおよそ50軒もの古代住居と1000年以上の樹齢をもつクスノキの森が移設と再建がされ、Kerry Hill Architectsが新たに設計したクラブハウスを備えたリゾートである。照明デザインでは、時を超えた歴史遺産の味わい深い石や木の表情を光で演出しつつも、荘厳的過ぎたり、商業的にならないように気を配り、「Homely」で柔らかな明かりを追及した。ここでの照明デザインで重視したことは、まずダウンライトなど機能照明による照度を最低限にすること、スタンドライトやペンダントライトなどアクセントとなる家具照明と間接照明を適度なバランスで組み合わせることである。自然とモダン建築のコントラストが利いたドラマチックな夜景、眩しい光源は一つも見あたらず柔らかな光と影のグラデーションに包まれた空間がゲストを迎える。建築家と協働して特注デザインした家具照明は全部で58タイプあり、どれも細部までこだわり抜かれた。上級リゾートにおけるホスピタリティとは、ゲストが滞在する全時間に対してここにしかない価値を提供することであるため、照明デザインもゲストに対して快適で寛げる「おもてなしの光」を提供することを大事にした。

■照明×テクノロジー

LEDと制御技術の発達により、ビルの外観を映像装置化したメディアファサードは世界



写真6 中国深圳市のメディアファサードの夜景
(写真1～6 Lighting Planners Associates)

中の都市で当たり前に見られるようになった。特に中国上海や深圳などの都市部では、いかに周囲のビルより目立つかが重要になっていて、こぞって競い合うため日本では考えられないような大胆で派手派手しい夜景が誕生している（写真6）。

私たちが関わる中国や香港などのプロジェクトにおいても、当初から外観にメディアファサードがデザインに組み込まれていることが多く、映像コンテンツを提供するコンサルタントと協働することがある。メディアファサードは少し離れた場所から見れば映像アートまたは商業目的の広告として効果的だが、近距離では過剰な明るさで点滅するLEDが周囲の光環境に悪影響を及ぼし、不快な印象を与えることもあるので、照明デザイナーとしては非常に厄介な存在だと感じている。

ダイナミックな色彩や点滅による斬新な光の演出は、正しく用いられれば、人々を感動させることもできるが、少し失敗すると非常に醜悪な景観をつくりかねない。実際にそのような場面に幾度となく遭遇している。テクノロジーの発展は、光を用いた表現方法を日進月歩で進化させてゆくのだろうが、それが素晴らしい夜間景観の創出に貢献できるのかという甚だ疑問である。誤解を恐れずに言えば、高いデザイン力と専門的な知識と技術を持つチームなくして、良質なメディアファサードやその類の光の演出を成功させることは非常に難しい。照明×先端テクノロジーが正しく活用されることにより、建築空間や環境、夜間景観がもっと豊かになることにつながる事が期待される。

（いけだ しゅんいち）

今回、東京コルクプロジェクトの北村さんにインタビューする機会を設けていただいたことで、環境やエシカルコンシューマリズムについて非常に勉強になった。インタビューを通して、現代社会の日常とは、なんとなく完成されているように見えて、実はまだまだ不完全であり、色々なところに改善の余地があるという事に気づかされた。北村さんのコルク再生事業のように、小さな試みから大きな波をつくるといった活動の集積が、未来のサスティナブル社会をつくっていくのだろう。まずは私もワインが大好きであるから、コルクを捨てずに集めてみようと思う。

(黒柳 亮)

本特集における各執筆者のこだわりは多岐にわたる。そしてそれぞれの視点がとても面白いと感じるのはそれが付け焼刃で得られた知識ではなく、実践も踏まえて常に思考し続けられているからだ。自分にとってのこだわりは何か？残念ながら突き詰めたスペシャリスタな視点のこだわりは持ち得ていない。ただスペシャリスタな存在をジャンルレスで多様に知っておくことは意識している。その情報を選択し自由に持ち出すことで、作り出す空間に今までにない価値が創造されると考えている。そんなゼネラリストでいようとするこだわりを常に持っていたいと思う。

(今井充彦)

今回のテーマは「こだわり」である。今回は今までにない色々な方向から様々な「こだわり」を集め、その「こだわり」をいかに料理し、どう表現していったかをまとめてあるため、是非読んで頂きたい。まず、発想からして面白いものがあり、こだわる観点に驚きがあり、うまく捌いている過程に感心がある。自分の「こだわり」を思い直し、今回の内容を参考にしていいただければ、自分にはない新たな発見があるかもしれません。

(川合隆之)

編集後記

インテリア・住宅系分科会

情報機器・ネットワークの発達、グローバル化の進展、価値の多様化などを背景に様々な空間・用途の境界が曖昧になってきているように感じる。働く空間と生活する空間、内部と外部、都心と地方、国内と国外、古いものと新しいもの。今回の特集で取り上げられた空間料理人達の「こだわり」や「視点」は境界があいまいになってきた空間づくりにおける、拠り所のヒントとして、とても有用ではなかろうか。多様な視点の組み合わせ・重なり・コラボレーションにより、また新しい空間が創造されていくことが楽しみで仕方がない。

(赤川貴世友)

今回のテーマは自身を振り返るいい機会になった。こだわりと聞くとプラスとマイナス両方のイメージを連想してしまうが、まさに今の自分にぴったりのテーマだった。最近、設計をする上でエントランス空間において心地いと感じる空間の大きさや明るさにこだわりを持って設計に取り組んでいるが、逆にそのことに固執して他を疎かにしていなかったかと不安になり、こだわりが固執にならないようにバランスには注意しようと感じた。また、日々の生活を振り返ると自身の何気ない行動が、実は数々のこだわりによるものだったことにも気付かされた面白い機会だった。

(岩田圭司)

こだわりについて自分自身にも何があるだろうかと考えた。今現在語られるものは即ちその発生から流行り廃りの移ろいの中、不遇の時も含めて存在し続けた証しであり、そこに通底するのは「なにか」を大切に作る心であるように思う。不易流行の精神で自己の働きかける対象の本質を見極め、時間の流れを刻む「なにか」を探すことを続けて行けば見つかるかもしれない。しかし人生は短いので、対象を絞ることなく感覚的に見極められる目を養うことを心がけて日々の業務の先の成果物で、「なにか分からないが、」という言葉に続く食後感を導けたら幸せだと思う。

(塚口洋之)

今回は建築を構成する空間要素の各部にスポットを当てた。各部にこだわりを持つ論者に共通するのは、現代社会へのメッセージが具体的であることだ。論者は専門領域のなかで課題や問題をこだわりを持って掘り下げ、そのサジェッションをこだわりを持って具現化・明文化しており、他者がつぎ入る隙がない文脈でデザインやものづくりを成立させている。こだわりを持つということは、周囲の共感を集め、拡散することで、こだわりの文脈を形成し、新しい価値観や世界観をつくりあげる素晴らしい才能である。

(河西孝平)

「エシカル」という言葉を耳にするようになった。しばらく経つが、空間デザインにもそのような考え方があることに、今回の特集で気づいてもらえると嬉しい。また、空間デザインに「料理する」という考えを持ち込むことによって、今までとは違う視線が生まれてくると思われる。おいしいと感じるには、味覚だけではなく視覚的なものもあり、その場の雰囲気や腰掛けている椅子の気持ち良さも関係してくる。そのように考えていくと、いい空間デザインとおいしいと感じさせることには共通項が多いのではないだろうか。

(ペリー史子)

日本建築協会創立100周年記念誌 頒布のお知らせ

日本建築協会は、2017年3月30日に創立100周年を迎えました。その記念すべき年にあたり、100周年記念事業の一環として、3冊の記念誌を発刊いたしました。

それぞれの誌面では協会100年の歴史を振り返るのみならず、本会が社会の中で果たしてきた役割を見つめ直すとともに、かつて会誌に掲載された貴重な記録を再発見するほか、現在の建築に携わる人々の想いなど、様々な視点から「建築と社会」を取り上げております。

つきましてはこの度、記念誌を頒布することとなりましたので、ぜひお手元に備えていただきたく存じます。

<お申し込み方法>

ご注文の書籍名（もしくは3冊セット）、お名前、ふりがな、ご住所（〒から）、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記宛てにFAXまたはメールでお申し込みください。ご記入いただいたご住所に請求書をお送りしますので、お振込をお願いします。ご入金確認後に冊子を発送いたします。※価格はいずれも税込、送料別です。

お申込先 一般社団法人日本建築協会

FAX : 06-6946-6984 Mail : soumu@aaj.or.jp

◆3冊セットでご注文の場合は

特別価格 **¥5,000** にてご提供いたします。

■日本建築協会100年史1917-2017

¥2,000



<目次> (全96頁)

- 序 香西喜八郎
- 第1部 日本建築協会100年の概要
石田潤一郎／石川祐一／平井直樹／玉田浩之／三宅拓也
- 第2部 座談会
 - 1 座談会 回顧と展望一坂本勝比古先生を囲んで
坂本勝比古／佐野吉彦／山形政昭／設楽貞樹／和田康由
 - 2 座談会 大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代
上田篤／鳴海邦碩／小林郁雄／天野直樹／大井昇二／設楽貞樹／橋爪紳也
 - 3 座談会 21世紀を拓く建築
本多友常／鈴木 毅／安原 幹／横山俊祐
 - 4 座談会 支部活動をめぐって
香西喜八郎／高松隆夫／篠原佳則／長瀬博一
- 第3部 年表(1917-2017)
- 第4部 協会活動の記録

■モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する

¥3,000



2009年～2016年にわたって会誌『建築と社会』に掲載された連載「再読 関西近代建築」をまとめたものです。会誌に収められた貴重な建築記録や論考を取り上げ、解説しています。

<目次> (全352頁)

- はじめに 史料研究会一同
- 第1部 『建築と社会』の100年 山形政昭
- 第2部 建築作品編
 - 1 官庁・公共建築・学校(泉布親・大阪城天守閣ほか全13件)
 - 2 業務ビル(旧住友ビルディング・御堂ビルほか全22件)
 - 3 会館・劇場・博物館(綿業会館・自泉会館ほか全15件)
 - 4 ホテル・病院・駅舎・百貨店(宝塚ホテル・新大阪駅ほか全16件)
 - 5 住宅・住宅地(千里山住宅地・住宅改造博覧会ほか全6件)
- 第3部 論考・記事編(全10件)
- 第4部 掲載記事一覧

■関西の建築界／群像

¥2,000



2009年より70回にわたり『建築と社会』に掲載された、建築に携わる方々へのインタビュー記事をまとめたものです。(追録あり)

<目次> (全164頁)

- 関西の建築界／群像 本多友常
- 「群像」全70組
- 「大阪」フォトギャラリー 撮影：河合止揚
- 公開討論会 1987年と2017年の「関西」
倉方俊輔、本多友常、岡村吉展、奥 貴人、清原健史、河合止揚、駒井陽次、杉山美納、藤原芳寿、三谷勝幸、三矢大祐、吉永規夫
- 委員プロフィール

奈良県における「民泊」

浅井一学

奈良県観光局インバウンド・宿泊戦略室

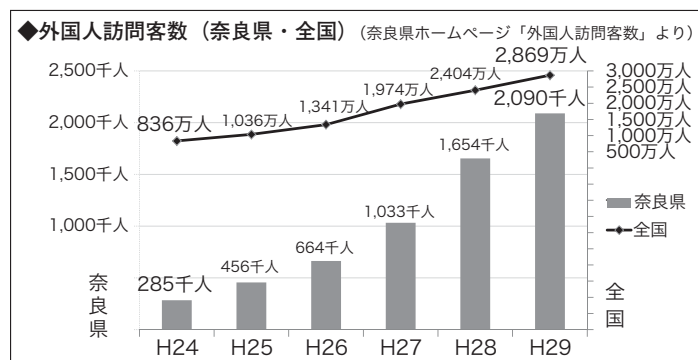
近年話題となっている「民泊」は、旅館業法に基づく簡易宿所営業施設、住宅宿泊事業法に基づく届出住宅、無許可・無届の施設をまとめて「民泊」と認識されている。本稿では、奈良県の現状を含めた「民泊」への対応について私的見解により記述する。

インバウンド需要

近年の全国的なインバウンド急増に応じ、本県でも平成29年の奈良県訪問外国人客数は200万人を超え、5年前から180万人以上も増加した（下記図）。それに伴い外国人に人気の日本の日常体験や低価格で宿泊できる有償の住宅宿泊施設「民泊」が注目を集める状況となった。

「民泊」に対する法規制

急増する民泊ニーズに無許可民泊が増加し、騒音・ごみ処理等のトラブルや施設が犯罪の温床となるケースが表面化した。このことから、民泊ニーズへの対応と有償での住宅宿泊に適した規制として、本年6月15日に住宅宿泊事業法（以下「法」という。）が施行された。また、法とともに、旅館業法もゼロベースで見直しが行われ、最適で最小の規制となるよう改正された。



奈良県の現状

観光庁の調査によると、今後ターゲットとすべき欧米豪からの観光客は、「有償での住宅宿泊」の利用率が高く滞在期間も長いという実態がある。しかし本県の場合、通過型観光の割合が高く（下記表の平均泊数）、他の訪日観光客訪問率が高い都道府県と比較して観光消費額が非常に低く、宿泊者のニーズに対応する宿泊施設の量の拡充及び質の向上が課題となっている。民泊は、一般的に価格設定が低廉で、長期滞在を希望する宿泊客のニーズに合致する有効な宿泊施設と考えられる。

訪日観光客訪問率上位10都道府県

訪問地 (都道府県)	訪問率 (%)	平均泊数 (泊)	1人当たり旅行中 支出 (円/人)
大阪府	39.1	2.8	64,408
東京都	37.2	4.3	97,047
千葉県	29.6	0.3	14,277
京都府	26.8	1.5	25,345
福岡県	12.0	2.4	56,360
北海道	11.7	5.1	109,607
奈良県	8.8	0.5	8,485
沖縄県	7.5	3.8	69,027
愛知県	6.7	2.7	45,492
兵庫県	6.4	1.1	21,742

※観光庁「訪日外国人消費動向調査」2018年1-3月期調査結果（2次速報）より

本県の「民泊」への対応

■法に基づく条例の制定

本県では、法の趣旨を踏まえた上で、次の3つの対策を講じる「奈良県住宅宿泊事業の適正な運営の確保に関する条例」（以下「条例」という。）を制定した。住宅宿泊事業に起因した生活環境の悪化を防止し、住宅宿泊事業の適正な運営を確保することを目的としている。

□制限が必要な地域での住宅宿泊事業の制限

法第18条に基づき、条例で次の2つの区域・期間を制限する規定を設けている。

1つ目は、学校・保育所等の周辺での月曜日から金曜日（祝日等を除く）の期間（旅館業法許可施設が営業する区域を除く）。

2つ目は、古都保存法上の歴史的風土特別保存地区並びに「明日香法」の第一種及び第二種歴史的風土保存地区での繁忙期である。

2つの区域内であっても、家主が同居して

実施する場合や、家主が不在となる場合でも、管理業者の営業所等が2km以内にある等の一定の要件を満たす場合は、実施の制限は適用しないこととしており、過度な規制とならないよう配慮をした規定となっている。

□住宅宿泊事業を適切に実施する体制の整備

家主の在不在に関わらず、法に規定する義務の履行が確保されるよう体制整備を規定した。家主が同居しない場合でも、住宅宿泊管理業者の交付する書面に住宅宿泊管理業務を適切に実施するための体制整備がされていることを確認できる内容の記載を規定し、宿泊者の本人確認や周辺地域の生活環境悪化を防止するための宿泊者への説明、苦情対応等に関し対応が可能な体制整備を求めている。

□住宅宿泊事業者の公表

プライバシーに配慮したうえで、周辺住民等が届出の有無を確認できる届出住宅の所在地等の公表を規定した。なお、家主が同居せずに実施する場合は、住宅宿泊管理業者の緊急連絡先等を公表する。

■旅館業法に基づく条例の改正

旅館業法施行条例についても、周辺地域の生活環境の悪化を防止するための措置や外国語での案内等といった法等に準じた規定を追加し、「奈良県旅館業の業務の適正な運営の確保等に関する条例」へと改正した。許可申請と届出という差異はあるが、宿泊事業運営上の義務は同程度のものとなり、宿泊施設を利用する観光旅客が一定以上の安全性・利便性を感じられる規制となった

奈良市との連携

本県の宿泊施設は、中核市である奈良市域に約8割が集中しており、県全体での規制と振興を図るうえで、市との連携は必要不可欠である。そのため、県と市は密接な連携をはかり、市は市として必要な規定を盛り込みつつ、住宅宿泊事業及び旅館業に対する本県と同様の条例を規定した。

奈良市独自の規定は、「住居専用地域」と観光地と地域住民の生活の場が混在する「ならまち」で実施制限を設けた点である。県と同様の適用除外規定はあるが、市の実情を鑑みて規制と振興のバランスを図っている。

展望

「民泊」は日本の日常生活体験や手頃な価格での滞在を期待する外国人観光客の受け皿となるなど、客室数が少ない本県にとっても観光客の選択肢を広げるものと考えている。

住宅宿泊事業の規制と振興の両面を有する法の趣旨を踏まえた条例の制定と、旅館業法施行条例の改正により、良質な宿泊サービスの向上と適正な運営に必要な支援を行っていく。

（あさい いちがく）

●浅井一学

昭和60年生まれ。平成21年奈良県入庁。

無人航空機による 三次元形状復元技術を 活用した災害対策

松浦孝英

株式会社テラ・ラボ 代表取締役

1. 無人航空機による災害情報システムの構築に向けて

大規模な災害発生直後には、迅速な人命救助や最適な救援・復旧支援策を講じるために、正確で迅速な情報把握が不可欠である。無人航空機を活用することで、災害の発生直後の被災地情報を迅速に収集・分析して、人命救助とその後の迅速な救援・復旧作業に貢献することが可能になる。

2. 三次元形状復元技術（SfM：Structure from motion）

三次元形状復元技術（SfM：Structure from motion）は、動画や静止画からカメラ撮影位置を特定し、三次元形状を復元する技術である。この技術はロボットの自律制御や自動車の衝突防止などの運転支援など、非常に広範な分野で適用されている。この技術を災害情報収集システムに組み込み、被災地域の被災状況の把握にどのように活用できるかを考察した。

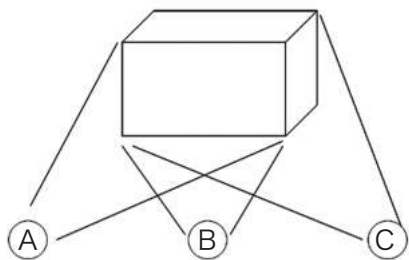


図-1 三次元形状復元技術の仕組み（A点、B点、C点のように視点位置を変えて写真撮影を行う）

（1）試験会場

試験会場としては、京都府京丹後市にある西日本最大級の道の駅「丹後王国（約30ha）」を選定した。京丹後市全域が国土交通省（航空法）の定める人口密集地上空の飛行制限から外れていたこと、そして広域で建物形状の起伏が読み取りやすい丹後王国の試験利用の

許可がスムーズに得られたこと、これらが試験会場の選定条件として適当であった。

（2）試験機体

本試験では、小型の無人航空機としてDJI社（中国深圳）MavicProを使い、自動飛行による技術検証を行った。本試験機を選定した理由としては、有効画素数が1000万画素を超えていること、落下した場合のリスクに備え小型軽量であること、自動制御プログラムが使えることがあげられる。また、可搬時、収納用にアームを折りたたむ。



図-2 試験で使用した機体

寸法	83mm×83mm×198mm
重量	734g
センサー	1/2.3"（CMOS）、有効画素数：1,235万画素
最大静止画サイズ	4000画素×3000画素

表-1 試験機の基本スペック

3. 試験結果

平成29年4月4日、京都府京丹後市丹後王国にて飛行試験を行った。約30haのエリアを約2時間かけて4回の飛行を行った。空撮写真の撮影枚数は1404枚となった。

三次元形状復元技術を用いることにより、建物形状を三次元で表現することができるだけでなく、オルソフォト（正射投影）、DEM（デジタルエレベーションモデル）で出力することが可能である。WEBには様々な地図が公開されているが、災害発生した直後にこれらのデータを短時間に解析できれば、早期に災害状況の全容を把握できることが分かった。

4. 今後の災害発生時の無人航空機の活用について

国土地理院は2016年3月より国土交通省が推進する「i-Construction」の一環として無人航空機を使った測量環境の整備を開始し、無人航空機の技術者を育成し、i-Construction向けの測量に必要な指導・助言、災害時には自らが現場の撮影・測量を行う「国土地理院ランドバード（GSI-LB）」（体制）を発足した。

SfM技術を活用することで、災害前、災害後の差分抽出をすることが可能となる。昨今衛星を活用した地図は、いつ撮影されたものかわからない。災害時の初動体制において、無人航空機を活用したデータの解析が今後有用な取り組みになると期待されている。

（まつうら たかひで）

●松浦孝英

研究開発型ベンチャー株式会社テラ・ラボ 代表取締役。公共政策を専門とし、無人航空機の社会実装に向けた取り組みを行っている。

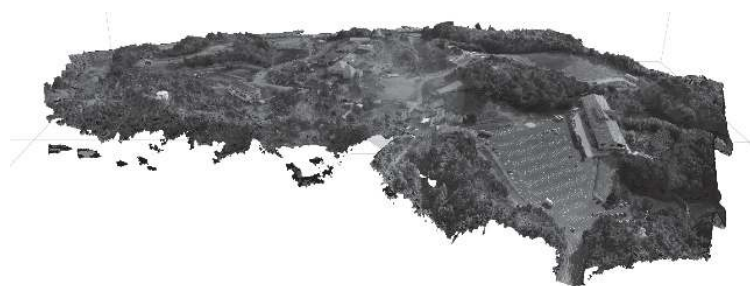


図-3 三次元形状復元（高密度ポイントクラウド）183,885,680点・9レベル・2.86cm/pix

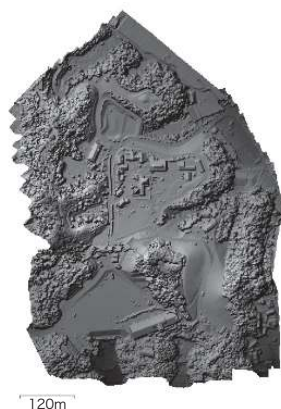


図-4 DEM（デジタルエレベーションモデル）



図-5 オルソフォト（正射投影）

太陽の神殿 〔黒住教大教殿〕

設計：浦辺建築事務所
施工：清水建設

(1975年 4 月号)

安田徹也

竹中大工道具館
学芸員

■はじめに

太陽の神殿こと、黒住教大教殿は本誌1975年 4 月号に掲載された。設計者は浦辺鎮太郎(1909～91)。地元、岡山県に根差した作品で知られる建築家で、本作品は代表作の一つである。この作品は神結館と大教殿の二棟から成る。上記の本誌記事は写真と建物概要のみの紹介だったが、今回は特に大教殿を取り上げて、そのデザインの源泉をたずねてみたい¹。

■建設の経緯

まずは大教殿の建設経緯を振り返っておこう²。黒住教は現在の岡山県岡山市の神職だった黒住宗忠(1780～1850)が開いた教派神道一派である。文化11年11月11日、グレゴリオ暦の1814年12月22日すなわち冬至の日に当たるのだが、この日に黒住宗忠は昇る朝日を拝む「日拝」の最中に、天照大御神と一体になるという宗教的体験をした。黒住教ではこの体験を「天命直授」と呼び、この時をもって立教の時としている。江戸時代には現在の岡山市北区上中野にあった教祖の自宅が神殿としても使われており、教祖没後35年の1885年にその地に宗忠神社が建設された。1899年には隣接して梁間 7 間桁行13間の大教殿が建設され、祭式の場所も整った。しかし教団の拡大と共に次第にこの地が手狭になってきた。更に新幹線開通に伴う周辺の都市化も相まって、1969年 7 月、宗忠神社から北西約 7 kmの神道山への霊地移転が決定した。こ

の時新たな大教殿の設計者に指名されたのが、五代教主・黒住宗和(1905～73)の第一岡山中学校(現岡山朝日高校)での同級生でもあった浦辺鎮太郎である。

現在、株式会社浦辺設計には昭和47年(1972) 3 月 3 日の日付の入った図面76枚が残されており、この時に設計が完了したと分る。設計を依頼されてから完了するまでの約 2 年半、建築家がどのような思考を重ねたのかを、以下に想像してみたい。

■伊勢神宮の影響

浦辺は「宗教建築は祭神の魂に添って造形すべきであって造形がはじめにあってはならない」と述べている³。大教殿の場合は祭壇に「天照大御神」、「八百萬神」、そして教祖黒住宗忠を神格化した「宗忠神」の 3 柱が祀られているが、中でも建築の造形を考える上で重要となるのは天照大御神であろう。そして「祭神の魂に添って造形」となれば、当然考えるべきは伊勢神宮である。黒住宗忠は生涯に6度の伊勢参拝を行っており、黒住教にとっても伊勢神宮は重要な位置を占めている。浦辺が大教殿の設計に際し、まずは伊勢神宮の造形を念頭に置いたであろう事は想像に難くない。

実際に、大教殿の中でも神を祀った奥の神殿部分には伊勢神宮の影響が表れている。これは内観からでは分かりにくいのだが、平面および背面からは明瞭にその影響を読み取ることが出来る。

大教殿のほとんどの柱は径350mmのRCの円柱を桧板で覆って幅600mmの八角形柱としているが、神殿部分の円柱だけは無垢の桧材が使用されている(図⑤)。柱の根元が太くなっているのはあたかも掘立柱の様で、頂上は母屋まで達する。この無垢の円柱で囲まれた平面は 2 間× 3 間で、壁には横板が嵌められて、屋根は切妻となっている(図⑦)。以上の神殿部分は明らかに伊勢神宮正殿がモチーフとされている⁴。

一方で建物全体に眼を移すと、屋根の棟廻りの造形に伊勢の影響が見て取れる。千木、堅魚木、薨覆、泥障板、そして茅葺型の屋根などは伊勢神宮を参照したとみてよいだろう。これらは外観の印象を決定づける大きな要素でもあるため、大教殿は一見すると伊勢神宮の影響が大きい様に見える。しかし、伊勢神宮には他にも上記の様に切妻、平入り、掘立柱、棟持柱などの特徴があるが、それらは大教殿の主要部分には取り入れられていない。実は伊勢神宮の影響は、屋根のディテールに留まっているのである。



①竣工時の外観



②竣工時の大教殿正面



③現在の大教殿正面 階段が緩勾配に改修されている。



④現在の大教殿側面 正面・背面の千木の上端が水平（内削ぎ）なのに対し、両側面の千木は上端が垂直（外削ぎ）。

■古代建築の影響

大教殿には伊勢神宮よりも、むしろそれ以前の古代建築を思わせるディテールを数多く見出すことが出来る。

まず指摘できるのは屋根の形で、上部を8寸勾配、下部を5寸勾配と、上下で勾配を変えていて、その間に段差を設けている。これは「鍛葺き」と呼ばれる形式で、1951年竣工の登呂遺跡の復元住居が鍛葺きの茅葺屋根とされている。登呂遺跡では建築史家の関野 克が家屋文鏡や家形埴輪などを参考に復元住居を設計したが⁵、大教殿の屋根も同様にそれら古代の資料を基にデザインされたものと思われる。

また軸部のデザインにも古代らしさが見て取れる。まず柱が八角形断面となっているが、これは円柱の前段階を示すデザインと考えられる。手作業で円断面の木材を作る場合、まず正方形断面の部材を作り、それを八角形断面、十六角形断面、三十二角形断面、と規則正しく加工していかないと正確な円断面を得る事は出来ない。伊勢神宮などの円柱はこう

して作られるが、大教殿の八角形柱は、そうした円柱を作る技術が無かった頃の状況をデザイン的に示したものだと思われる。

軒先や屋内の化粧垂木には皮むきの桧丸太を使用する。また高欄の束には斗が無く、高欄地覆に水線りがほとんど無い。自然木の使用や曲線を排した高欄も、伊勢神宮よりも古式な姿を想定したデザインだと思われる。

浦辺は大教殿の設計に際して「四世紀まで帰りたい」「原点に帰ろうじゃないか」という意図があったと述べている⁶。上記の古代らしさは、太陽信仰の原点に帰ろうとする設計者の意図の表れであろうと思われる。

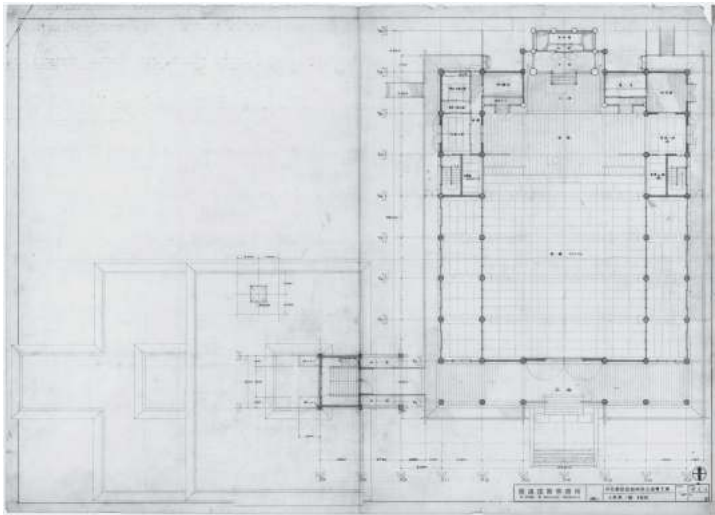
■吉備津神社の影響

以上の様に大教殿には伊勢神宮、更にそれ以前の古代建築の影響がみられたが、それは必ずしも日本の宗廟を意図してデザインした事を意味しない。むしろ設計者は岡山県という地域固有の表現を目指していた。そして神社で岡山固有のデザインを創出するとすれば、避けて通れないのが吉備津神社である。

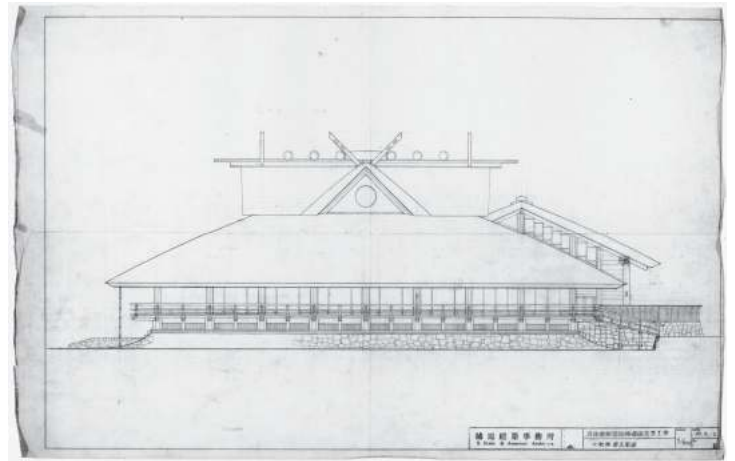
国宝吉備津神社本殿は1425年の建設で、比翼入母屋造りという、入母屋を二つ並べた独特な屋根形式で知られている。黒住教の建物にも影響を与えており、1885年建設の宗忠神社の拝殿が比翼入母屋造りだった。

それは大教殿においても同様で、浦辺自身「吉備津神社本殿は私の子供の頃から印象深く、人心ついてよりも愈々どうにもならない先例としてあった」と述べ⁷、大教殿の構想を得るまでには「比例美しき室町期の木の宮——この能楽の様に妖しい魅力から、脱出して正気を取り戻す為に」苦しんだと告白している⁸。ここで言う「能楽の様に妖しい魅力」とは、例えば華麗な置千木や飾り金具、軒先の優美な曲線などを指すのであろう。確かに大教殿にはそれらの要素は見られない。しかしそれらを除いた骨格の部分で、大教殿には吉備津神社の影響が看取できるのである。

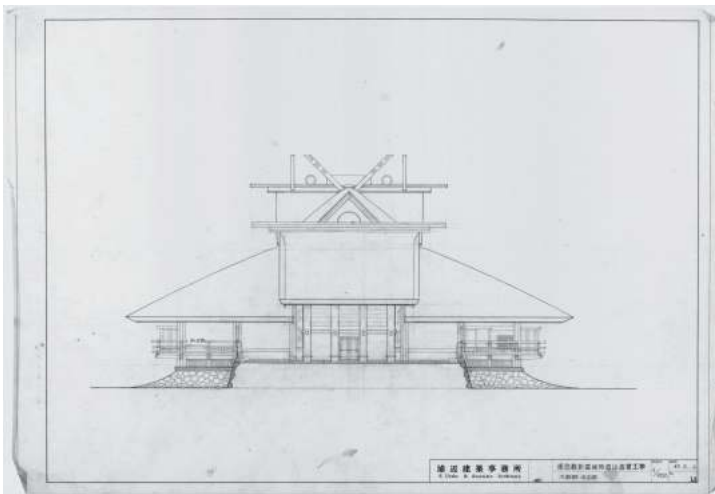
まず長方形平面の短辺側を正面に向けること。そして棟を直交させること。比翼入母屋造でこそないが、屋根の構成には吉備津神社からの影響が見え隠れしている。



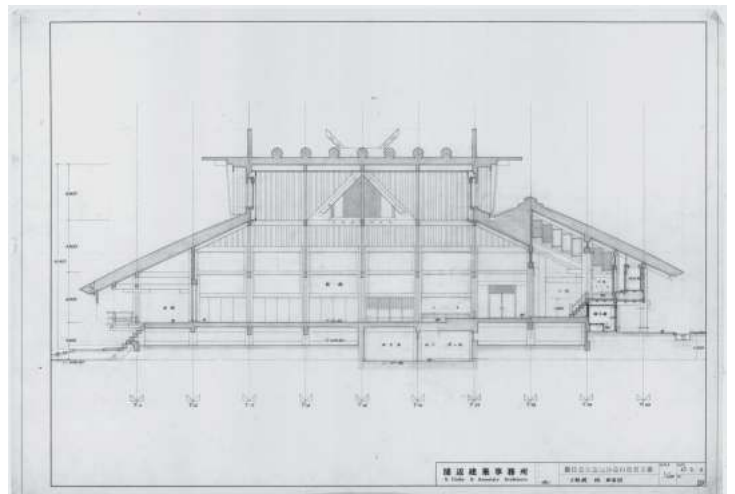
⑤大教殿1階平面図1/100 白抜きで描かれた10本が無垢材の木の柱。



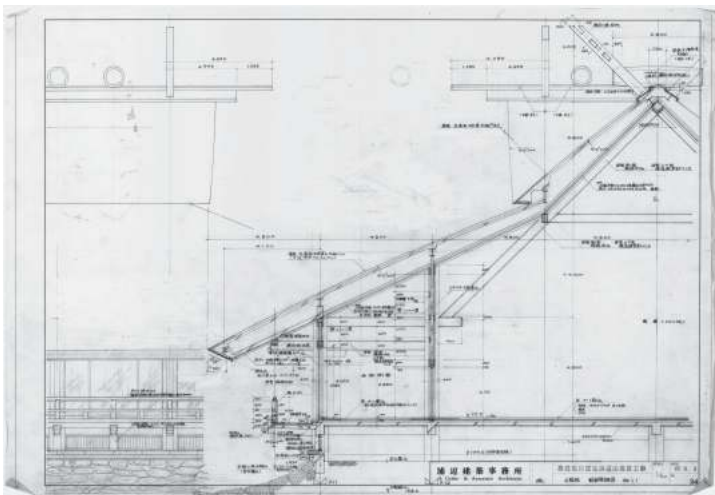
⑥大教殿東立面図1/100



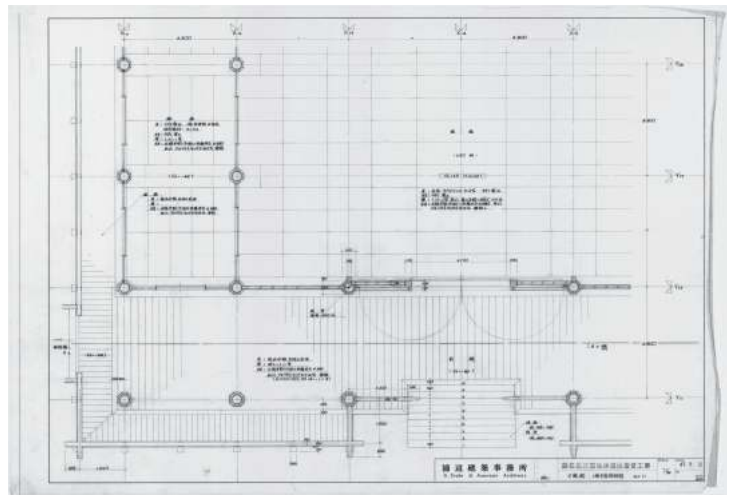
⑦大教殿北立面図1/100 神殿背面は伊勢神宮とよく似ている。



⑧大教殿縦断面図1/100



⑨大教殿断面詳細図（その1）1/50 貫や叉首はH鋼に桧の化粧板張り。



⑩大教殿1階平面詳細図（その1）1/50 広縁中央の一点鎖線が「日の縦」。

一方で基壇まわりにも吉備津神社の影響がある。大教殿は石垣で化粧された基壇上に鉄筋コンクリートの八角柱を建て、そこから片持ち梁で縁側を支えている。このうち基壇の葛石までは石造の様なデザインになっているが、その上の柱と片持ち梁は型枠の板目を現した化粧型枠で作られている。つまり柱と縁側の片持ち梁は、コンクリートではあるが、木造であるかの様な表現がなされているので

ある。こうした高い基壇上に木の柱を建てて腕木で縁を支える構成は、明らかに吉備津神社を意識したものであろう（図⑪⑫）。

これらの基壇、平面、そして屋根から成る全体的な構成は、吉備津神社本殿に範をとったものと思われる。

■大教殿の設計意図

以上をまとめると、大教殿は、吉備津神社

の骨格を古代建築のディテールで肉付けし、伊勢神宮の屋根を戴いた建築と解釈することが出来る。これは設計者の古代史観が建築的に表現されたものであった。

そもそも浦辺は「吉備の国は弥生後期より古墳前期（三世紀より四世紀）にかけて一つの独立国を形成していた」と考えていた⁹。そして古墳時代は朝鮮半島から様々な文化がもたらされた時期であり、地理的に半島に近



⑪吉備津神社本殿の基壇・縁組



⑫大教殿の基壇・縁組



⑬竣工時の広縁



⑭改修後の広縁



⑮大教殿内部

図版出典 ①・②・⑬：『建築と社会』1975年4月号から 東出清彦氏撮影 ⑤～⑩：株式会社浦辺設計所蔵（昭和47年3月3日）
③・④・⑪・⑫・⑭・⑮：筆者撮影（2018年撮影）

い吉備の方が、畿内よりも先にその影響を受けたはずである。従って製鉄などの文化においては「吉備が本家で大和が分家」だった¹⁰。これが設計者の古代史観である。

すなわち大教殿は、大和の本家たる4世紀の吉備に存在した太陽信仰の祭祀場を、設計者の想像力によって現代に蘇らせた建物であった。神社における復古的な表現は既に江戸時代から試みられているが、本作品はその復古代を有史以前にまでさかのぼらせた稀有な例と言えるであろう。

■建築的な特徴

以上の様に大教殿は一種の復古建築だが、同時に現代建築としての特質も併せ持っている。中でも特徴的なのは広大な内部空間である（図⑮）。神社本殿の内部に参拝者が立ち入る事は出来ないし、古代住居の内部は恐らく非常に暗かった。しかし大教殿には妻窓からの外光が射しこむ明るく端正な内部空間があり、誰でもその中に入って参拝することができる。これは伊勢にも吉備津にも古代住居にも無かった大教殿の特質である。

この大教殿の内部空間を強調するため、そこまでの動線となる神結館内部は外光の入らない、比較的暗い参道とされた¹¹。浦辺はこの神結館の東西方向の中心軸を「日の縦」と名付けており（図⑩）¹²、そこを通過して明るい「太陽の神殿」へ至ることが意図されていた¹³。

室内には6尺3寸（1920mm）の畳を敷き、柱間真々をその2.5倍の4800mmとする。これは浦辺の常用するクラシキ・モジュール。また柱・貫の化粧板などには非常に目の詰んだ無節の松の柾目材が使われているが、材料の良さは驚異的である。

屋根は玄昌石の三枚葺き、銅釘打ちとす

る。天然スレートは東京駅などの近代建築や宮城県三陸沿岸での使用例が知られているが、これほど大規模な現代建築に使用された例は珍しいのではないだろうか。そして屋根を飾る千木、堅魚木、葺覆、泥障板は、RC又はPCで作った下地を備前焼の役物で覆った物。作者は備前焼作家の藤原建（1924～77）で、屋根を備前焼で飾る事は1969年に藤原氏が自ら六代教主黒住宗晴氏に提案して実現した。藤原氏は閑谷学校の備前焼の瓦や由加神社の鳥居を調査した他¹⁴、通常の備前焼に使う土では耐久性が確保できない可能性があったため、清水建設の現場副所長の林公則氏の助言を得て耐火煉瓦の工場をたずねて土の吟味を行った¹⁵。これら玄昌石や備前焼による重厚な屋根の表情も大教殿ならではの特徴である。

■大教殿の現在

こうして設計された大教殿は1974年10月26日に竣工し、遷座祭が行われた。そしてその後も定期的な補修工事がなされてきた¹⁶。

例えば1994年の工事では妻窓内側の玉スタレの補修が行われた。一部のガラス玉が取り替えられたが、その新規のガラス玉は倉敷ガラス作家の小谷真三氏が製作した。やや黄色味があったガラス玉が小谷氏による物である。

2000年には境内のバリアフリー化のためベルト式エスカレーターの「動く参道」が設置され、併せて大教殿正面の階段が当初よりも緩勾配に改修された。当初は正面から大教殿に入る場合は木製階の手前の石段で靴を脱いでいたが、改修後は広縁部分に新たに靴箱が設置された（図⑬⑭）。

この様に適宜改修を加えながら、大教殿は現在も大切に使われている。44年前の建設時の苦労が今でも語り継がれており、そのよう

な建築への思い入れを持つ所有者を得た事は、本作品にとって幸せな事であった。延べ3万人の苦心によって本作品が建設された際、浦辺は「八百万神々とは神代のことではない。昭和の現代に生きているのだ」との実感を抱いたが¹⁷、本作品は現在も、そうした「神々」の手によって守られている。

本稿の執筆に当たり、黒住教本部公室長の黒住忠親氏、株式会社浦辺設計の中川奈穂子氏には建物の見学や資料の閲覧で大変お世話になりました。記して謝意を表します。

- 1 本作品の先行研究としては五十嵐太郎『新編 新宗教と巨大建築』（ちくま学芸文庫 2007年）がある。
- 2 『黒住教二百年史Ⅱ』黒住教本部 2016年
- 3 浦辺鎮太郎「太陽の神殿—黒住宗忠はいきている」『新建築』50巻4号 新建築社 1975年4月
- 4 第60回式年遷宮での伊勢神宮の解体材が1974年5月17日に黒住教に下賜された。この材は神殿部分の扉や内装に使用された。注2前掲書の207頁より。
- 5 青柳憲昌「関野克の登呂遺跡住居復原案の形成過程と「復元」の基本方針」（『日本建築学会計画系論文集』第654号 2010年8月）
- 6 「座談会 建築の実像と虚像」（『現代日本建築家全集12』三一書房 1973年）
- 7 注3前掲書
- 8 浦辺鎮太郎「吉備と倉敷をめぐる文化」（『現代日本建築家全集12』三一書房 1973年）
- 9 注8前掲書
- 10 注6前掲書
- 11 黒住忠親氏の御教示による。後に神結館には天窗が設けられた。
- 12 浦辺設計所蔵の「大教殿1階平面詳細図（その1）」より。「日の縦」の出典は『日本書紀』成務紀。
- 13 「太陽の神殿」も浦辺による命名である。浦辺鎮太郎「太陽の神殿—黒住教大教殿」（『建築文化』30巻342号 彰国社 1975年4月）より。
- 14 黒住宗晴『私の建さん』黒住教宝物館 2007年
- 15 黒住忠親氏の御教示による。
- 16 以下の改修履歴は黒住忠親氏の御教示による。
- 17 注3前掲書

出版図書一覧

当協会会員の方で、当会でのご購入を希望される方には、特価：本体価格の1割引＋税にて販売しております。
詳しくは（一社）日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984、E-mail soumu@aaj.or.jp）まで。

最新刊 平成30年3月発行

直感で理解する！構造力学の基本

手描きイラストをもとに構造力学の基本をやさしく解説。
力学とその先にある構造設計の魅力が見えてくる一冊。

著者 山浦晋弘
A5判 216ページ
定価 本体2,400円＋税

近刊 平成30年1月発行

原因調査と対策のポイント 図解 雨漏り事件簿

雨漏りの原因調査と対策にプロ集団「雨漏り110番」が、
多数の生の事例をもとに実務に役立つポイントを解説。

著者 玉水新吾・唐鎌謙二
A5判 216ページ
定価 本体2,500円＋税

近刊 平成29年7月発行

暮らしから考える設計のポイント 図解 住まいの寸法

玄関、トイレ、洗面室など住まいの13の空間の機能と要素を整理し、生活に支障のない理にかなった寸法を紹介。

著者 堀野和人・黒田吏香
A5判 200ページ
定価 本体2,600円＋税

近刊 平成29年3月発行

Q&Aでわかる新築・増改築のポイント 図解 一発で通す！確認申請

確認申請をスムーズに通すために、実務で注意すべき間違えやすいポイントが満載。申請業務に必携の一冊。

著者 野口元・平沢隆志・仲本尚志
B5判 192ページ
定価 本体3,200円＋税

直感で理解する！構造設計の基本

山浦晋弘 著
A5判 216ページ 定価 本体2,400円＋税

設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

改訂版 イラストでわかる 消防設備の技術

中井多喜雄 著 石田芳子 イラスト
赤澤正治・岩田雅之・西博康 改訂監修
B5判 216ページ 定価 本体3,000円＋税

写真マンガでわかる 住宅メンテナンスのツボ

玉水新吾・都甲栄充 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

主婦建築家と考える 住まいづくりのウソ？ホント？

井上まるみ 著
四六判 184ページ 定価 本体1,800円＋税

プロが教える 住宅の植栽

藤山宏 著
B5判 176ページ 定価 2,800円＋税

住宅エクステリアの100ポイント 計画・設計・施工・メンテナンス

藤山宏 著
A5判 232ページ 定価 本体2,500円＋税

第二版 環境と共生する建築 25のキーワード

大西正宜 著
A5判 240ページ 定価 本体2,600円＋税

〈プロのノウハウ〉シリーズ

建築現場のコンクリート技術

柿崎正義・玉水新吾 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

写真マンガでわかる 工務店のクレーム対応術

玉水新吾・青山秀雄 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

現場直伝！躯体工事の100ポイント

中川徹 著
四六判 220ページ 定価 本体2,200円＋税

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

建築主が納得する住まいづくり Q&Aでわかる技術的ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

「経年変化を楽しむ」 デニムフロア



田島ルーフィング株式会社
「屋根で守り、床で支える。」

田島ルーフィングは防水材と床材の製造を通じて、建物を雨から守り、人々の足元を支え続けてきました。防水材と床材、その開発・製造に共通するテーマは安心と快適です。

[大阪支店 床材営業部]
〒550-0003
大阪府大阪市西区京町堀1-10-5
TEL：06-6441-5951
FAX：06-6444-0652
HP：https://www.tajima.jp/
HPは下記QRコードからも
ご覧頂けます。



使い込むほど味わい深まる デニムフロア

田島ルーフィング（株）の『デニムフロア』は「経年変化を楽しむ」という新しいコンセプトのもと開発した商品です。

『デニムフロア』は、著名なジーンズブランドにデニム生地を供給する、世界有数のデニム生地メーカー・カイハラ（株）とのコラボレーションにより実現しました。その表面はインディゴブルーのリアルなデニム生地そのものです。カイハラ社が実際にジーンズメーカーに供給している生地を使用し、風合いと耐久性のバランスを踏まえてコーティングを施し、塩ビパッキング材と一体化させています。

時間の経過とともに、使い込んだジーンズのように表面が擦り切れ、色が落ちていくなど味わいが深くなるのが最大の特長です。



『デニムフロア』の経年変化

一般的な床材は、機能性や耐久性、メンテナンス性が重視され、キズや変色はできる限り抑制するように開発しますが、『デニムフロア』のコンセプトはまったくの逆で、キズや色落ちも含めて、経年によるダメージ変化を前提に開発しております。開発の経緯は、耐久性が求められる床材であっても、経年変化による味わい、そしてそれに愛着を持たれるクライアント様がたくさんいらっしゃる事がわかったからです。

開発の背景として、昨年「グッドデザイン賞」を受賞したモルタル調のコンポジション

ビニル床タイル『モルタライク』は、質感を重視するためにマットな表情を追求し開発しておりますが、その分、一般的なビニル床材と比較しキズがつきやすくなっております。それでも2013年の発売以降、その経年変化を楽しまれるクライアント様の評価が高く、現在は田島の主力商品となっております。



モルタライク

そこで、『モルタライク』と同様のコンセプトによる素材探しを続け、2020年のオリンピックに向けて、「日本らしさ」を感じられるモノづくりという観点も含めて日本各地の伝統工芸品や工業品の生産地を巡った結果、デニム生地メーカーとして世界的評価を得ているカイハラ社と出会い、今回の『デニムフロア』誕生に至りました。

ちなみに、デニム生地の糸は、芯白（しんしろ）といわれる糸の中心部分が染まらない染色技術（ロープ染色）が施されております。だからこそ擦れた際に、インディゴブルーから白色が浮かび上がってくるのですが、そのロープ染色の最高峰の技術を有しているのがカイハラ社です。

実際のダメージの進行具合ですが、商品化に当たり、オフィスの中で歩行量の多い場所にて約2年間の経年変化を観察しました。意外なほどに強度は高く、2年程度でようやく狙いのダメージが表現できました。

この他、この『デニムフロア』のイメージにあわせて、デニムのようなカラー・デザインを施したカーペットタイル『デニムフロアCT（2色）』、コンポジションビニル床タイル『デニムフロアKT（4色）』、複層ビニル床タイル『デニムフロアFT（2色）』、長尺シート『デニムフロアFS（3色）』などをデニムフロ

アシリーズとして展開しており、用途に応じて使い分けをご提案しております。



デニムフロアCT



デニムフロアKT

田島ルーフィングの大阪ショールームでも実際に施工しておりますので、ぜひ一度ご体感頂ければと思います。



大阪ショールーム外観

<商品紹介>

◆デニムフロア 特許出願中（1色）

価格：15,000円／㎡（設計上代）

規格：5.0（厚さ）×500×500mm



◆デニムフロアKT（4色）

さまざまなトーンでデニムの風合いを表現したコンポジションビニル床タイル

価格：3,800円／㎡（設計上代）

規格：3.0（厚さ）×457.2×457.2mm



◆デニムフロアFT（2色）

木目とデニムの風合いをミックスした複層ビニル床タイル

価格：4,800円／㎡（設計上代）

規格：Hサイズ／3.0（厚さ）×150×914.4mm

Fサイズ／3.0（厚さ）×180×1,260mm



◆デニムフロアFS（2色）

価格：3,800円／㎡（設計上代）

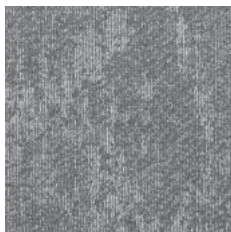
規格：2.0（厚さ）×1,820×9,000mm



◆デニムフロアCT（2色）

価格：9,800円／㎡（設計上代）

規格：7.5（厚さ）×500×500mm



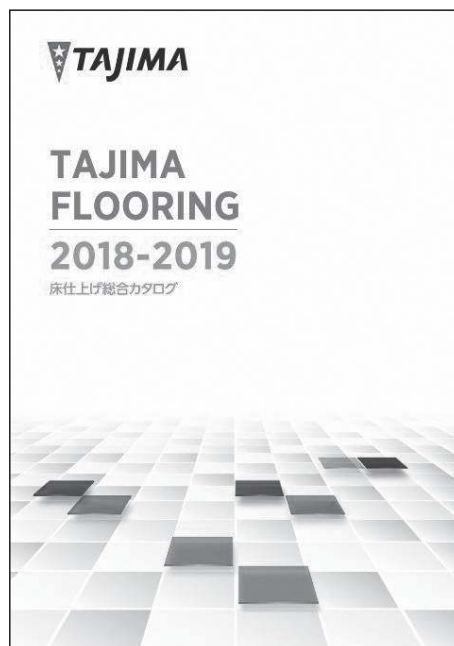
グッドデザイン賞2018受賞



「従来の建築仕上げ材の多くが実現できなかった、劣化ではなく経年変化を楽しむという新しい価値観を商品に結実された点」が評価され、2018年度グッドデザイン賞を受賞致しました。

<収録見本帳>

・総合カタログ2018-2019



・THE DENIM FLOOR



建築と社会 第99集総目録

2018

(平成30年)

一般社団法人 日本建築協会

挨拶

●年頭の言葉

2018年を迎えて／設楽貞樹…………… 1

●本年の抱負

常設委員会／勝山太郎・中尾勝悦・西 博康・
山形政昭・中村文紀…………… 1

特集号

東畑建築事務所創設85周年…………… 1

温泉と暮らす…………… 1

第24回会員作品“私の空間作法”…………… 2

東海支部特集…………… 3

働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル…………… 4

スポーツイベントを支える設備技術…………… 5

第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）

募集テーマ：これからの建築と社会

ーその関係を問う…………… 6

第65回青年技術者…………… 7

平成と建築…………… 8

安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと

今後の可能性…………… 9

山と建築ーそこに山があるから登るのだ！ー…………… 10

重さに関わる…………… 11

こだわりの空間料理人…………… 12

作品作風

●学校等

同志社女子大学 楽真館…………… 1

建 築 主 学校法人 同志社

設計・監理 東畑建築事務所

施 工 清水建設

南山大学名古屋キャンパス新教室棟Q棟・

多目的棟リアン…………… 3

建 築 主 学校法人 南山学園

設 計 日本設計・大林組

南山大学設計共同企業体

監 理 日本設計

施 工 大林組名古屋支店

甲南女子大学10号館…………… 10

建 築 主 学校法人 甲南女子学園

設計・監理 東畑建築事務所

施 工 竹中工務店

●医療・保健

藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院…………… 3

建 築 主 学校法人 藤田学園

設計・監理 大林組名古屋支店一級建築士事務所

施 工 大林組名古屋支店

●金融機関

知多信用金庫 事務センター…………… 3

建 築 主 知多信用金庫

設計・監理 日建・伊藤 設計監理共同企業体

施 工 大林組

知多信用金庫 阿久比支店…………… 3

建 築 主 知多信用金庫

設計・監理 伊藤建築設計事務所

施 工 七番組

岡崎信用金庫 名古屋支店…………… 3

建 築 主 岡崎信用金庫

設計・監理 日建設計

施 工 小原建設

岡崎信用金庫 城下町支店…………… 3

建 築 主 岡崎信用金庫

設計・監理 日建設計

施 工 小原建設

東春信用金庫 江南支店…………… 3

建 築 主 東春信用金庫

設計・監理 伊藤建築設計事務所

施 工 波多野工務店

●オフィスビル・事務所

岐阜トヨタ自動車 本社ビル

金園店ショールーム・サービス工場…………… 3

建 築 主 岐阜トヨタ自動車(株)

設計・監理 伊藤建築設計事務所

施 工 岐建

大日コンサルタント本社屋…………… 3

建 築 主 大日コンサルタント(株)

設計・監理 日建設計

施 工 大日本土木(株)

ケイ・オブティコムビル…………… 4

建 築 主 関電不動産開発(株)

設計・監理 竹中工務店

施 工 竹中工務店

小野薬品工業(株) 東京ビル…………… 9

建 築 主 小野薬品工業(株)

設計・監理 梓設計 関西支社

施 工 大林組・きんでん・テクノ菱和

フソウテクノセンター…………… 11

建 築 主 (株)フソウ

設計・監理 清水建設関西支店一級建築士事務所

施 工 清水建設四国支店

千寿製薬本社…………… 12

建 築 主 千寿製薬(株)

ランドスケープデザイン 光嶋祐介建築設計事務所

設計・監理 清水建設関西支店一級建築士事務所

施 工 清水建設関西支店

●宿泊施設

三交イン伊勢市駅前…………… 3

建 築 主 三重交通(株)、(株)三交イン

設計・監理 (株)東畑建築事務所

施 工 日本土建(株)

ザ ロイヤルパークホテル京都四条…………… 8

建 築 主 三菱地所(株)

設計・監理 竹中工務店

施 工 竹中工務店

ザ・ビー 京都 四条…………… 11

建 築 主 JR西日本不動産開発(株)

設計・監理 大林組大阪本店一級建築士事務所

施 工 大林組

ホテルヴィスキオ大阪…………… 12

建 築 主 JR西日本不動産開発(株)

(株)ジェイアール西日本ホテル開発

設計・監理 竹中工務店(設計)

安井建築設計事務所

(基本設計・設計監修・監理)

施 工 竹中工務店

●マンション

ザ・パークハウス中之島タワー…………… 10

建 築 主 三菱地所レジデンス(株) 住友商事(株)

京阪電鉄不動産(株)

(株)アサヒプロパティズ

設計・監理 竹中工務店大阪一級建築士事務所

施 工 竹中工務店大阪本店

●文化施設

あいち航空ミュージアム…………… 3

建 築 主 愛知県

設計・監理 安井建築設計事務所

施 工 清水・名工特定建設工事共同企業体 他

松下幸之助歴史館…………… 7

建 築 主 パナソニック

設計・監理 竹中工務店(展示・内装 乃村工芸社)

施 工 竹中工務店(展示 乃村工芸社)

●スポーツ施設

津市産業・スポーツセンター サオリーナ／

三重武道館…………… 3

建 築 主 津市

設計・監理 日建設計(設計)・前野建築設計(監理)

施 工 清水・日本土建・東海上建特定建設工事

共同企業体

三重交通G スポーツの杜 伊勢陸上競技場…………… 3

建 築 主 三重県

設計・監理 安井建築設計事務所

施 工 清水・堀崎・伊藤特定建設工事共同体

高浜町立中央体育館…………… 3

建 築 主 高浜町

設計・監理 東畑建築事務所

施 工 清水・山惣ホーム・

弥栄電設特定建設工事共同企業体

●ホール

知多信用金庫 本店営業部・ほしごきホール…………… 3

建 築 主 知多信用金庫

設計・監理 日建・伊藤 設計監理共同企業体

施 工 七番・沢田特定建設工事共同企業体

●研究施設

大光電機技術研究所…………… 2

建 築 主 大光電機(株)

設計・監理 大林組一級建築士事務所

施 工 大林組

ヤマハモーター・イノベーションセンター…………… 3

建 築 主 ヤマハ発動機(株)

設計・監理 日建設計

施 工 安藤ハザマ

●物流施設

プロロジスパーク茨木…………… 6

建 築 主 (株)プロロジス

プロジェクトマネジメント及び企画設計 プロロジス

デザイン監修及び監理監修 昭和設計

設計・監理 清水建設

施 工 清水建設

●営業所

ネットトヨタ中部ブラザ豊田…………… 3

建 築 主 ネットトヨタ中部(株)

設計・監理 伊藤建築設計事務所

施 工 伊藤工務店

施 工 協力

アクト、安成工業、井上硝子店、

太田商事、加藤建装、小池商事、

ティーズ、常盤建工、丸正、ヤマネ、

イダック、カイナン、小松ウォール工業、

近藤鉄筋、双栄建装、永田電機商会、

阪和興業、前田道路、マナック、

マルエム商会、森定興商

●その他

日本特殊陶業(株) ウェルネスセンター…………… 3

建 築 主 日本特殊陶業(株)

設計・監理 大林組名古屋支店一級建築士事務所

施 工 大林組名古屋支店

グローバルゲート…………… 3

建 築 主 ささしまライブ24 特定目的会社

設計・監理 竹中工務店

施 工 竹中工務店

KiTARA(豊田市駅前通り北地区第一種市街地再

開発事業)…………… 3

建 築 主 豊田市駅前通り北地区市街地再開発組合

設 計 日建設計、大成建設一級建築士事務所

監 理 日建設計、大成建設工事監理一級建築士

事務所

施 工 大成・神谷組建設共同企業体

gallery

Geosymbiosis(白鳥 武) 加嶋章博…………… 1

距離感と情緒(角田暁治) 鞆野淳司…………… 2

“わからないこと”にワクワクする空間(塩瀬隆之)

	号
芳谷晴彦	3
よりしろ (田村慶子) 倉渕奈千子	4
スロープの家 (前田 敦) 増田敬彦	5
鳥見町の住宅 (山口陽登) 菊池浩輔	6
坂の上の小家 (緒方幸樹) 澤田純一	7
伊丹の家ー吹き抜けとライブラリーのある家ー (石川裕一) 居内章夫	8
土と石 (福井安紀) 高木秀晃	9
織物の茶室 霞庵 (橋口新一郎) 池上 明	10
ガラスで創る宮沢賢治の世界 (大下邦弘)	
平野尉仁	11
宇奈月温泉総湯 (小原賢一+深川礼子)	
稲垣和江	12

東畑建築事務所創設85周年

理念・創設85周年にあたって / 香西喜八郎	1
History of 85	
東畑建築事務所のこれまで、これから	1
木を活かす 適材適所で木を活かし木造の良さを伝える	1
集いの場をつくる 場をつくり、人が集い新たな価値が生まれる	1
記憶の継承 記憶を受け継ぎ風景をつくる	1
安心の提供 確かな安全の上に一人ひとりの心に響く安心を築く	1
価値の再生 ハード・ソフトの技術を活かし新たな価値を創り出す	1

温泉と暮らす

総論 温泉から見る ～歴史・人・街・文化～ / 松田志徳	1
各論 1 温泉とまちづくり 城崎温泉・木屋町小路プロジェクトを通じて / 後藤春彦	1
各論 2 健康・福祉と温泉 温泉を活用したユニバーサルデザインのまちづくり / 田中直人	1
寄稿 ランプの宿の青荷温泉 / 田中直人	1
寄稿 温泉初心者のお保温泉体験 / 井筒智子	1
寄稿 チーズ有馬温泉 / 内山優子	1
寄稿 金泉、銀泉の有馬温泉 / 田中直人	1
寄稿 三陸の山あいの鄙びの湯・峠の湯追分温泉 / 森 裕史	1
寄稿 城崎温泉の戦略 / 守井 辰	1
寄稿 街全体が一軒の旅館になる黒川温泉 / 田中直人	1
寄稿 二十歳女子3人と混浴した郷土温泉の思い出 / 設楽貞樹	1
寄稿 酸ヶ湯にて / 米井 寛	1
寄稿 八甲田山中にある由緒正しい一軒宿 酸ヶ湯温泉 / 守井 辰	1
寄稿 美肌の姫神の湯の玉造温泉 / 田中直人	1
寄稿 温泉の主の洗礼を受けた道後温泉 / 松田奈緒子	1
寄稿 地中に眠る太古の植物を起源とする十勝川モール温泉 / 守井 辰	1
寄稿 心と体に効くパワースポットの中の秘境温泉 一奈良県十津川温泉 / 勝山太郎	1
寄稿 四季を彩る外湯めぐりの野沢温泉 / 田中直人	1
寄稿 箱根の藤吾、温泉を凌駕する / 松田奈緒子	1
寄稿 桃源郷の温泉「平山温泉」 / 大佐古和代	1
寄稿 別府の贅沢な市営温泉一築80年の木造で五感を癒す / 吉村英祐	1
寄稿 国宝投入堂と三朝温泉 / 松田奈緒子	1
寄稿 大阪郊外の保養地・箕面温泉 / 守井 辰	1
寄稿 山代温泉の総湯 / 飯田 匡	1
寄稿 温泉とケーキ・・・湯の山温泉 / 戸川勝之	1
寄稿 湯布院、由布院温泉 / 大佐古和代	1

第24回会員作品“私の空間作法”

Colors -アーチの森2017-	
/ 水谷俊博+武蔵野大学水谷研究室	2

	号
遊牧民の家 / 新居照和・ヴァサンティ	2
大正ロマンの家 / 岸 一	2
職住一体で自然を楽しむ保養所のリノベーション / 貴志泰正	2
ありのままを引き継ぐ... / 太田栄治	2
緑・水・空と一体化する建築 / 平井浩之	2
松ヶ崎の町家 / 平尾和洋	2
リノベーションを通じて環境に寄り添う / 吉永規夫	2
半島 新築 共同住宅 / 塚口洋之	2
Whale House / 村重保則現代建築設計事務所(株) 東京事務所	2
TWIN-CUBE 研究者と来訪者の交流を最大化する建築 / 平井昌志・古市 理・鬼頭朋宏	2
一つ屋根の下に集う開かれた研究所 / 関山泰忠	2
使い手の柔軟な発想を惹き出しオフィスに多様な価値を生み出す「無用の用」の空間 / 平井浩之・本家公巳子	2
医療環境の変遷に対応する新世代の内科病院 / 中尾勝悦	2

東海支部特集

●東海支部会員作品2018 (作品作風欄既載)	3
●Tokai Sketch Book	3
特集I 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶 第1回「アクテナ」	3
1 名古屋市・稲葉地配水塔・演劇練習館「アクテナ」 / 中井孝幸	3
2 演劇練習館をはじめとする歴史的資源を活かしたまちづくり / 松田和彦	3
3 稲葉地配水塔不死鳥伝説 ～2度生まれ変わった配水塔～ / 小島克生	3
4 配水塔から図書館へ 地域の「記憶」の倉庫 / 中井孝幸	3
5 転用プロセスの特徴と建物各部の関連性 名古屋市演劇練習館「アクテナ」 / 谷田 真	3
6 アクテナの眩き～私はいき続ける～ / 加藤武範	3
特集II 東海支部青年部会における30代前後の若手設計者の意見交換会 (第2回目)「納マリ倶楽部」 / 塩田哲也・中井孝幸・久保久志・三宅伸幸・鈴木豊一郎・小杉嘉文・佐藤 剛・石橋洋二郎	3
●東海の建築：開口	3
空港敷地内に建つミュージアムにおける大扉 あいち航空ミュージアム / 清水 満・西野培夫・築谷朋也	3
内外からの機能を併せ持つ外装スクリーン 岡崎信用金庫 名古屋支店 / 塩田哲也・片桐雄歩	3
まちに開放された無柱のガラス空間 岐阜信用金庫春日井市役所前支店 / 中屋隆史・吉田 敦	3
軽快さと透明感を生み出す石張りの外方立 知多信用金庫本店営業部・ぼしぎきホール / 富田昌志・石橋洋二郎・松本拓也	3
●東海支部だより	3
清里・茅野見学会旅行記 2017年10月8日(日)～10月9日(月・祝) / 平松佳奈	3
清里・茅野建築の旅 / 塩田有紀	3

働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル

座談会 新しい価値は社会の仕組みを変えるー総論にかえてー / 加嶋章博・桑原悠樹・伊藤栄治・東 琢・河野 学・勝山太郎・戸川勝之 <コメント> 渡部 剛	4
各論 1 [団地を整え直す立場から] リノベーションの仕事ーそしてこれからー / 土井睦浩	4
各論 2 [行政の立場から] つながりの中でー行政で働く魅力ー / 吉川玲子	4
各論 3 [建築設計者の立場から] 働くこと考えること 生きることー建築設計の働き方の一つとしてー / 三谷帯介	4
各論 4 [構造設計を楽しんでいる立場から]	

	号
人/境界/社会ーけっこうおもしろいやんー / 村上陸太	4
各論 5 [次世代の現場管理者を育てる立場から] 仕事としての建設業ーこれからの働き方とは、そして現場管理者として求められるものはー / 七條 稔	4
各論 6 [塗料メーカーの営業マンの立場から] ポリシーは「人の役に立つこと」ー33年の営業経験を経てー / 岡田全可	4
各論 7 [建築の保存再生の立場から] 建築の歴史的価値を社会化する / 笠原一人	4
各論 8 [建築と不動産のあいだの立場から] 建築と不動産のあいだで働くことー変化のマネジメントー / 高橋寿太郎	4
各論 9 [ハウスメーカー設計士の立場から] 家づくりを任せてもらえる設計士に / 古山太一	4
各論 10 [地球と共生する生き方を模索する立場から] 建築設計の領域拡張と仕事の価値ーこれからの社会とエネルギーー / 澤 秀俊	4
各論 11 [大学教員の立場から] もしも建築学という分野がなかったらー35年間の教員生活をふりかえるー / 吉村英祐	4

スポーツイベントを支える設備技術

総論 スポーツイベントを支える / 村林 裕	5
設える 1 スポーツ施設の照明設備 / 中山晶人	5
設える 2 スポーツ施設の音響設備 / 明星 稔	5
作る 3 プールのろ過設備 ～競技用プール～ / 野崎英之	5
作る 4 スケートリンクの冷凍システム ～エコ・リンク～ / 関志津男	5
守る 5 大型映像装置を利用した避難誘導設備 ～市立吹田サッカースタジアム～ / 原 大輔	5
守る 6 電保護設備 ～施設内の電気設備の雷対策～ / 酒井志郎	5
守る 7 可搬式緑陰ミストベンチ ～夏季屋外の暑熱対策のための木陰とミストを活用した涼空間の形成～ / 天谷賢児	5
支える 8 水中ロボットカメラ / KEN MAINARDIS (ケン・マイナルディス)	5
支える 9 メガホン型翻訳機 / 広重拓司	5
支える 10 ITで変わるスポーツ観戦 ～新たな観戦体験を生む「VOGO Sport」～ / 小嶋健嗣	5
編集後記 / 有尾清二郎・木谷晃之・北野勝也・佐々木章二・寺井千佳・夏井重行・橋本直樹・榊井貴廣・宮崎ひろ志・森山正和・山本雅洋	5

第1回片岡安賞(日本建築協会論考コンクール) 募集テーマ：これからの建築と社会ーその関係を問う

審査経過および総評 / 審査委員会	6
【第1次審査通過論考】	6
奨励賞 AIがもたらす新たな「知」と社会 / 一居康夫	6
奨励賞 スルーアーキテクチャーー建築・社会・共同体のゆるい関わり合いー / 西野 翔	6
佳作 これからの建築と社会ーその関係を問う / 岡本清文	6
佳作 これからの建築と社会ーその関係を問う / 北村 潤	6
佳作 人びとがつくる『場所』という現象をとらえる / 林田大作	6
佳作 建築と社会の幻想曲 / 伊熊昌治	6

第65回青年技術者

■設計・計画部門	
太田匠哉 / 名古屋市営金城ふ頭駐車場、名古屋センタービルワークプレイス再構築、熱金鋼業熱田賃貸マンション	7
太田裕人 / 三井不動産ロジスティクスパーク日野 (MFLP日野)、イワタニ水素ステーション東京池上ー	7
岡 隆裕 / 六甲学院中学校・高等学校 本館、	

新居浜市総合文化施設・美術館 あかがねミュージアム、 ダイキン工業 テクノロジー・イノベーションセンター	号
金子公亮／金光教大阪センター、松江市総合体育館、 和歌山地方合同庁舎	7
久家一哲／太陽の塔内部再生プロジェクト ー芸術作品から力強くメッセージを発する建築物へー、 御影公会堂耐震改修 ー利用者の思いの詰まった建物を次の世代に引き継ぐー、 川西市市民体育館 ーひと・まち・自然をスポーツでつなぐー	7
芝井健一／PEVEアリーナ「結（むすび）」、 モリの子保育園、藤田保健衛生大学病院	7
下田康晴／長門市新庁舎、上村工業 新中央研究所、 中穂積の家	7
伊達 翔／加古川中央市民病院、日本生命病院、 林病院	7
鶴見博之／銀座3丁目Dビル、丸本組本社ビル、 カネカ未来創造館、吉城園周辺地区保存管理・活用事業	7
鳥海宏太／浜松信用金庫 湖東支店、浜松信用金庫 高丘支店、大垣共立銀行 豊橋支店	7
中島慎一／奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の 魅力創造国際大学校、京都工芸繊維大学旧3号館改修	7
西山尚希／トラスコ中山プラネット大阪「ものづくり工房」、 那覇空港陸内連結ターミナル施設「新しい沖縄の玄関口」	7
松下拓真／瀬戸みどりのまち病院、三重大学医学部 付属病院外来診療棟・外構整備	7
山崎篤史／寺岡整形外科病院、Kビル、川崎医科大学 総合医療センター	7
■構造部門	
赤澤資貴／最上級の安心と安全性とともに想いを「かたち」に した構造計画の追求～深江竹友寮建替計画～	7
朝日智生／新日鐵住金技術開発本部尼崎／守衛所企業イメージを 発信するユニット式薄板構造、神戸学院大学附属高等学校／ 体育棟 単純な接合で構成する確実性の高い多角形フレーム	7
西楨 毅／茶業研究所ー「直交集成板」と「流通製材」による 木造平屋建て研究所	7
野口浩平／2棟の板状マンションを免震層直上で接続した 免震構造	7
花房広哉／制震装置を用いた偏心制御設計	7
宮脇正尚／V字形状を有する免震構造板状集合住宅	7
渡邊 祥／「伊勢」に呼応した架構デザインー三重交通G スポーツの杜 伊勢陸上競技場	7
■設備部門	
小林佑輔／ケイ・オプティコムビルにおける設備計画	7
高根澤武／小学館ビル ー働き方をかたちにした建築・構造・ 設備一体の建築物ー、アクティオホールディングス統括工場 ー 材料と効果のコストバランスー	7
田中祐輔／西新橋スクエア 高レンタル比と室内環境向上の 両立、DLXビルディング デザインと構造・設備の融合	7
中尾善弘／清水建設㈱四国支店における電気設備計画と エネルギー分析	7
中山和樹／最先端省エネルギービルの建設と新しいタスク アンビエント空調の開発	7
貫名篤郎／北九州病院における災害拠点病院における非常時 の自立を支える地産地消の省CO ₂ システム、日東電工茨木事業 所inovasにおける多彩な研究内容にフレキシブルに対応する 設備システム	7
横山輝明／リマニット・モーターー藤田展示場における環 境・設備計画	7
吉成正彦／某電池材料製造工場における最適な空調設備計 画	7
■施工部門	
大川光雄／建築生産におけるBIMを活用した計画と実施	7

熊給哲哉／地下工事計画の合理化による生産性向上	号
異祐太郎／戦略的な合理化による労務3割削減の取り組み	7
杉井 毅／大空間における鉄骨施工と仕上げ計画について	7

平成と建築

総論 平成という時代と建築／倉方俊輔	8
各論1 キーワード：経済 「平成」の新しい経済秩序の中で 生まれた建築は、どんな姿をしていたのだろうか。／馬場正 尊	8
各論2 キーワード：情報技術 建築と情報技術～平成30年 間の動き～／山梨知彦	8
各論3 キーワード：環境 住宅・建築の脱炭素化／田辺新一	8
各論4 キーワード：マスメディア（インタビュー）建築が世 間と対話し始めた平成／西田善太	8
各論5 キーワード：震災 震災が刷新し続ける建築と社会 ／山崎 亮	8
各論6 キーワード：グローバル化 積層する4つの時代を かきなでる～私的平成建築グローバルゼーション物語～ ／村松 伸	8
編集後記／桑原悠樹・神戸嘉也・下坂浩和・中辻浩介・樋 口展寛・松岡英緯・三谷帯介・米山剛史・渡部 剛	8

安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性

総論 木造建築物を取り巻く動向と今後の可能性／五十田博	9
各論1 建築基準法の一部を改正する法律（平成30年改正） の概要／高木直人	9
各論2 糸魚川市大火は何を我々に教えたかー木造密集街区 の延焼危険解消は全国共通の課題ー／関澤 愛	9
各論3 密集市街地での大規模火災事例と課題／安井 昇	9
各論4 飛び火被害に関する火災風洞実験／岩見達也	9
各論5 木造密集市街地における防災まちづくり～神戸市近 隣住環境計画制度の活用～／山本真帆	9
各論6 木造密集地域における消防戦術／中脇進一	9
各論7 耐火木造建築の可能性ー全国初の純木造4階建て 建築事例ー「京都木材会館」／衛藤照夫	9
各論8 木三学で木材利用は円滑化されたかー羽黒高等学 校の経験からー／小泉 治	9
各論9 「木は、新しいコンクリート」ー英国ロンドンにお けるCLT建築設計を通して経験したことー／小見山陽介	9
編集後記／植平浩司・岡田耕介・垣内 明・河野 学・高 田大輔・福岡蒼顕	9

山と建築

ーそこに山があるから登るのだ！ー

総論 山岳建築／土本俊和	10
各論1 日本の山小屋ー建築史の観点からー／梅干野成央	10
各論2 山岳建築の現在～スイスの山里事例～／樋口貴彦	10
各論3 富士山の登山道と山小屋建築／奥矢 恵	10
各論4 伯耆の国三徳山・投入堂と社閨群／生田昭夫	10
各論5 山頂建築の生産性向上ー御在所ロープウェイリニ ュアル工事ー／松村金吾・松谷昌寛・大西直宏	10
各論6 山地の地質リスクと地盤調査／積田清之・宮城康夫	10
各論7 物資を山頂へーヘリコプターによる山岳輸送ー／河 野照行	10

編集後記／高橋秀一・門野 陽・桜井和男・藤丸啓一・山 口紀宏・山崎順二・吉田正友・吉居 哲	10
--	----

重さと関わる

総論 重さを感じる／満田 隆	11
各論1 「重さを定義する」質量の単位「キログラム」の 新しい定義ー130年ぶりの定義改定、さらばキログラム原 器ー／倉本直樹	11
各論2 「重さを測る」宇宙のおもさを測る／身内賢太郎	11
各論3 「重さを見る」重さで魅せる／佐藤 淳	11
各論4 「重さを運ぶ」Polandに火を灯せー1000MW級火力 発電所建設に関する重量物輸送業務に従事してー／渡邊 論	11
各論5 「重さを減らす」軽く、遅しくー軽量化への挑戦ー ／圖子博昭	11
各論6 「重さを減らす」アルミニウムによる土木製品軽 量化の事例／川畑達哉	11
各論7 「重さを減らす」軽量化の追求、時代の変遷／櫻井 正幸	11
各論8 「重さを支える」3次元浮揚免震による震災ゼロ 区域「フロート・シティ」の実現に向けて／安田正志	11
編集後記／宇野綾真・岡田 健・岸本光平・瀧野敦夫・ 角田耕一・菟原 学・松本裕之・宮久保秀樹	11

こだわりの空間料理人

各論1 街並みのアイデンティティとしての窓／塚本晃子	12
各論2 空気にこだわる エアキスと更なる健やかな住環 境創造研究／松下和彦	12
各論3 “らしさ”にこだわる 大阪中津らしさを表現した 空間再編“キタの北ナガヤ”プロジェクト／小野達哉	12
各論4 木造にこだわる～シンプルな木架構による豊かな 建築を目指して～／寺村雄機	12
各論5 庭にこだわる／辰巳耕造、辰巳二郎	12
各論6 インタビュー 東京コルクプロジェクト／北村真吾	12
各論7 ツリーハウスに魅せられて／小林 崇	12
各論8 光にこだわる／池田俊一	12
編集後記／赤川貴世友・今井充彦・岩田圭司・川合隆之・ 河西孝平・黒柳 亮・塚口洋之・ベリー史子	12

法令コーナー

マンション建替え法による容積率緩和特例を許可／中 敦史	1
京都市京町家の保全及び継承に関する条例の制定／関岡孝 繕	2
新耐震基準の木造住宅の耐震性能検証法（新耐震木造住宅 検証法）／（一財）日本建築防災協会 国土交通大臣指定 耐震改修支援センター	3
伝建条例を制定～神戸市北野町山本通伝統的建造物群保 存地区～／鈴木瑤子	4
銀座地区地区計画の変更 宿泊施設に関する基準の規定／ 古地友美	5
健全な民泊サービスの推進に向けてー住宅宿泊事業法の 概要ー／村井香葉	6
容積率等緩和の拡大 大阪府総合設計許可取扱要領の改 正／北尾菜々子	7
歴史的建築物の活用に向けた条例整備ガイドラインの策 定／平山鉄也	8
大規模マンション建設時に保育施設等整備の事前協議を 義務付け／大阪市こども青少年局保育施策部保育企画課	9
歴史的景観の保全 京都市の新しい事前協議（景観デザ インレビュー）制度／上原智子	10
建物被害調査は被災者の不安・要望に応えられているか？ ／石黒一郎	11
奈良県における「民泊」／浅井一学	12

構造の頁

施設をつなぐ縁側モールとアトリウム空間	
ー阿久比町庁舎／／安田拓矢	1
歴史的建築物と一体化した高層建築物	
日本橋ダイヤビルディングの設計／浜田勇氣	3
重要文化財称念寺本堂における耐震補強	
床下長押補強について／矢谷 早	5
「クロスダンパー」による省スペース制震補強	
ー熊本城天守閣復旧整備事業ー／岸 浩行	7
レジリエント構造研究センターの取り組み	
／向井洋	9
モノコック構造による15mキャンチレバー屋根	
ネットトヨタ新大阪高槻店／木原隆志	11

設備の頁

コイズミ緑橋ビル	
DALIを軸にした省エネオフィスビル／松倉想馬	2
最新リモコン事情ー温水洗浄便座／山中章己	4
IoT ホーム Link「Life Assist」／田代達一郎	6
トイレの使用状況を見える化し、利用・管理効率向上	
／宮村香葉	8
モータ状態監視機器の開発／山本幸義	10
無人航空機による三次元形状復元技術を活用した	
災害対策／松浦孝英	12

新製品レビュー・記事広告

新耐震天井工法 ダイケンハイブリッド天井	
／大建工業㈱	2
人が集うまちには「デザイン」がある。／㈱ユニソン	10
「経年変化を楽しむ」デニムフロア	
／田島ルーフィング㈱	12

建築と社会を考える

成熟社会の住環境づくり／鈴木克彦	1
建築的思考の射程／竹山 聖	3

再読 関西の建築

新連載について／山形政昭	5
第1回 サントリー中央研究所 生物医学研究所	
／福岡和則	5
第2回 国立飛鳥資料館／福嶋啓人、三宅拓也	6
第3回 昭和50年の御堂筋／橋寺知子	7
第4回 大阪市中央公会堂／山形政昭	10
第5回 岡田孝男の記録した大阪の幻の茶室	
／桐浴邦夫	11
第6回 太陽の神殿〔黒住教大教殿〕	
／安田徹也	12

対談

中村昌生・池田俊彦対談①	
茶室 ー究める道を歩んで	1

Member's Forum

ヒマラヤの学校建設ーネパール中部大地震からの復興支援を通じてー／野田隆史	1
U-35委員会企画「設計者のしごと」	
ー組織で働くU-35世代と建築ー 活動報告	2
U-35委員会企画 talk baton13 活動報告	3
<第1回建築セミナー>「暮らし」から考える住まいの寸法入門講座／堀野和人	7
特別展「大大阪モダンズムー一片岡安の仕事と都市の文化ー」オープニングセレモニー	8
U-35委員会企画 5th action「建築と未来」活動報告	9
<第2回建築セミナー>雨漏り調査の対策とポイント	
／玉水新吾、唐鎌謙二	10

information

1月～12月掲載

月間の動き・編集委員会委員

2017年11月～2018年10月

特集一覧

1996年～2017年	2
1996年～2017年	5
1996年～2017年	6
1996年～2017年	10

入賞発表

●第63回工高生デザインコンクール	
設計課題・伝統工芸館	
最優秀賞／北田 幹・谷口毅和	1
優秀賞／岸 夕海	1
優秀賞／松下琴音	1
入選／阿部隼人、上野航祐、黒住隆二、千福友里奈、角田広紀、中西梨乃、志智麗未・中田朋伽、和田龍輝	1
●第17回「建築と社会」賞 入賞作品	
【作品部門】	
ヤマウチ メディアイノベーションセンター	
／平卓卓磨、奥山広志	7
阿南市新庁舎／赤木 隆、岡田泰典、木村秀男	7
コイズミ緑橋ビル	
／有田 博、北村仁司、金澤 潤	7
神戸海星女子学院マリア幼稚園	
／坂口武司、齋藤華織	7
【論考部門】	
建築時間論ー1000年の視野から建築を考えるー	
／加藤耕一	7
【審査員特別賞】	
社会と繋がるディテール	
／編集委員会 特別編集委員	7

会告

若き創造者たちへ「第65回青年技術者顕彰」のご案内、平成29年度建築工事実務講習会（本部、東海支部）、建築工事実務講習会（中国支部）、約款の改正について 1
論考コンクール公開プレゼンテーションのお知らせ、若き創造者たちへ「第65回青年技術者顕彰」のご案内、建築工事実務講習会（中国支部） 2
第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）1次審査通過者による公開プレゼンテーション、約款改正のお知らせ、第1回建築セミナー「暮らし」から考える住まいの寸法入門講座、奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校見学会、若き創造者たちへ「第65回青年技術者顕彰」のご案内 3
第64回工高生デザインコンクール作品募集、第1回建築セミナー「暮らし」から考える住まいの寸法入門講座、奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校見学会、U-35委員会企画 5th action「建築と未来」第1回フューチャーセッション 20年後、幸せに「すまう」ご案内 4
第64回工高生デザインコンクール作品募集、平成30年度定時総会、谷直樹氏講演会と会員交流懇親会のご案内、第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）結果発表、第17回学生のための現場見学会「国立循環器病研究センター移転建替整備事業」、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、日本建築協会中国支部主催 若手・新入社員技術講習会、京都支部主催 勉強会「木造の架構とディテール」、奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校見学会、第1回建築セミナー「暮らし」から考える住まいの寸法入門講座 5
会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、平成30年度定時総会、谷直樹氏講演会と会員交流懇親会のご案内、第64回工高生デザインコンクール作品募集、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、第2回建築セミナー日本最大のプロ集団「雨漏り110番」が教える雨漏り調査の対策とポイント、（一社）日本建築協会京都支部主催渡辺安人氏講演会、第1回学生のための現場見学会「国立循環器病研究センター移転建替整備事業」、（仮称）デサントR&Dセンター見学会 6

会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、第2回建築セミナー日本最大のプロ集団「雨漏り110番」が教える雨漏り調査の対策とポイント、定時総会議決のお知らせ、通常理事会議決のお知らせ、臨時理事会議決のお知らせ、定時評議員会議決のお知らせ、平成29年度事業報告、平成29年度決算報告、常設委員会の新設、平成30年度事業計画、平成30年度収支予算、平成30年度日本建築協会役員会務分掌、平成30年度日本建築協会評議員、平成30年度日本建築協会支部長、平成30年度日本建築協会委員、（一社）日本建築協会京都支部 主催渡辺安人氏講演会、第1回学生のための現場見学会「国立循環器病研究センター移転建替整備事業」、（仮称）デサントR&Dセンター見学会、第64回工高生デザインコンクール作品募集、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、第25回会員作品特集号「私の空間作法」作品募集 7
第25回会員作品特集号「私の空間作法」作品募集、第2回建築セミナー日本最大のプロ集団「雨漏り110番」が教える雨漏り調査の対策とポイント、謹んで災害のお見舞いを申し上げます、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、第35回茶室見学会飛雲閣と茶室憶昔席の修理工事現場、京都支部主催勉強会「海外に広がる日本の庭園文化ーその現状と課題ー」、大光電機㈱技術研究所見学会、東海支部主催上海・杭州をめぐる建築の旅 最新作品を訪ねて…、第64回工高生デザインコンクール作品募集、学校及びその周辺の『安全チェック・ボランティア』募集のお知らせ 8
第3回建築セミナー直感で理解する! 構造力学の基本、東海支部主催上海・杭州をめぐる建築の旅 最新作品を訪ねて…、大光電機㈱技術研究所見学会、中国支部主催中堅社員技術講習会、第25回会員作品特集号「私の空間作法」作品募集、第64回工高生デザインコンクール作品募集、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、学校及びその周辺の『安全チェック・ボランティア』募集のお知らせ、会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、第35回茶室見学会飛雲閣と茶室憶昔席の修理工事現場、情報見学小委員会主催講演会JR西日本事業戦略「駅からはじまる魅力あるまちづくり」… 9
生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2018公式ガイドブック販売のお知らせ、生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2018連携事業スペシャルツアー 日本建築協会Presents! 船場・堺筋を歩く、情報見学小委員会主催講演会JR西日本事業戦略「駅からはじまる魅力あるまちづくり」、U-35委員会展示企画&トーク企画のご案内、東海支部主催上海・杭州をめぐる建築の旅 最新作品を訪ねて…、第2回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集要項、会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、第25回会員作品特集号「私の空間作法」作品募集、第3回建築セミナー直感で理解する! 構造力学の基本、京都支部：主催勉強会「歴史的建造物の修理についてー伝統工法の理解と応用ー」 10
「ザ・パークハウス神戸タワー（旧ファミリアホール）」現場見学会、情報見学小委員会主催講演会JR西日本事業戦略「駅からはじまる魅力あるまちづくり」、第3回建築セミナー直感で理解する! 構造力学の基本、第64回工高生デザインコンクール入選者発表ー設計課題：みんなの「こども食堂」ー、2018年建築関係団体合同忘年懇親会、2019年在阪建築15団体合同新年交流会、平成30年度建築工事実務講習会（本部、東海支部）、会誌「建築と社会」の電子化公開に伴う掲載論文、図版、写真等の著作権譲渡のお願い、京都支部：主催勉強会「歴史的建造物の修理についてー伝統工法の理解と応用ー」 11
平成30年度建築工事実務講習会（本部、東海支部）、平成30年度建築工事実務講習会（中国支部）、京都支部 主催 勉強会「京都のまちの色についてー景観を色で考えるー」 12

1

企画展 オブジェクト・ポートレート Object Portraits by Eric Zetterquist



エリック・ゼッタクイスト
《青磁 八角瓶》
2016年
青磁 八角瓶
南宋時代・12-13世紀、官窯
高21.0cm
住友グループ寄贈（安宅コレクション）
撮影 六田知弘

エリック・ゼッタクイスト（1962-）は、1992年までの10年間、現代美術家の杉本博司（1948-）のもとで働きながら現代的な写真表現と東洋の古美術を学び、現在はニューヨークを拠点に活動している。「古陶磁の肖像」とも言える「オブジェクト・ポートレート」は、古陶磁の細部を高度に抽象化したシリーズである。ゼッタクイストはこのシリーズについて「東洋と西洋、そして古代と現代の出会い」だとして、ミニマリズムの作品や、宋磁からの影響を挙げている。彼の写真は、宋時代の山水画を意識したものもあれば、アレクサンダー・コールダー（1898-1976）に代表されるモダニズムの構成を思わせる作品も見られる。彼はこれまでにフィラデルフィア美術館（2014年）やバンコクの東南アジア陶磁美術館（2016年）において、各館の所蔵作品を撮影した「オブジェクト・ポートレート」シリーズの展覧会をおこなってきた。本展は、日本で初めて彼の作品を紹介するものであり、2016年に彼が当館の所蔵品を撮影した34点の写真を、被写体となった陶磁器作品とともに観覧できる。

期 間 2018年12月8日（土）～2019年2月11日（月・祝）
9：30～17：00（12/21～24は19：00まで）

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし12/24、1/14、2/11は開館）、
12/25、12/28～1/4、1/15

会 場 大阪市立東洋陶磁美術館
大阪市北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055

観 覧 料 一般600円、高大生360円

* 中学生以下無料

* 障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

* 大阪市内在住の65歳以上の方は無料（要証明）

2

洋菓子の道具たち —型で味わうお菓子の歴史—

チョコレートやクッキー、キャンディーにケーキ。文明開化によって西洋からもたらされた洋菓子は、150年の時を経て日本人にも身近な存在になった。その洋菓子をつくる職人パティシエの活躍が近年話題になるが、彼らを使う菓子作りの道具に奥深い歴史と造形の魅力があることはあまり知られていない。

洋菓子作りの道具は種類に応じてさまざまなバリエーションがある。なかでも注目なのが、菓子の全体的なカタチを決定する「型」である。歴史的な図像を彫り込んだ古めかしい木型や美しい光沢を生み出すための金型など、その美しく可愛らしい造形は見ていると飽きることがない。

本展ではエーデルワイスミュージアムが長年にわたって収集したヨーロッパ各地の製菓器具コレクションの中から、型を中心とした貴重な資料が展示される。あわせて装飾に凝った華やかな菓子容器や現代のパティシエがつくり出す最高峰の工芸菓子「ピエスモンテ」も紹介される。

芸術品と呼ぶにふさわしい数々の菓子道具を通して、ヨーロッパの歴史の中でしっかりと根付いている菓子作りの文化の奥深さを堪能することができる。



チョコレート型：エーデルワイスミュージアム蔵

期 間 2018年12月15日（土）～2019年1月27日（日）

9：30～16：30

※入館は16：00まで

休 館 日 月曜日（ただし12/24、1/14は開館）、
12/25、12/29～1/3、1/15

会 場 竹中大工道具館1Fホール
神戸市中央区熊内町7-5-1
TEL.078-242-0216

観 覧 料 一般500円、高大生300円、65歳以上200円
（常設展観覧料含む）

* 中学生以下無料

3

特別展 明治150年記念
日本を変えた千の技術博



「エジソン クラスM」
エジソンが明治天皇に献上した蓄音機
所蔵：国立科学博物館

明治改元から150年、そして2019年に予定される改元。
時代が転換するこの機会にあわせて日本を大きく変えていった科学・技術の成果が一堂に集まる。

日本各地の大学・研究機関や企業などから、600を超える点数の貴重な科学・技術の遺産が上野の国立科学博物館に集合。

科学者・技術者の発明・発見にまつわるエピソードや世相、関連する写真などを合わせ、「日本を変えた千の技術」がたっぷりと紹介される。

中でも、「重要文化財」や、「化学遺産」、「機械遺産」、「情報処理技術遺産」、「でんきの礎」、「未来技術遺産」に認定された約50点の資料は特に注目である。

期 間 2019年3月3日(日)まで

9:00~17:00

(金・土曜日は20:00まで)

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(ただし12/24、1/14、2/11、2/25は開館)、
12/28~1/1、1/15、2/12

会 場 国立科学博物館(東京・上野公園)

東京都台東区上野公園7-20

TEL.03-5777-8600(ハローダイヤル)

観 覧 料 一般・大学生1,600円、小中高生600円

*未就学児無料

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

4

フィリップス・コレクション展

米国で最も優れた私立美術館の一つとして知られるワシントンのフィリップス・コレクションは、裕福な実業家の家庭に生まれ、高い見識を持つコレクターであったダンカン・フィリップス(1886-1966)の旧私邸であった場所に位置しており、2018年には創設100周年を迎える。1921年にはニューヨーク近代美術館よりも早く、アメリカでは近代美術を扱う最初の美術館として開館した。フィリップ



フランシスコ・デ・ゴヤ
《ペテロの悔恨》1820-24年頃
油彩/カンヴァス
フィリップス・コレクション蔵
The Phillips Collection

スの常に鋭い取捨選択によって、コレクションの中核をなす作品群はいずれも質の高いものばかりである。本展では、この世界有数の近代美術コレクションの中から、アングル、コロ、ドラクロワ等19世紀の巨匠から、クールベ、近代絵画の父マネ、印象派のドガ、モネ、印象派以降の絵画を牽引したセザンヌ、ゴーガン、クレ、ピカソ、ブラックらの秀作75点を展覧する。

期 間 2019年2月11日(月・祝)まで

10:00~18:00(祝日を除く金曜、第2水曜、会期最終週平日は21:00まで)

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(ただし祝日・振替休日の場合、会期最終週とトークフリーデーの1/28は開館)、12/31、1/1

会 場 三菱一号館美術館

東京都千代田区丸の内2-6-2

TEL.03-5777-8600(ハローダイヤル)

観 覧 料 一般1,700円、高大生1,000円、小中生500円

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は半額

本欄掲載の1~4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(82円)を日本建築協会事務局までお送りください。

常任理事会

第5回常任理事会

10月24日(水) 16:00~17:30

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか7名

- 議 事 (1) 平成30年度上半期事業執行状況
 (2) 平成30年度上半期収支予算執行状況
 (3) 来年6月総会講演会の講師推薦
 (4) 委員会規程の改正
 (5) 第64回工高生デザインコンクール審査結果
 (6) 建築関係団体合同忘年懇親会及び在阪建築15団体合同新年交礼会
 (7) 出版委員会新刊発行「図解建築と設備の接点 トラブル予防のツボ」
 (8) イケフェス大阪2018「スペシャルツアー船場・堺筋を歩く」
 (9) 第2回論考コンクール応募状況
 (10) 契約約款委員会95周年記念パーティ

編集委員会

第7回広告企画・編集合同委員会

10月16日(火) 18:20~19:30

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか3名

- 議 事 (1) 11月号特集 重さと関わる
 (2) 12月号特集 (仮) こだわりの空間料理人
 (3) 1月号特集 共生社会のまちづくり(仮)
 (4) 2月号特集 第25回私の空間作法
 (5) 3月号特集 東海支部特集
 (6) 4月号特集 広告特集

第7回構造分科会

10月15日(月) 18:30~19:30

日本建築協会会議室

出席者 角田幹事ほか5名

- 議 事 (1) 構造の頁の企画
 (2) 2019年特集の企画

第6回設備分科会

10月3日(水) 18:00~19:10

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか7名

- 議 事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 2019年度特集について

第4回施工材料分科会

10月10日(水) 17:00~17:45

日本建築協会会議室

出席者 高橋幹事ほか3名

- 議 事 (1) 2018年特集の振り返り
 (2) 次期幹事選出
 (3) 次期スケジュール確認

第6回作品作風小委員会

10月25日(木) 19:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 加嶋委員ほか4名

- 議 事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

出版委員会

第6回出版委員会

10月23日(火) 18:00~19:15

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか6名

- 議 事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍
 (3) 今後の出版テーマ
 (4) 建築セミナー

教育委員会

第1回工高生教育小委員会

10月4日(木) 18:00~19:15

日本建築協会会議室

出席者 谷口小委員会委員長ほか5名

- 議 事 (1) 第64回工高生デザインコンクール応募作品の予備審査

(2) 審査会、表彰式の役割分担

第2回講習会小委員会

10月29日(月) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 阿字地委員ほか5名

- 議 事 (1) 平成30年度建築工事実務講習会実施について
 (2) 次年度のテキスト改定と講師交代について
 (3) 阿字地委員交代

大阪府住まい・まちづくり普及協議会全体会議

10月19日(金) 10:30~12:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

1. 出前講座について
 (1) 放課後保育事業者から求めのあった防災の授業について
 (2) マニュアル作りについて(補助金対応版の報告)
 (3) 安全チェック・ボランティアについて(今後の対応)
 (4) その他

未来創生プロジェクト

第7回建築次世代委員会

10月17日(水) 18:35~20:00

日本建築協会会議室

出席者 菅原小委員長ほか3名

- 議 事 (1) 第2回現場見学会の検討
 (2) 新パンフレットの検討

第7回2040委員会

10月24日(水) 19:30~

日本建築協会会議室

出席者 駒井リーダーほか4名

- 議 事 (1) 企画内容
 (2) 今後の委員会活動

2040委員会

10月10日(水) 15:00~17:30

パナソニック㈱本社

出席者 駒井リーダーほか7名

岡崎氏ほかとのトークセッション

2040委員会

10月19日(金) 17:30~19:30

東畑建築事務所

出席者 駒井リーダーほか5名

家入氏とのトークセッション

第9回U-35委員会

10月11日(木) 19:30~

山下設計会議室

出席者 宮武リーダーほか10名

- 議 事 (1) 活動/予定
 (2) 次回予定/その他

U-35委員会

「設計者のしごと」一組織で働くU-35世代と建築—

10月28日(日) 13:00~17:00

委 員 宮武リーダーほか14名

参加者 60名

活動紹介パネル展示/トークイベント

U-35委員会(分科会)

10月4日(木) 19:30~

東畑建築事務所

出席者 宮武リーダーほか8名

- 議 事 (1) AAF発表について
 U-35委員会(分科会)

10月26日(金) 20:00~

安井建築設計事務所

出席者 宮武リーダーほか8名

議 事 (1) AAF発表について

連携事業

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2018
 スペシャルツアー日本建築協会Presents! 船場・堺筋を歩く

10月27日(土) 13:30~16:30

阪口委員(情報見学小委員会)ほか6名

参加者 28名

案内人 山形政昭大阪芸術大学建築

学科教授

橋寺知子関西大学環境都市

工学部准教授

編集委員会(平成30年度)

■副会長

米井 寛

■編集担当理事

木谷 晃之

○勝山 太郎

北野 勝也

佐藤 榮一

佐々木章二

杉本 浩

寺井 千佳

竹中 統一

夏井 重行

西 博康

△橋本 直樹

松崎 公一

梶井 貴廣

船越 淳久

宮崎ひろ志

吉村 英祐

森山 正和

山本 雅洋

■副委員長

○戸川 勝之

■施工材料分科会

門野 陽

■特集小委員会

桜井 和男

■計画分科会

★計画系

高橋 秀一

飯田 匡

藤丸 啓一

鈴木 克彦

山口 紀宏

△田中 直人

山崎 順二

松田奈緒子

吉田 正友

守井 辰

△吉居 哲

吉村 英祐

■法令分科会

植平 浩司

★建築計画系

岡田 耕介

△桑原 悠樹

△垣内 明

下坂 浩和

河野 学

中辻 浩介

高田 大輔

東 拓郎

福岡 誉顕

樋口 展寛

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

★インテリア・住系

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉瀬奈千子

川合 隆之

澤田 純一

河西 孝平

高木 秀晃

△黒柳 亮

榎野 淳司

塚口 洋之

西田 佳代

ベリー史子

芳谷 晴彦

■構造分科会

宇野 綾真

岡田 健

岸本 光平

瀧野 敦夫

△角田 耕一

小川 雄介

種原 学

金築 雄

松本 裕之

小山 昭

宮久保秀樹

野山 将男

向井 洋一

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2018年11月28日

発行 2018年12月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aj.or.jp



THE DENIM FLOOR DML-101

本物のデニムがフロアで育つ。

正真正銘のデニム生地を、置き敷きビニル床タイルに組み合わせました。

味わい深いデニムが醸し出す経年変化の魅力を、インテリアとして楽しむことができる、

まったく新しい床材です。



www.tajima.jp

デニムフロア 特許出願中